

『地域における障害者スポーツ普及促進事業
(障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究)』

報 告 書

平成 30 年 3 月

笹川スポーツ財団

目次

<u>I. 調査概要</u>	1
1 事業の目的	3
2 調査の内容	3
3 事業の実施体制	3
<u>II. 調査報告</u>	5
(1) <u>障害児・者のスポーツライフに関する調査</u>	7
主な調査結果	9
1) 調査概要	10
2) 調査結果（インターネット調査）	12
(2) <u>障害のある人となない人が一緒に行うスポーツ大会に関する調査</u>	61
1) 調査概要	63
2) 調査結果（ヒアリング調査）	65
3) 調査結果（海外事例）	98
4) 調査結果（大会一覧）	102
<u>III. まとめと考察</u>	105
<u>IV. 参考文献・付録</u>	115

注)「しょうがい」の用語は、「障がい」「障碍」などがあるが、本報告書では、法律上の「障害」を使用した。

I. 調査概要

I. 調査概要

1. 事業の目的

2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を成功に導き、日本各地において障害の有無にかかわらずスポーツを行うことができる社会を実現するためには、地域における障害者スポーツの普及促進が喫緊の課題となっている。しかしながら、現在、障害者(成人)の週一日以上のスポーツ実施率が 19.2%にとどまり、各地域においても、スポーツ施策として障害者スポーツに取り組むための方策や体制等は、必ずしも十分な状況ではない。本事業では、地域において障害者が継続的にスポーツに参加できる環境の整備を促進するため、障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究を実施する。

2. 調査の内容

(1) 障害児・者のスポーツライフに関する調査

全国の障害者及び障害者を家族にもつ方々を対象に、障害に関する基本情報、スポーツ・レクリエーション活動実施状況(実施種目、頻度、目的)、スポーツ実施における障壁、今後行いたいと思うスポーツ・レクリエーション、スポーツクラブや同好会・サークルへの加入、過去1年間のスポーツ観戦などの実態を調査

(2) 障害のある人となない人が一緒に行うスポーツ大会に関する調査

障害のある人となない人が一緒に参加できる地域のスポーツ大会の開催状況と運営体制の実態を調査

3. 事業の実施体制

(1) 事務局

澁谷 茂樹	笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所	主席研究員
小淵 和也	〃	主任研究員
上 梓	〃	研究員

注)平成24年度～28年度に公益財団法人笹川スポーツ財団が文部科学省・スポーツ庁から受託した事業については、以下の略称を使用することとする。

- 平成24年度 文部科学省『健全者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業(地域における障害者のスポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究)』報告書
(略称)平成24年度調査
- 平成25年度 文部科学省『健全者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業(地域における障害者のスポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究)』報告書
(略称)平成25年度調査
- 平成26年度 文部科学省『健全者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業(地域における障害者のスポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究)』報告書
(略称)平成26年度調査
- 平成27年度 スポーツ庁『地域における障害者スポーツ普及促進事業(障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究)』報告書.
(略称)平成27年度調査
- 平成28年度 スポーツ庁『地域における障害者スポーツ普及促進事業(障害者のスポーツ参加における障壁等の調査分析)』報告書.
(略称)平成28年度調査

II. 調查報告

(1) 障害児・者のスポーツライフに関する調査

主な調査結果

週 1 日以上スポーツ・レクリエーションの実施は、7～19 歳が 29.6%、成人が 20.8%

障害児・者が週 1 日以上、何らかのスポーツ・レクリエーションを実施していたのは、7～19 歳が 29.6%、成人が 20.8%だった。障害種別では、7～19 歳では、発達障害の約 4 割が週 1 日以上スポーツ・レクリエーションを実施しているのに対して、精神障害では約 2 割、肢体不自由(車椅子必要)(車椅子不要)では 2 割以下だった。成人では、ほとんどの障害で約 2 割だったが、肢体不自由(車椅子必要)では約 1 割だった。【図表 1-18、1-20】

過去 1 年間に実施したスポーツ・レクリエーションの上位種目は、7～19 歳が水泳、散歩、体操、成人が散歩、ウォーキング、水泳

過去 1 年間にスポーツ・レクリエーションを実施した人が行った種目は、7～19 歳では「水泳」「散歩(ぶらぶら歩き)」が多く、成人では「散歩(ぶらぶら歩き)」「ウォーキング」が多かった。【図表 1-27、1-28】

スポーツ・レクリエーションを行う主な目的は、健康の維持・増進、気分転換・ストレス解消のため

スポーツ・レクリエーションは、主に「健康の維持・増進のため」「気分転換・ストレス解消のため」を目的に実施されている。障害種別では、肢体不自由では、「リハビリテーションの一環として」が約 1 割以上を占め、知的障害では「目標や記録への挑戦のため」が 10.9%とほかの障害と比べて高かった。【図表 1-32、1-34】

スポーツ・レクリエーションを行う施設は、公共スポーツ施設の体育館、プール(屋内)、グラウンド

スポーツ・レクリエーションのために利用したことがある施設は、「公共スポーツ施設の体育館」「公共スポーツ施設のプール(屋内)」「公共スポーツ施設のグラウンド」が多かった。「その他」では、「デイケア・デイサービス」「病院・病院周辺」「自宅・自宅周辺」「公園」などであった。【図表 1-38】

半数の障害児・者がスポーツ・レクリエーションに関心がない

スポーツ・レクリエーションの取組に対して、「特にスポーツ・レクリエーションに関心はない」との回答が 51.5%を占めており、2 人に 1 人の障害児・者がスポーツ・レクリエーションに無関心であった。知的障害では、約 6 割が無関心であり、重度の障害者を障害種別に見ると、視覚障害では 32.7%が「スポーツ・レクリエーションを行いたいと思うができない」となり、本人の興味・関心があるが実施できていない実態が明らかになった。【図表 1-39、1-41、1-42】

重度障害者のスポーツ・レクリエーション実施の障壁は、交通手段・移動手段がない

スポーツ・レクリエーションの実施において障壁となっているものは、「特になし」が 37.3%で、障壁があると回答した中では、「金銭的な余裕がない」(21.5%)が最も多く、次いで「体力がない」(20.9%)、「時間がない」(14.2%)、「交通手段・移動手段がない」(9.4%)、「仲間がいない」(8.8%)であった。重度の障害者を障害種別に見ると、肢体不自由(車椅子必要)、視覚障害、知的障害、発達障害、精神障害において、「交通手段・移動手段がない」が 1 位であった。【図表 1-45、1-47】

1. 調査概要

1. 1 調査目的

本調査は、全国の障害児・者のスポーツ・レクリエーション活動の実施状況やニーズを把握し、今後の障害児・者へのスポーツ環境の提供に関する基礎情報を得ることを目的とする。

1. 2 調査方法及び回収結果

(1) 調査方法

無記名式のインターネット調査

(2) 調査内容

主な調査項目は、以下のとおりである。

- ・ 障害児・者の基本情報(障害の種類、障害者手帳の保有状況など)
- ・ スポーツ・レクリエーションの実施状況(実施種目、頻度、施設、目的など)
- ・ スポーツ・レクリエーションの実施における障壁
- ・ 今後行いたいと思うスポーツ・レクリエーション
- ・ スポーツクラブや同好会・サークルへの加入
- ・ 過去1年間のスポーツ観戦

(3) 調査対象及び回収結果

インターネット調査会社が保有するリサーチモニターのうち、以下に該当する者を調査対象とした。

- ・障害児・者本人あるいは同居する家族で障害児・者がいる
- ・障害児がいる場合、7歳以上である

該当する回答者は5,909人であった。その属性は以下のとおりである(図表1-1、図表1-2、図表1-3)。兄弟、姉妹、第2子以降の子で障害児・者が複数いる場合は、それぞれ年齢が一番上の者についてのみ、回答を依頼した。その結果、回答者本人及び同居する家族内の障害児・者を含めた障害児・者の総数は8,094人であった。

図表 1-1 回答者の居住地

(N=5,909)

居住地	%
北海道地方	5.4
東北地方	5.7
関東地方	37.5
中部地方	15.1
近畿地方	20.4
中国地方	5.2
四国地方	2.3
九州地方	8.5

図表 1-2 回答者の年齢

(N=5,909)

年齢	%
19 歳以下	1.1
20～29 歳	7.8
30～39 歳	18.4
40～49 歳	31.4
50～64 歳	33.9
65～74 歳	6.6
75 歳以上	0.8

図表 1-3 回答者の性別

(N=5,909)

性別	%
男性	58.7
女性	41.3

(4) 調査期間

2017 年 9 月 1 日～2017 年 9 月 30 日

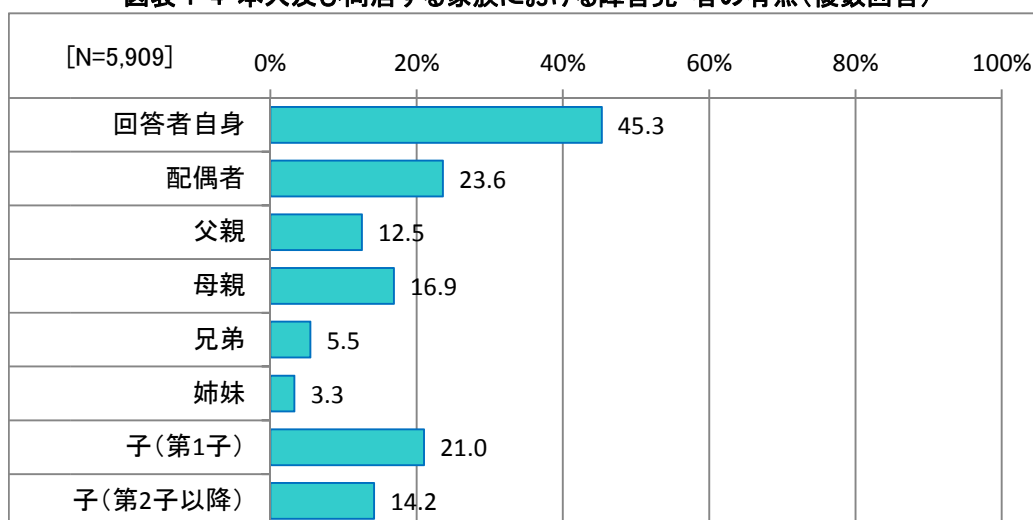
2. 調査結果

2. 1 障害児・者の属性

(1) 本人あるいは同居する家族における障害児・者の有無

回答者本人あるいは同居する家族に障害児・者がいるかについて、「回答者自身」(45.3%)が最も多く、次いで「配偶者」(23.6%)、「子(第1子)」(21.0%)であった(図表 1-4)。

図表 1-4 本人及び同居する家族における障害児・者の有無(複数回答)

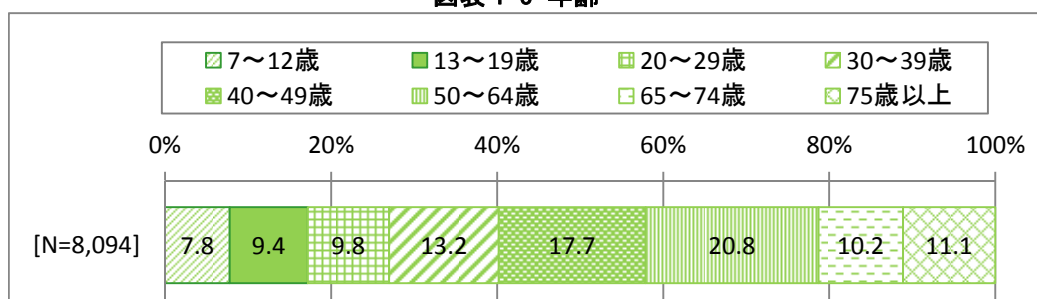


以後の報告では、障害児・者本人及び同居する障害児・者 8,094 人に関する回答結果を示す。

(2) 年齢

年齢は、7～19 歳が 17.2%、20～64 歳が 61.5%、65 歳以上が 21.3%であった(図表 1-5)。総務省の人口推計(2016 年 10 月 1 日)では、7～19 歳が 12.3%、20～64 歳が 58.8%、65 歳以上が 28.9%であった。本調査の障害児・者の年齢分布は、国民全体と比べると高齢者の割合が低くなっている。

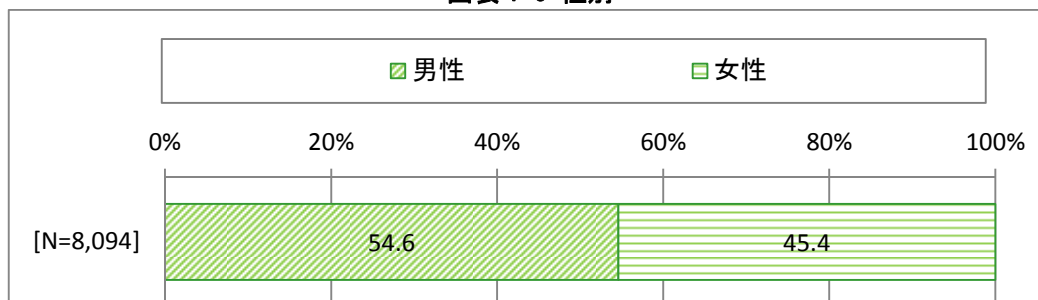
図表 1-5 年齢



(3) 性別

性別は、「男性」が 54.6%、「女性」が 45.4%であった(図表 1-6)。

図表 1-6 性別

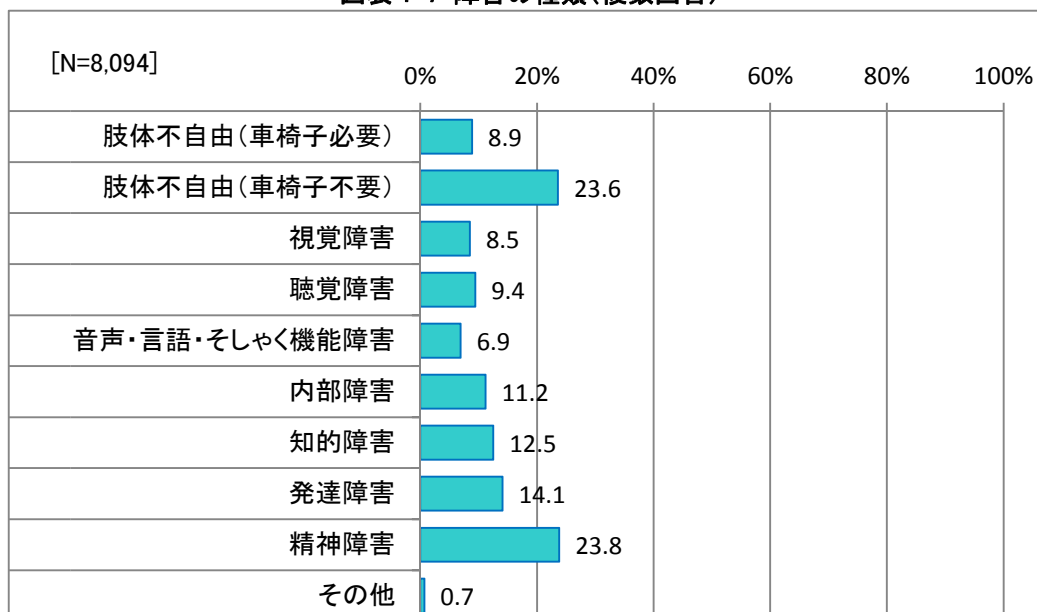


(4) 障害の種類

障害の種類は、「肢体不自由」が最も多く、日常生活で車椅子を必要とする人(8.9%)と必要としない人(23.6%)を合わせると、回答者の3分の1を占めた。以下、「精神障害」(23.8%)、「発達障害」(14.1%)、「知的障害」(12.5%)の順となっている(図表 1-7)。内閣府「障害者白書」(2017)によると、わが国の身体障害児・者は約 392 万 2,000 人、知的障害児・者は約 74 万 1,000 人、精神障害児・者は約 392 万 4,000 人となっている。

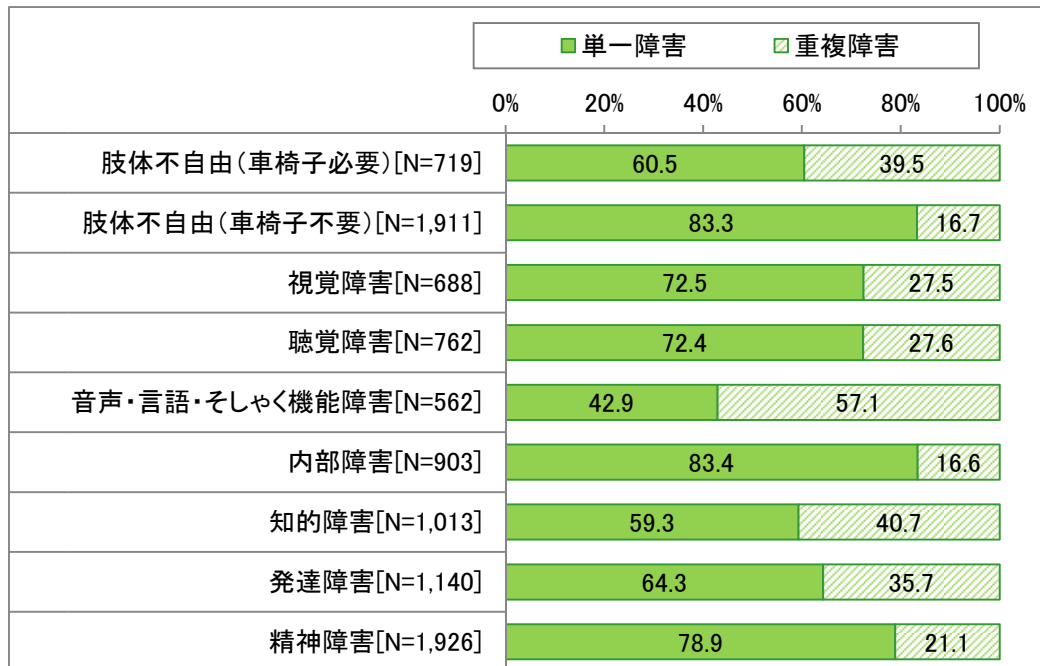
重複障害の割合を障害種別に見ると、「音声・言語・そしゃく機能障害」が 57.1%と最も高く、「知的障害」「肢体不自由(車椅子必要)」でも、ほかの障害に比べて重複障害の割合が高い傾向が見られた(図表 1-8)。

図表 1-7 障害の種類(複数回答)



注) 車椅子必要／不要とは、日常生活で車椅子を必要とする／必要としないこと。

図表 1-8 単一障害・重複障害の比率



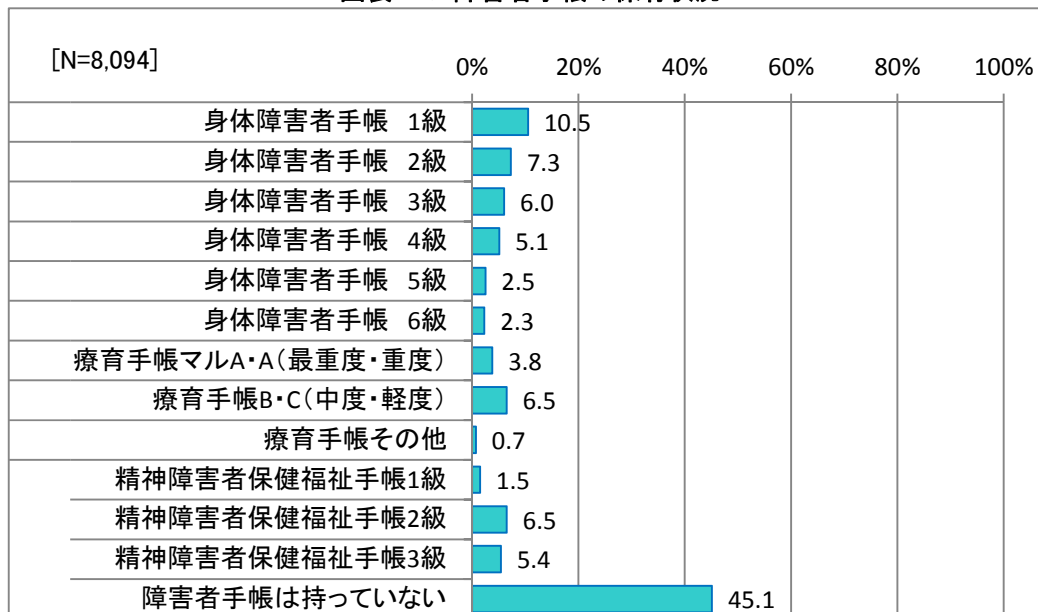
注)車椅子必要／不要とは、日常生活で車椅子を必要とする／必要としないこと。

(5) 障害者手帳の保有状況について

障害者手帳の保有状況について、「障害者手帳は持っていない」が 45.1%であった。障害者手帳を持っている人の中では、「身体障害者手帳 1 級」(10.5%)が最も多く、次いで、「身体障害者手帳 2 級」(7.3%)、「療育手帳B・C(中度・軽度)」精神障害者保健福祉手帳2級」(6.5%)であった(図表 1-9)。身体障害者手帳では、等級が高いほど保有率が高い傾向が見られた。障害種別の障害者手帳の保有状況からは、重複して手帳を保持していることが分かる(図表 1-10)。

年齢別に見ると、65 歳以上の身体障害者手帳の保有がほかの年齢層に比べて高く、療育手帳は 29 歳以下の保有が高く、精神障害者保健福祉手帳では、年齢による差は見られなかった(図表 1-11)。

図表 1-9 障害者手帳の保有状況



図表 1-10 障害者手帳の保有状況(障害種別)

(%)

	肢体不自由(車椅子必要)	肢体不自由(車椅子不要)	視覚障害	聴覚障害	知的障害	発達障害	精神障害	その他(音声・言語・そしゃく機能障害や内部障害を含む)
	N=719	N=1,911	N=688	N=762	N=1,013	N=1,140	N=1,926	N=1,470
身体障害者手帳 1 級	35.7	6.9	16.6	8.5	10.3	4.5	3.2	28.0
身体障害者手帳 2 級	16.1	10.8	12.8	13.8	4.9	2.7	3.9	7.2
身体障害者手帳 3 級	8.5	8.3	8.0	7.1	3.6	2.4	2.4	9.8
身体障害者手帳 4 級	6.4	8.7	5.8	6.6	1.9	1.4	1.6	8.0
身体障害者手帳 5 級	3.2	4.6	4.8	2.8	1.7	1.1	1.0	3.3
身体障害者手帳 6 級	0.8	4.2	1.7	6.8	1.3	0.4	0.6	2.6
療育手帳マル A・A(最重度・重度)	5.7	1.7	1.7	2.8	24.7	6.9	1.4	3.2
療育手帳 B・C(中度・軽度)	1.1	0.9	1.7	2.2	35.1	18.8	3.1	2.1
療育手帳その他	0.3	0.5	0.1	0.3	2.3	2.2	0.3	0.4
精神障害者保健福祉手帳 1 級	1.4	0.3	0.4	0.4	2.0	1.3	4.2	0.8
精神障害者保健福祉手帳 2 級	1.0	1.5	1.3	0.7	2.4	9.4	23.4	1.2
精神障害者保健福祉手帳 3 級	0.8	0.9	1.2	0.5	3.1	9.3	17.4	1.2
障害者手帳は持っていない	28.0	54.5	48.1	51.7	19.0	45.4	41.8	36.7

注 1) 車椅子必要／不要とは、日常生活で車椅子を必要とする／必要としないこと。

注 2) 重複障害の場合は、該当の障害全ての数値に含む。

図表 1-11 障害者手帳の保有状況(年齢別)

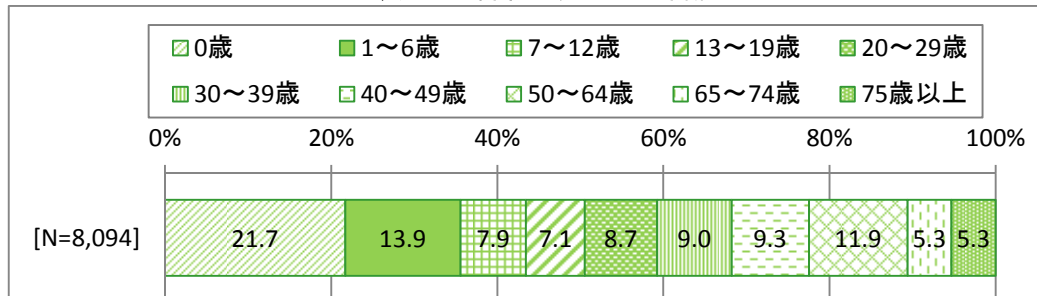
(%)

	19 歳以下	20～29 歳	30～39 歳	40～49 歳	50～64 歳	65～74 歳	75 歳以上
	N=1,394	N=790	N=1,068	N=1,430	N=1,686	N=825	N=901
身体障害者手帳 1 級	5.5	7.3	8.2	9.2	12.0	14.8	18.8
身体障害者手帳 2 級	2.7	4.7	6.9	6.9	8.8	11.9	10.5
身体障害者手帳 3 級	2.7	4.6	4.3	5.4	7.5	9.0	9.9
身体障害者手帳 4 級	2.2	2.7	3.0	4.3	7.5	8.7	7.4
身体障害者手帳 5 級	1.8	1.6	1.9	2.2	4.0	3.2	2.2
身体障害者手帳 6 級	1.4	1.6	1.9	2.4	3.3	2.4	3.0
療育手帳マル A・A(最重度・重度)	8.6	11.5	4.5	1.7	0.7	1.0	0.7
療育手帳 B・C(中度・軽度)	18.6	15.9	6.8	3.1	0.9	1.1	0.3
療育手帳その他	1.7	1.0	1.1	0.6	0.2	0.1	0.3
精神障害者保健福祉手帳 1 級	0.9	2.3	1.6	1.3	1.1	1.7	2.3
精神障害者保健福祉手帳 2 級	2.7	7.1	10.4	11.1	7.7	3.2	1.2
精神障害者保健福祉手帳 3 級	2.8	6.2	6.8	9.5	6.5	2.8	0.9
障害者手帳は持っていない	52.9	39.5	46.5	45.2	41.9	42.5	44.3

(6) 障害が発生した年齢

障害が発生した年齢は、「0 歳」が 21.7%、「1～6 歳」が 13.9%で、出生前・出生時や小学校就学前が全体の 3 割以上を占めている(図表 1-12)。また、40 歳以降に障害が発生した人も 3 割を超えており、障害が発生した年齢は多様であることが分かる。

図表 1-12 障害が発生した年齢



注)複数の障害がある場合は、最初に障害が発生した年齢を回答。

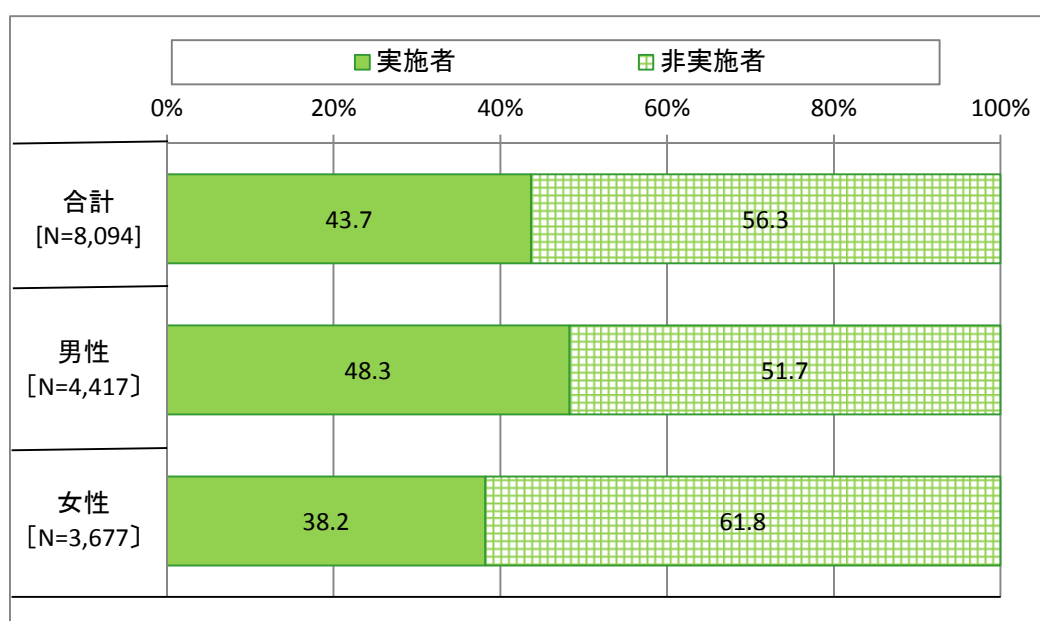
2. 2 スポーツ・レクリエーションの実施

(1) 過去 1 年間のスポーツ・レクリエーションの実施の有無

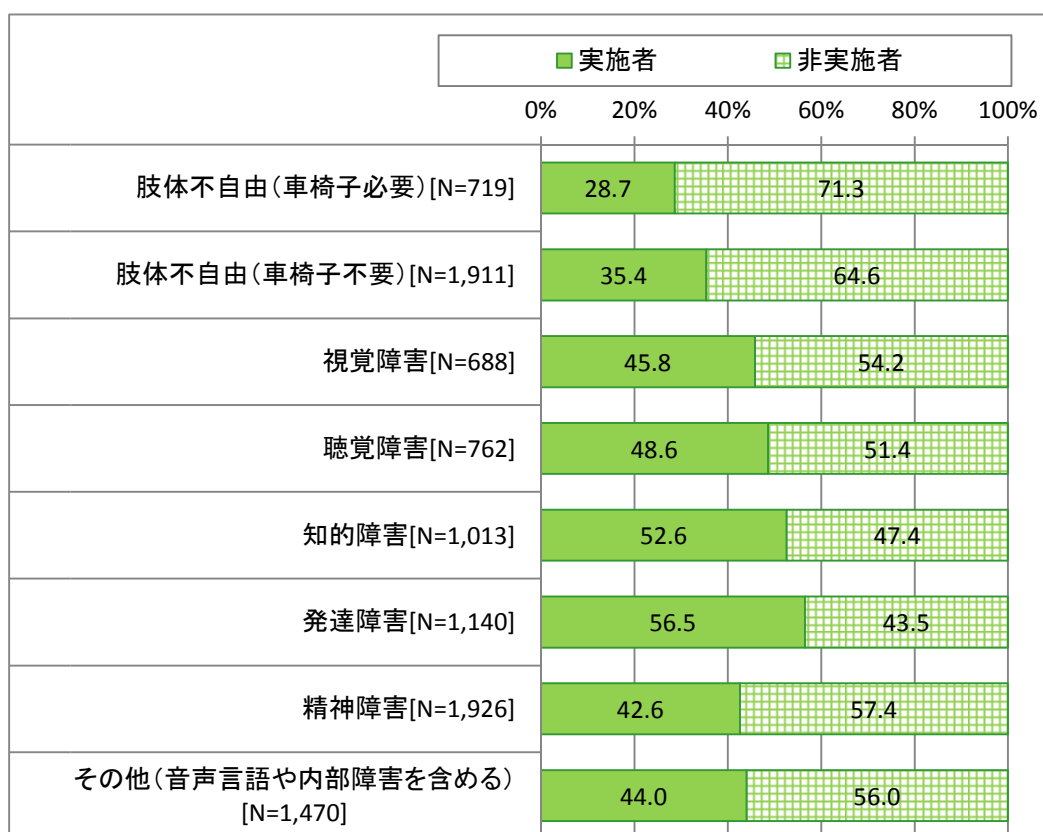
過去 1 年間のスポーツ・レクリエーションの実施の有無について、実施者が 43.7%であった(図表 1-13)。平成 27 年度調査の結果では、42.5%であった。笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」(2016)によると、成人の年 1 回以上の運動・スポーツ実施者の割合は 72.4%となっており、障害児・者のスポーツ実施率は一般に比べて低いことが分かる。

障害種別に見ると、肢体不自由(車椅子必要)(28.7%)、肢体不自由(車椅子不要)(35.4%)の実施率が低い一方で、発達障害(56.5%)、知的障害(52.6%)の実施率が高かった(図表 1-14)。全ての障害種において、女性より男性の実施率が高かった(図表 1-15)。

図表 1-13 過去 1 年間のスポーツ・レクリエーションの実施の有無

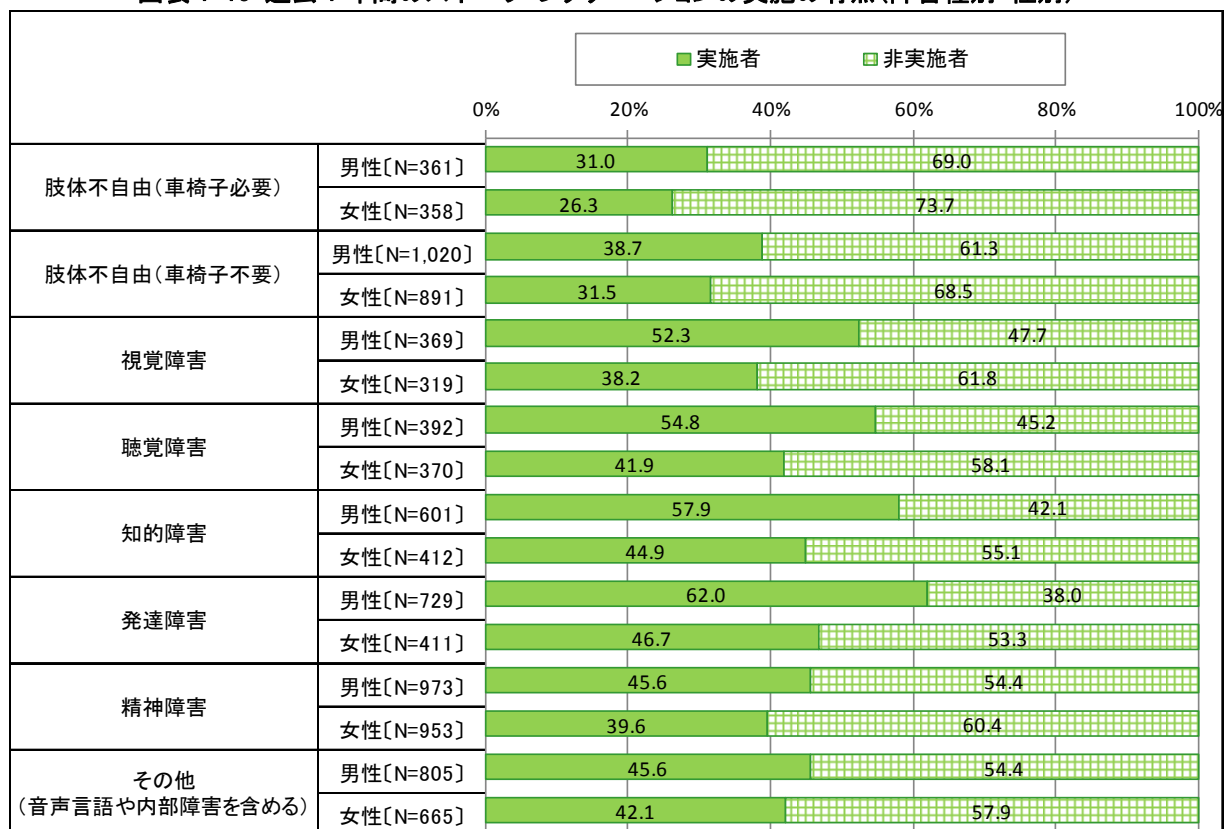


図表 1-14 過去 1 年間のスポーツ・レクリエーションの実施の有無(障害種別)



注)車椅子必要／不要とは、日常生活で車椅子を必要とする／必要としないこと。

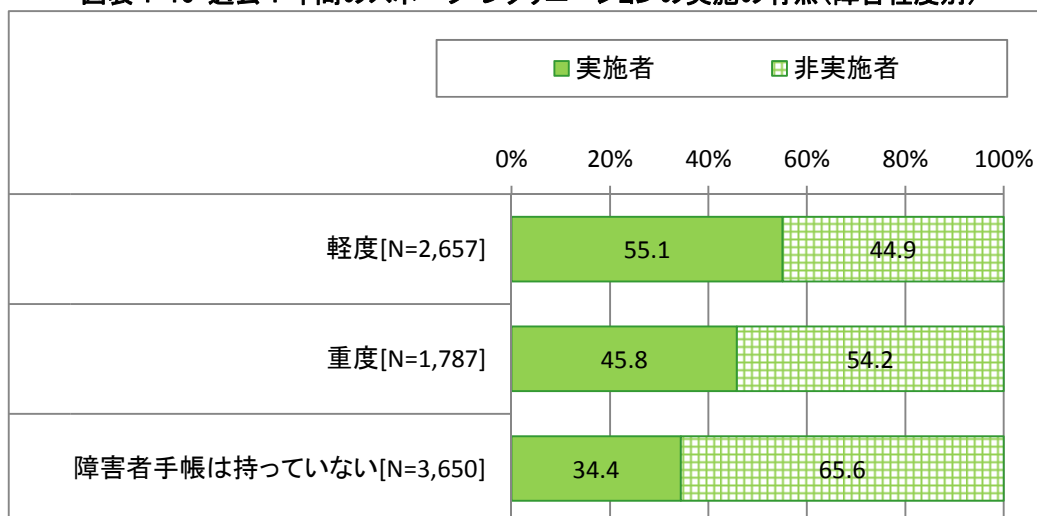
図表 1-15 過去 1 年間のスポーツ・レクリエーションの実施の有無(障害種別・性別)



障害の程度別に見ると、軽度の障害児・者では、スポーツ・レクリエーションの実施者が非実施者を上

回るが、重度障害児・者や手帳を持っていない障害児・者では非実施者の割合が高かった(図表 1-16)。障害の程度にかかわらず、男性の実施者が女性の実施者を上回った(図表 1-17)。

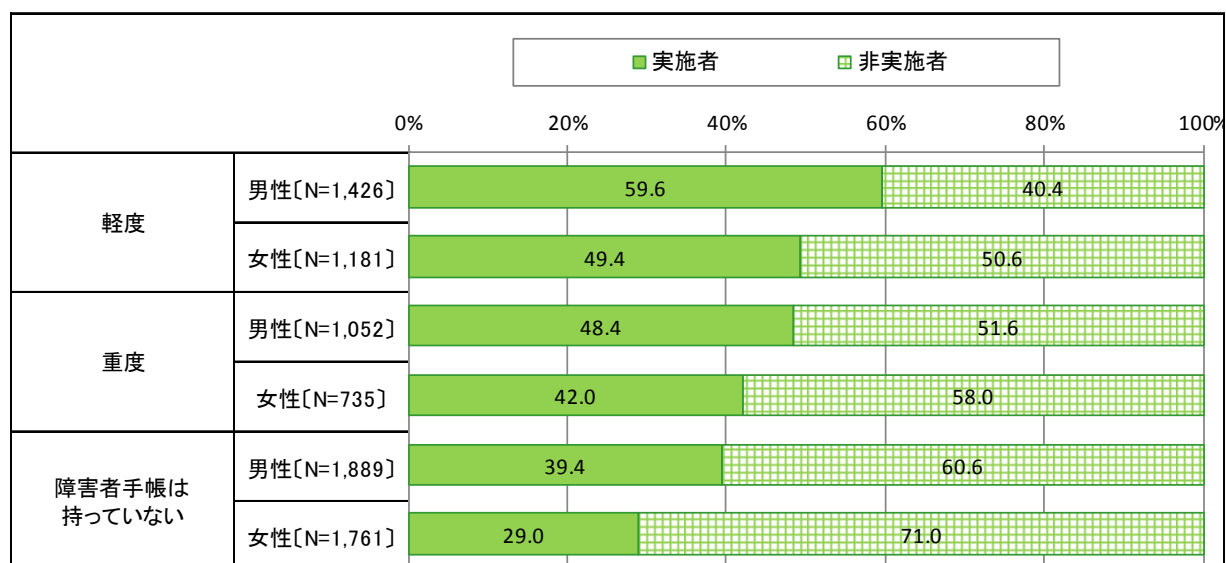
図表 1-16 過去 1 年間のスポーツ・レクリエーションの実施の有無(障害程度別)



注) 重度／軽度の分類は以下のとおりである。

- ・重度: 身体障害者手帳 1 級、2 級、療育手帳マル A・A、精神障害者福祉保健手帳 1 級の保持者
- ・軽度: 上記以外の障害者手帳保持者

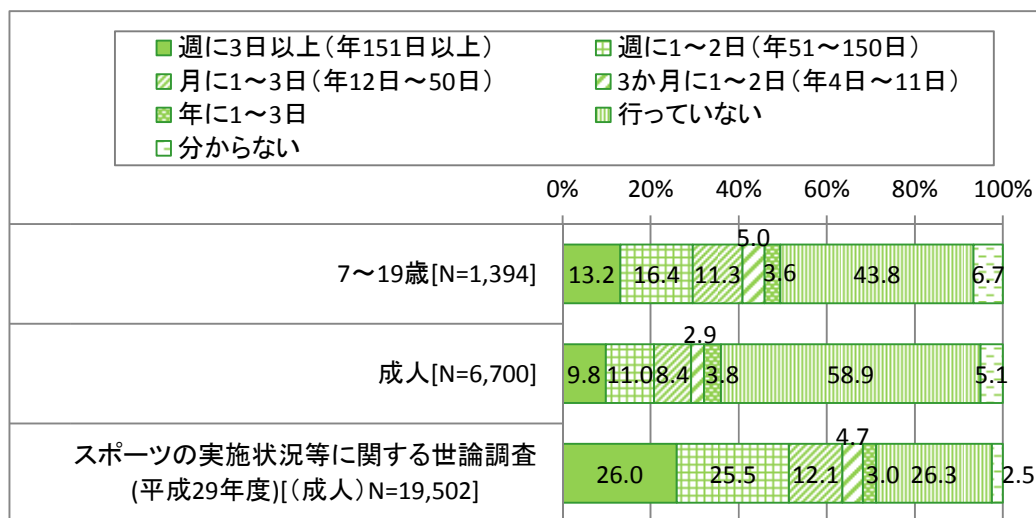
図表 1-17 過去 1 年間のスポーツ・レクリエーションの実施の有無(障害程度別・性別)



(2) 過去 1 年間にスポーツ・レクリエーションを行った日数

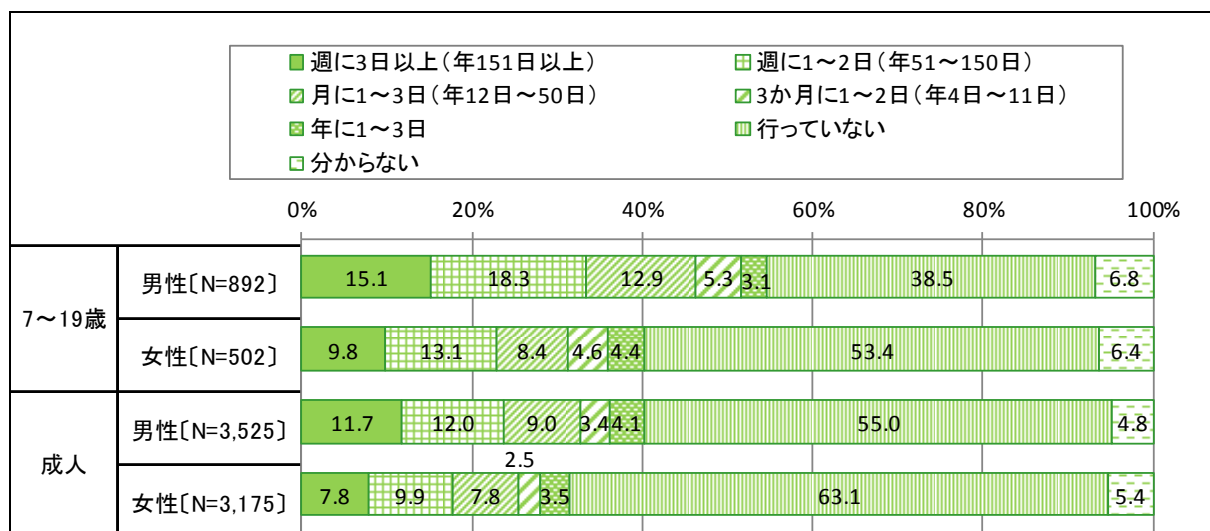
過去 1 年間にスポーツ・レクリエーションを行った日数について、7～19 歳と成人に分けて集計した。7～19 歳では、「週に 3 日以上」が 13.2%、「週に 1～2 日」が 16.4%と、週 1 日以上の実施者が 29.6%であるのに対して、「行っていない」が約 4 割であった。成人では、「週に 3 日以上」と「週に 1～2 日」を合わせた週 1 日以上の実施者が 20.8%、「行っていない」が約 6 割を占めた(図表 1-18)。スポーツ庁が全国の 18 歳以上を対象に実施している「スポーツの実施状況等に関する世論調査」(平成 29 年度)では、週 1 日以上の実施者は 51.5%となっており、障害者のスポーツ実施頻度が低いことが分かる。また、平成 27 年度調査では、週 1 日以上の実施者は 7～19 歳が 31.5%、成人が 19.2%だった。年齢区分にかかわらず、週 1 日以上の実施者の割合は男性の割合が高かった(図表 1-19)。

図表 1-18 過去 1 年間にスポーツ・レクリエーションを行った日数



注) スポーツ庁「スポーツの実施状況等に関する世論調査」(平成 29 年度):
全国 18～79 歳の男女が対象。

図表 1-19 過去 1 年間にスポーツ・レクリエーションを行った日数(性別)



障害種別では、7～19 歳では、発達障害の約 4 割が週 1 日以上スポーツ・レクリエーションを実施しているのに対して、肢体不自由(車椅子不要)では 1 割半ばだった。成人では、ほとんどの障害で約 2 割だったが、肢体不自由(車椅子必要)では約 1 割だった(図表 1-20)。性別では、ほとんどの障害種別で男性の実施率が高かった(図表 1-21)。

図表 1-20 過去 1 年間にスポーツ・レクリエーションを行った日数
(障害種別・年度別／7～19 歳・成人別)(1/2)

(%)

		調査年度	週に 3 日以上 (年 151 日以上)	週に 1 ～ 2 日 (年 51 ～ 150 日)	月に 1 ～ 3 日 (年 12 ～ 50 日)	3 か月に 1 ～ 2 日 (年 4 ～ 11 日)	年に 1 ～ 3 日	行っていない	分からない
全体	7-19 歳[N=1,394]	2017	13.2	16.4	11.3	5.0	3.6	43.8	6.7
	7-19 歳[N=950]	2015	14.0	17.5	10.8	4.7	4.3	41.9	6.7
	7-19 歳[N=710]	2013	10.0	20.7	14.1	4.1	6.3	38.6	6.2
	成人[N=6,700]	2017	9.8	11.0	8.4	2.9	3.8	58.9	5.1
	成人[N=5,499]	2015	9.3	9.9	8.0	3.0	4.0	60.2	5.7
	成人[N=4,671]	2013	8.5	9.7	8.9	4.1	5.0	58.2	5.5
肢体不自由(車椅子必要)	7-19 歳[N=72]	2017	6.9	12.5	11.1	5.6	5.6	58.3	0.0
	7-19 歳[N=49]	2015	4.1	6.1	10.2	4.1	0.0	71.4	4.1
	7-19 歳[N=58]	2013	3.4	8.6	19.0	1.7	5.2	55.2	6.9
	成人[N=647]	2017	5.9	6.5	6.5	3.2	2.2	72.8	2.9
	成人[N=606]	2015	5.4	4.8	6.8	1.3	1.7	76.7	3.3
	成人[N=572]	2013	6.1	5.9	4.9	3.7	3.8	72.2	3.3
肢体不自由(車椅子不要)	7-19 歳[N=190]	2017	4.7	11.6	10.0	2.6	1.6	63.7	5.8
	7-19 歳[N=108]	2015	11.1	9.3	5.6	0.9	0.9	67.6	4.6
	7-19 歳[N=78]	2013	3.8	15.4	7.7	1.3	0.0	64.1	7.7
	成人[N=1,721]	2017	9.5	9.7	6.6	2.5	2.8	64.7	4.2
	成人[N=1,528]	2015	7.7	8.8	6.2	3.2	3.7	66.0	4.5
	成人[N=1,185]	2013	7.0	9.4	7.3	3.1	4.3	63.5	5.4
視覚障害	7-19 歳[N=68]	2017	2.9	20.6	10.3	7.4	4.4	51.5	2.9
	7-19 歳[N=35]	2015	17.1	25.7	2.9	2.9	5.7	42.9	2.9
	7-19 歳[N=38]	2013	7.9	13.2	15.8	2.6	5.3	39.5	15.8
	成人[N=620]	2017	11.5	14.2	7.3	3.2	3.4	54.5	6.0
	成人[N=509]	2015	8.3	11.0	10.0	2.2	4.3	57.0	7.3
	成人[N=436]	2013	8.5	10.3	7.6	5.3	5.7	58.5	4.1
聴覚障害	7-19 歳[N=90]	2017	20.0	10.0	15.6	6.7	5.6	33.3	8.9
	7-19 歳[N=59]	2015	20.3	16.9	13.6	6.8	3.4	32.2	6.8
	7-19 歳[N=60]	2013	15.0	18.3	21.7	5.0	3.3	31.7	5.0
	成人[N=672]	2017	11.0	12.2	11.3	2.2	4.0	53.9	5.4
	成人[N=566]	2015	11.0	11.1	8.1	4.4	2.8	55.3	7.2
	成人[N=445]	2013	9.0	13.5	11.0	6.5	5.6	48.1	6.3
知的障害	7-19 歳[N=360]	2017	12.8	19.2	13.3	7.2	3.9	34.2	9.4
	7-19 歳[N=292]	2015	11.3	20.2	14.0	6.5	3.1	37.0	7.9
	7-19 歳[N=224]	2013	9.4	25.4	14.3	5.4	6.3	34.4	4.9
	成人[N=653]	2017	7.7	10.4	10.1	3.4	6.6	54.7	7.2
	成人[N=440]	2015	6.6	12.3	8.6	3.6	5.7	56.8	6.4
	成人[N=470]	2013	5.7	8.7	12.8	2.1	8.1	55.5	7.0

図表 1-20 過去 1 年間にスポーツ・レクリエーションを行った日数
(障害種別・年度別／7～19 歳・成人別) (2/2)

(%)

		調査年度	週に 3 日以上 (年 151 日以上)	週に 1 ～ 2 日 (年 51 ～ 150 日)	月に 1 ～ 3 日 (年 12 ～ 50 日)	3 か月に 1 ～ 2 日 (年 4 ～ 11 日)	年に 1 ～ 3 日	行っていない	分からない
発達障害	7-19 歳[N=598]	2017	18.4	19.9	12.7	5.2	3.5	33.6	6.7
	7-19 歳[N=445]	2015	15.3	19.8	11.2	4.5	5.8	35.5	7.9
	7-19 歳[N=335]	2013	11.3	25.7	13.7	5.1	9.3	31.0	3.9
	成人[N=542]	2017	10.0	10.3	11.4	3.3	5.5	54.4	5.0
	成人[N=357]	2015	11.2	11.8	7.8	3.1	5.9	54.9	5.3
	成人[N=288]	2013	9.0	10.1	10.4	4.5	5.6	52.8	7.6
精神障害	7-19 歳[N=192]	2017	8.9	11.5	7.3	1.6	3.6	58.9	8.3
	7-19 歳[N=77]	2015	13.0	14.3	5.2	3.9	3.9	54.5	5.2
	7-19 歳[N=76]	2013	7.9	9.2	7.9	7.9	5.3	53.9	7.9
	成人[N=1,734]	2017	11.4	11.6	8.0	2.1	4.4	57.2	5.2
	成人[N=1,375]	2015	12.1	11.5	7.9	2.8	4.1	55.2	6.3
	成人[N=1,237]	2013	9.8	9.3	9.6	3.8	4.4	56.8	6.2
その他(音声・言語・そしゃく機能障害や内部障害を含む)	7-19 歳[N=155]	2017	9.0	13.5	15.5	8.4	5.2	41.9	6.5
	7-19 歳[N=91]	2015	11.0	11.0	11.0	7.7	5.5	51.6	2.2
	7-19 歳[N=80]	2013	5.0	17.5	17.5	3.8	6.3	42.5	7.5
	成人[N=1,315]	2017	10.7	11.3	8.2	3.6	3.1	57.6	5.5
	成人[N=1,037]	2015	10.9	10.3	8.2	2.9	3.7	58.8	5.2
	成人[N=912]	2013	8.8	9.3	8.1	3.2	4.4	62.4	3.8
スポーツの実施状況等に関する世論調査 (平成 29 年度)[(成人)N=19,502]		2018	26.0	25.5	12.1	4.7	3.0	26.3	2.5
東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査(平成 27 年 6 月)[N=1,873]		2015	19.6	20.8	21.1	9.1	6.2	22.6	0.6
体力・スポーツに関する世論調査 (平成 25 年 1 月)[N=1,897]		2013	24.4	23.1	18.3	8.1	5.8	19.1	1.1

注 1) 車椅子必要／不要とは、日常生活で車椅子を必要とする／必要としないこと。

注 2) スポーツ庁「スポーツの実施状況等に関する世論調査」(平成 29 年度調査): 全国 18～79 歳の男女が対象。

注 3) 2013 年度データ: 笹川スポーツ財団「健常者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業(地域における障害者のスポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究)」(平成 26 年 3 月)より。

注 4) 2015 年度データ: 笹川スポーツ財団「地域における障害者スポーツ普及促進事業(障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究)」(平成 28 年 3 月)より。

注 5) 文部科学省「体力・スポーツに関する世論調査(平成 25 年 1 月): 全国 20 歳以上の日本国籍を有する者が対象。

図表 1-21 過去 1 年間にスポーツ・レクリエーションを行った日数
(障害種別・性別／7～19 歳・成人別)

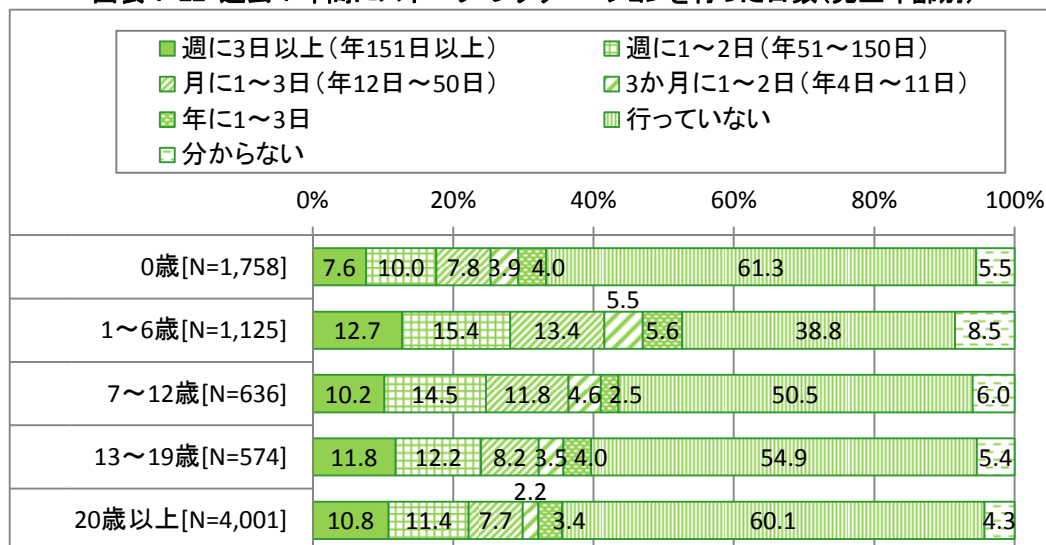
(%)

		性別	(年 1 5 1 日 以上)	(年 5 1 5 週 に 1 5 2 日 以上)	(年 1 2 月 に 1 5 3 日 以上)	(年 3 か 月 に 1 5 2 日 以上)	年 に 1 5 3 日	行 っ て い な い	分 か ら な い
全体	7-19歳	合計[N=1,394]	13.2	16.4	11.3	5.0	3.6	43.8	6.7
		男性[N=892]	15.1	18.3	12.9	5.3	3.1	38.5	6.8
		女性[N=502]	9.8	13.1	8.4	4.6	4.4	53.4	6.4
	成人	合計[N=6,700]	9.8	11.0	8.4	2.9	3.8	58.9	5.1
		男性[N=3,525]	11.7	12.0	9.0	3.4	4.1	55.0	4.8
		女性[N=3,175]	7.8	9.9	7.8	2.5	3.5	63.1	5.4
肢体不自由 (日常生活で車椅子を必要とする)	7-19歳	合計[N=72]	6.9	12.5	11.1	5.6	5.6	58.3	0.0
		男性[N=42]	9.5	11.9	7.1	4.8	2.4	64.3	0.0
		女性[N=30]	3.3	13.3	16.7	6.7	10.0	50.0	0.0
	成人	合計[N=647]	5.9	6.5	6.5	3.2	2.2	72.8	2.9
		男性[N=319]	6.6	7.5	6.6	3.8	1.9	69.6	4.1
		女性[N=328]	5.2	5.5	6.4	2.7	2.4	75.9	1.8
肢体不自由 (日常生活で車椅子を必要としない)	7-19歳	合計[N=190]	4.7	11.6	10.0	2.6	1.6	63.7	5.8
		男性[N=105]	7.6	10.5	12.4	1.9	1.0	61.0	5.7
		女性[N=85]	1.2	12.9	7.1	3.5	2.4	67.1	5.9
	成人	合計[N=1,721]	9.5	9.7	6.6	2.5	2.8	64.7	4.2
		男性[N=915]	10.8	10.3	6.8	3.2	3.4	61.3	4.3
		女性[N=806]	7.9	9.1	6.3	1.7	2.2	68.6	4.1
視覚障害	7-19歳	合計[N=68]	2.9	20.6	10.3	7.4	4.4	51.5	2.9
		男性[N=41]	2.4	29.3	12.2	4.9	7.3	41.5	2.4
		女性[N=27]	3.7	7.4	7.4	11.1	0.0	66.7	3.7
	成人	合計[N=620]	11.5	14.2	7.3	3.2	3.4	54.5	6.0
		男性[N=328]	14.0	17.7	7.6	3.0	4.0	48.5	5.2
		女性[N=292]	8.6	10.3	6.8	3.4	2.7	61.3	6.8
聴覚障害	7-19歳	合計[N=90]	20.0	10.0	15.6	6.7	5.6	33.3	8.9
		男性[N=49]	18.4	12.2	18.4	8.2	4.1	34.7	4.1
		女性[N=41]	22.0	7.3	12.2	4.9	7.3	31.7	14.6
	成人	合計[N=672]	11.0	12.2	11.3	2.2	4.0	53.9	5.4
		男性[N=343]	14.3	14.0	12.0	2.6	4.7	46.6	5.8
		女性[N=329]	7.6	10.3	10.6	1.8	3.3	61.4	4.9
知的障害	7-19歳	合計[N=360]	12.8	19.2	13.3	7.2	3.9	34.2	9.4
		男性[N=253]	13.0	18.6	13.8	7.9	3.2	32.8	10.7
		女性[N=107]	12.1	20.6	12.1	5.6	5.6	37.4	6.5
	成人	合計[N=653]	7.7	10.4	10.1	3.4	6.6	54.7	7.2
		男性[N=348]	8.3	12.1	12.9	4.0	6.0	48.9	7.8
		女性[N=305]	6.9	8.5	6.9	2.6	7.2	61.3	6.6
発達障害	7-19歳	合計[N=598]	18.4	19.9	12.7	5.2	3.5	33.6	6.7
		男性[N=436]	20.9	21.6	13.5	4.6	3.2	29.4	6.9
		女性[N=162]	11.7	15.4	10.5	6.8	4.3	45.1	6.2
	成人	合計[N=542]	10.0	10.3	11.4	3.3	5.5	54.4	5.0
		男性[N=293]	10.6	13.0	12.3	3.4	5.8	50.9	4.1
		女性[N=249]	9.2	7.2	10.4	3.2	5.2	58.6	6.0
精神障害	7-19歳	合計[N=192]	8.9	11.5	7.3	1.6	3.6	58.9	8.3
		男性[N=105]	9.5	13.3	11.4	1.9	1.9	51.4	10.5
		女性[N=87]	8.0	9.2	2.3	1.1	5.7	67.8	5.7
	成人	合計[N=1,734]	11.4	11.6	8.0	2.1	4.4	57.2	5.2
		男性[N=868]	13.9	11.9	8.8	2.3	3.9	54.7	4.5
		女性[N=866]	8.9	11.3	7.3	1.8	5.0	59.7	6.0
その他(音声・言語・そしゃく機能障 害や内部障害を含む)	7-19歳	合計[N=155]	9.0	13.5	15.5	8.4	5.2	41.9	6.5
		男性[N=94]	8.5	14.9	11.7	10.6	6.4	42.6	5.3
		女性[N=61]	9.8	11.5	21.3	4.9	3.3	41.0	8.2
	成人	合計[N=1,315]	10.7	11.3	8.2	3.6	3.1	57.6	5.5
		男性[N=711]	13.4	11.3	7.3	3.5	3.7	56.0	4.9
		女性[N=604]	7.6	11.3	9.3	3.6	2.5	59.6	6.1
スポーツの実施状況等に関する世論 調査(平成29年度)	成人	合計[N=19,502]	26.0	25.5	12.1	4.7	3.0	26.3	2.5
		男性[N=9,686]	26.9	26.1	13.3	4.6	3.0	24.1	1.9
		女性[N=9,816]	25.1	24.9	10.8	4.7	3.1	28.4	3.1

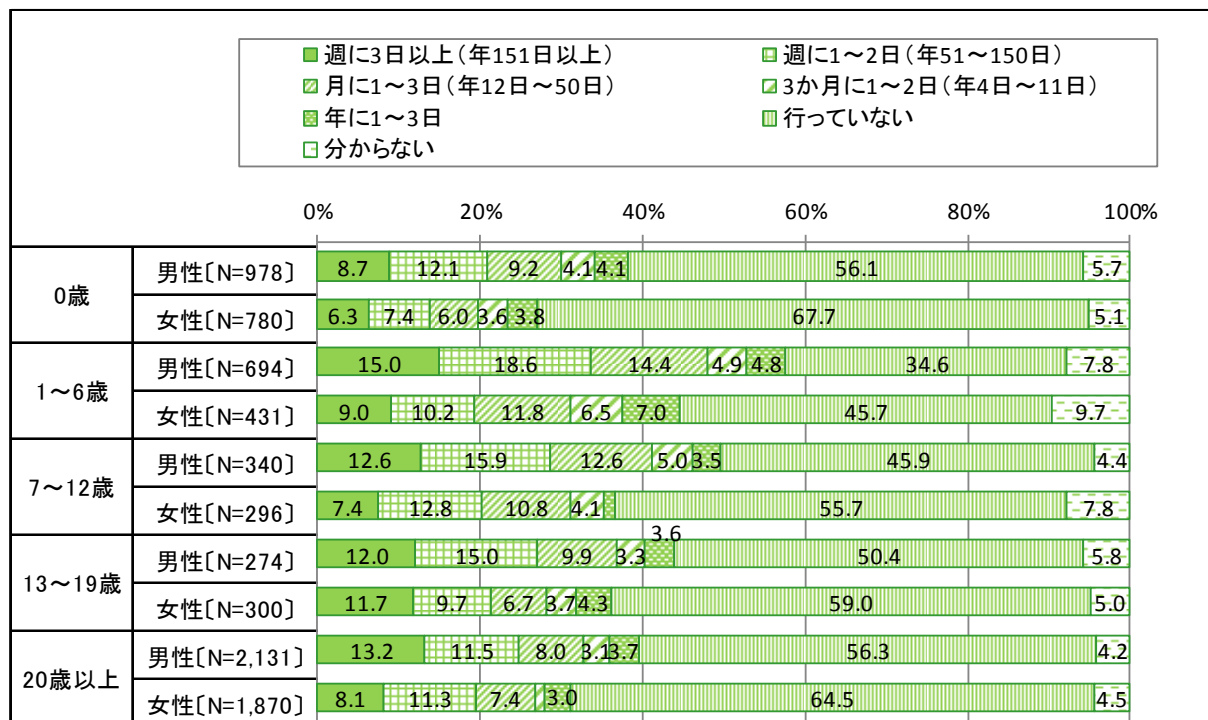
発生年齢別に見ると、週 1 日以上の実施者は「1～6 歳」で 28.1%、「7～12 歳」では 24.7%で、「0 歳」をのぞくと、発生年齢が低いほど、実施率が高いことが分かる(図表 1-22)。性別では男性の割合が高かった(図表 1-23)。

年収別に見ると、週 1 日以上の実施者は「600 万円未満」では 2 割半ば、600～800 万円未満では約 3 割、800 万円以上では 3 割を超えていた。年収が多くなるにつれて、スポーツ・レクリエーションを実施している割合は大きくなる(図表 1-24)。性別では男性の割合が高かった(図表 1-25)。笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」(2012)では、世帯年収と運動・スポーツの実施には有意な関係が認められ、世帯年収が高いほど、積極的にスポーツを実施していると判定しており、一般と同様の結果となった。

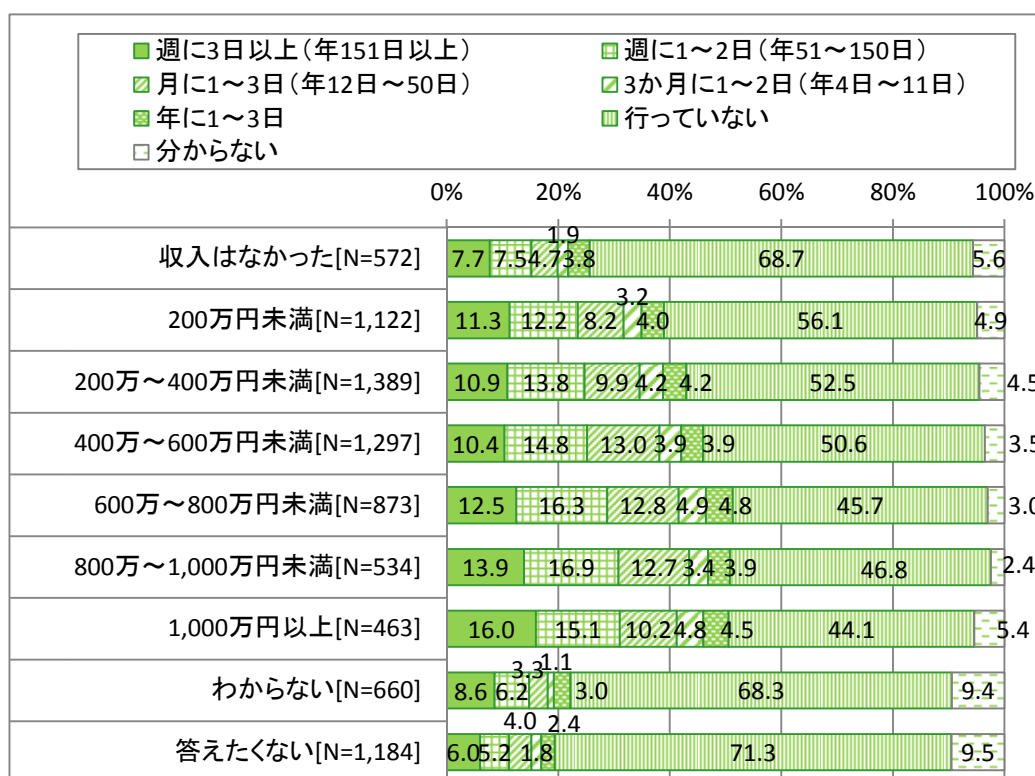
図表 1-22 過去 1 年間にスポーツ・レクリエーションを行った日数(発生年齢別)



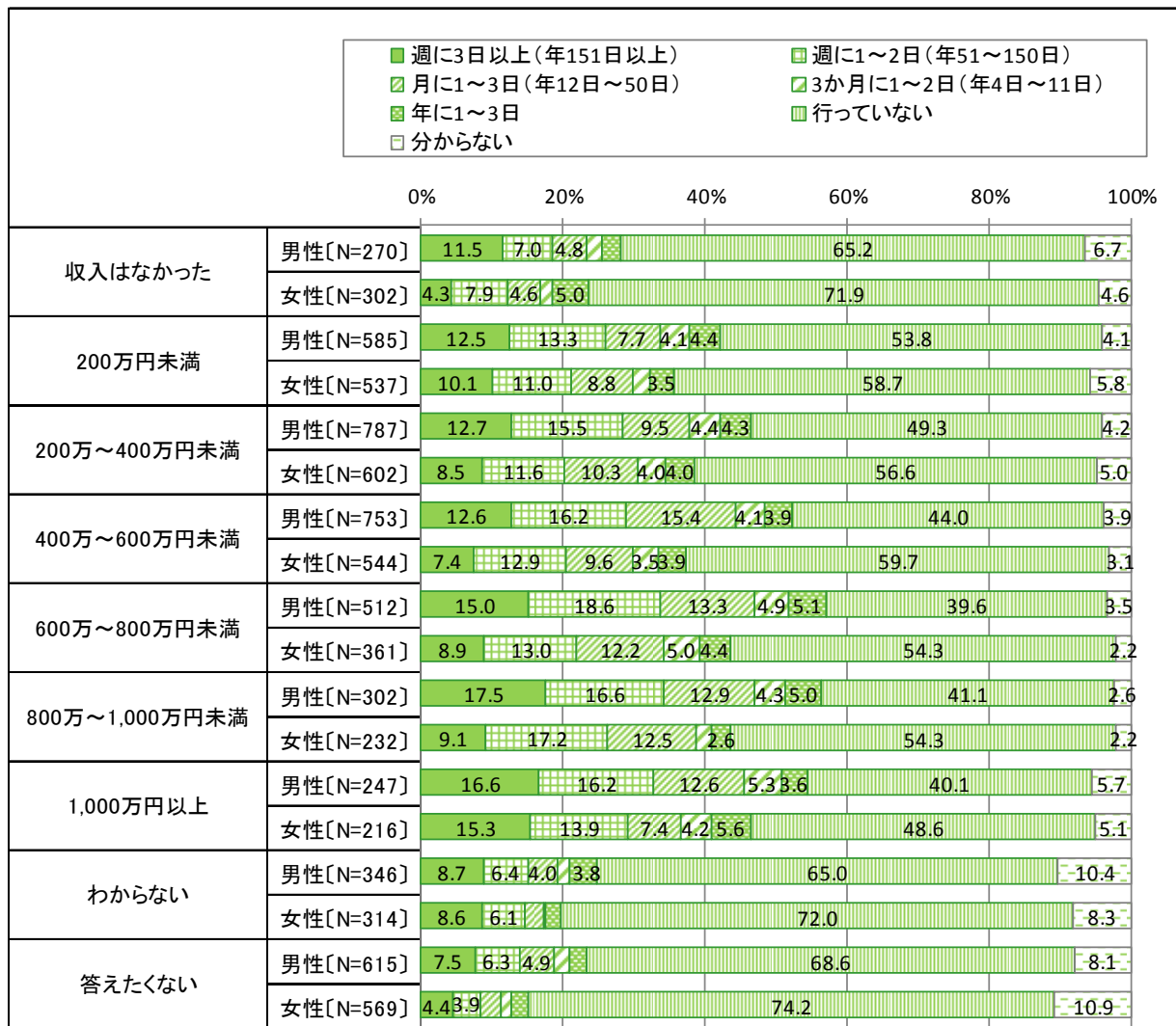
図表 1-23 過去 1 年間にスポーツ・レクリエーションを行った日数(発生年齢別・性別)



図表 1-24 過去 1 年間にスポーツ・レクリエーションを行った日数(年収別)



図表 1-25 過去 1 年間にスポーツ・レクリエーションを行った日数(年収別・性別)



以下の(3)～(7)の項目は、過去 1 年間に何らかのスポーツ・レクリエーションを行った 8,094 人を対象に調査を実施。

(3) 過去 1 年間に行ったスポーツ・レクリエーション

過去 1 年間にスポーツ・レクリエーションを「行った」と回答した人が、どのようなスポーツ・レクリエーションを行ったかについて、障害種別に上位種目と一人当たりの平均実施種目数をまとめた。7～19 歳では、「水泳」「散歩(ぶらぶら歩き)」「ウォーキング」「体操(軽い体操、ラジオ体操など)」、成人では、「散歩(ぶらぶら歩き)」「ウォーキング」「水泳」「体操(軽い体操、ラジオ体操など)」の実施率が高かった。「水泳」は、7～19 歳では、ほとんどの障害で最も実施率の高い種目となっている(図表 1-26、図表 1-27、図表 1-28)。水泳は、指導方法やアプローチ方法に多様性があるが、指導者、サポートが充実している学齢期には積極的に実施される。卒業後は、指導者やサポート体制が充実した環境を見つけることが難しく、成人では一人で実施できる「散歩(ぶらぶら歩き)」「ウォーキング」の実施が増える傾向にある。一人当たりの平均実施種目数については、障害による違いが見られる。全体では発達障害が 2.3 種目と最も多い。

発生年齢別に見ると、「散歩(ぶらぶら歩き)」「ウォーキング」「体操(軽い体操、ラジオ体操など)」が上位を占める中で、「20 歳以上」になると、筋力トレーニングやゴルフが入ってくる(図表 1-29)。

図表 1-26 過去 1 年間に行ったスポーツ・レクリエーション(障害種別・全体:N=3,538) (複数回答)

(%)

	(車 肢 椅 体 子 不 必 自 要 由)		(車 肢 椅 体 子 不 自 由)		視 覚 障 害		聴 覚 障 害		知 的 障 害		発 達 障 害		精 神 障 害		内 所 部 の 障 害 (音 声 を 含 め 言 語 を 用 意)	
	N=206		N=876		N=315		N=370		N=533		N=644		N=821		N=647	
1位	散歩(ぶらぶら歩き)	13.1	散歩(ぶらぶら歩き)	36.2	散歩(ぶらぶら歩き)	34.6	散歩(ぶらぶら歩き)	34.3	散歩(ぶらぶら歩き)	37.7	散歩(ぶらぶら歩き)	34.9	散歩(ぶらぶら歩き)	41.3	散歩(ぶらぶら歩き)	39.3
2位	キャッチボール	11.2	ウォーキング	26.2	ウォーキング	27.3	ウォーキング	25.4	水泳	28.3	水泳	29.3	ウォーキング	34.5	ウォーキング	26.7
3位	水泳	10.2	水泳	12.1	水泳	11.1	水泳	14.3	ウォーキング	22.9	ウォーキング	21.7	ウォーキング	14.1	ウォーキング	11.9
4位	野球	9.7	水泳	10.2	水泳	11.1	水泳	9.5	ウォーキング	13.9	水泳	16.1	水泳	12.2	水泳	11.3
5位	ウォーキング	8.7	水泳	9.5	水泳	10.2	水泳	8.9	ウォーキング	9.9	ウォーキング	14.3	ウォーキング	11.6	ウォーキング	7.9
6位	ソフトボール		水泳	6.7	水泳	8.9	水泳	8.1	ウォーキング	9.0	ウォーキング	13.7	ウォーキング	6.2	ウォーキング	6.2
7位	ボッチャ	8.3	ハイキング	5.5	ハイキング	5.3	ハイキング	7.8	サッカー	8.8	サッカー	13.0	ハイキング	7.7	ハイキング	6.0
8位	体操(軽い体操、ラジ オ体操など)		ハイキング	7.8	ハイキング	6.3	ハイキング	7.0	ボウリング	8.4	ボウリング	11.3	ボウリング		ボウリング	
9位	ゴルフ(コース)	6.3	ハイキング	5.3	ハイキング	5.3	ハイキング	6.8	なわとび	8.3	なわとび	9.8	なわとび	7.4	なわとび	5.6
10位	ふうせんぱー	5.8	ハイキング	5.2	ハイキング	5.2	ハイキング	6.2	バスケットボール	7.3	バスケットボール	9.6	バスケットボール	7.2	バスケットボール	
11位	ゴルフ(練習場)	4.4	野球		野球	5.7	野球	5.9	ハイキング	7.1	ドッジボール	8.9	ドッジボール	6.7	ドッジボール	5.3
12位	釣り	3.9	ゴルフ(コース)	5.0	ソフトボール		ソフトボール	5.9	キャッチボール	6.9	バドミントン	8.4	卓球	6.6	卓球	5.1
13位	水中歩行		ゴルフ(練習場)	5.0	海水浴		ハイキング	5.7	ダンス(社交ダンス、 フォークダンス、フラダ ンスなど)	6.6	卓球	8.2	海水浴	6.5	ボウリング	4.9
14位	筋力トレーニング(マ シントレーニング)		ジョギング・ランニング		登山	5.4	ゴルフ(コース)		キャンプ	5.4	バスケットボール	7.8	登山	5.7	野球	4.3
15位	ジョギング・ランニング	3.4	キャッチボール	4.3	筋力トレーニング(マ シントレーニング)	5.1	ゴルフ(練習場)	5.1	卓球	5.3	キャンプ	7.5	ボウリング	5.6	筋力トレーニング(マ シントレーニング)	4.2
グラウンド・ゴルフ			ソフトボール				サイクリング									
柔道																
平均値(項目 目数)		1.7	2.2	2.5	2.5	2.5	2.5	2.7	3.3	2.8	2.3	2.3	2.3	2.3	2.3	2.3

注)車椅子必要／不要とは、日常生活で車椅子を必要とする／必要としないこと。

図表 1-27 過去 1 年間に行ったスポーツ・レクリエーション(障害種別・7～19 歳:N=783)(複数回答) (%)

	(車 肢 椅 体 子 不 自 由 要 由)		(重 肢 椅 体 子 不 自 由 要 由)		視 覚 障 害		聴 覚 障 害		知 的 障 害		発 達 障 害		精 神 障 害		内 容 障 害		ラ イ 1 0 2 0 0 1 5 5 の 参 照 ス ケ ー ル	
	N=30	N=69	N=33	N=60	N=237	N=397	N=79	N=90	N=1712									
1位	キャッチボール	23.3	水泳	23.2	水泳	36.4	水泳	28.3	水泳	40.1	水泳	39.8	散歩(ぶらぶら歩き)	25.3	水泳	30.0	サッカー	29.4
2位	水泳	20.0	サッカー	13.0	散歩(ぶらぶら歩き)	27.3	散歩(ぶらぶら歩き)	21.7	散歩(ぶらぶら歩き)	35.4	散歩(ぶらぶら歩き)	31.0	水泳	22.8	水泳	25.6	おにごっこ	28.7
3位	キャンプ	13.3	なわとび	10.1	キャッチボール	21.2	キャッチボール	15.0	ウォーキング	21.1	なわとび	23.7	なわとび	20.3	ウォーキング	17.8	バスケットボール	28.1
4位	体操(軽い体操、ラジ オ体操など)		サッカー		キャッチボール		キャッチボール		なわとび	15.2	サッカー		なわとび	19.0	体操(軽い体操、ラジ オ体操など)	14.4	ドッジボール	25.0
5位	ダンス(社交ダンス、フ ォークダンス、フラダ ンスなど)		キャッチボール		キャッチボール		キャッチボール		なわとび	15.2	サッカー		なわとび	19.0	体操(軽い体操、ラジ オ体操など)	14.4	ドッジボール	25.0
6位	ウォーキング	10.0	ソフトボール	8.7	ジョギング・ランニング	18.2	卓球		ジョギング・ランニング	14.8	ウォーキング		ジョギング・ランニング	13.3	なわとび		ジョギング・ランニング	24.9
7位	散歩(ぶらぶら歩き)		バスケットボール		海水浴		なわとび		バスケットボール	13.5	ジョギング・ランニング		バスケットボール	15.2	キャッチボール	11.1	水泳(スイミング)	23.1
8位	ボッチャ		ドッジボール	7.2	ウォーキング		ウォーキング		バスケットボール	9.7	ドッジボール		バスケットボール	13.9	ジョギング・ランニング		なわとび(重なわとび を含む)	21.9
9位	ソフトボール		キャッチボール		釣り		釣り		バスケットボール	9.7	ドッジボール		バスケットボール	11.4	バスケットボール		筋力トレーニング	20.1
10位	野球		ウォーキング		体操(軽い体操、ラジ オ体操など)		体操(軽い体操、ラジ オ体操など)		キャッチボール	12.1	キャッチボール		ドッジボール	10.0	キャンプ		キャッチボール	20.0
11位	サッカー		ジョギング・ランニング	5.8	釣り	15.2	ジョギング・ランニング	10.0	ダンス(社交ダンス、 フォークダンス、フラ ダンスなど)	8.4	ボウリング		キャッチボール	10.1	ハイキング		ふらんこ	19.9
12位	バドミントン	6.7	なわとび		スキー		スキー		バスケットボール	8.0	バスケットボール		バスケットボール	8.9	卓球		卓球	19.6
13位	海水浴		水中歩行		つな引き		つな引き		キャンプ	7.6	バドミントン		ボウリング	8.9	バレーボール	7.8	バレーボール	18.8
14位	乗馬		柔道		バスケットボール		バスケットボール		登山	7.2	卓球		バドミントン		野球		ウォーキング	16.8
15位	釣り		バスケットボール		卓球		バスケットボール		ドッジボール	6.8	キャンプ		キャンプ	6.3	サッカー		野球	16.4
ふうせんハレー			バスケットボール	アイススケート	アイススケート	アイススケート	アイススケート	アイススケート	アイススケート	アイススケート	アイススケート	アイススケート	アイススケート	アイススケート	アイススケート	アイススケート	アイススケート	アイススケート
平均実施項目数	2.1	1.9	4.2	3.1	3.2	3.7	3.0	3.1	3.2	3.7	3.0	3.1	-					

注1) 車椅子必要/不要とは、日常生活で車椅子を必要とする/必要としないこと。

注2) (参考)スポーツライフに関する調査 2015(*)は、「4～9 歳」と「10 代」のスポーツライフに関する調査より 7～19 歳のデータを使用した。

注3) (参考)スポーツライフに関する調査 2015(*)は、非実施者を含めた実施割合である。

図表 1-29 過去 1 年間に行ったスポーツ・レクリエーション(発生年齢別)

(%)

	0歳		1～19歳		20歳以上	
	N=681		N=1,262		N=1,595	
1位	散歩(ぶらぶら歩き)	34.9	散歩(ぶらぶら歩き)	25.6	散歩(ぶらぶら歩き)	42.3
2位	水泳	25.0	ウォーキング	19.6	ウォーキング	33.5
3位	ウォーキング	21.3	水泳	19.1	体操(軽い体操、ラジオ体操など)	12.5
4位	ジョギング・ランニング	11.6	ジョギング・ランニング	10.0	水泳	10.2
5位	体操(軽い体操、ラジオ体操など)	11.5	サッカー	9.6	水中歩行	9.0
6位	サッカー	9.5	キャッチボール	9.4	筋力トレーニング(マシントレーニング)	7.5
7位	海水浴	7.9	なわとび	9.3	ジョギング・ランニング	6.8
8位	ボウリング	7.2	体操(軽い体操、ラジオ体操など)	9.0	筋力トレーニング(ダンベル・自重のトレーニング)	6.6
9位	卓球		野球	7.4	ハイキング	5.5
10位	なわとび		海水浴	7.1	ヨーガ	5.4
11位	キャッチボール	6.9	バスケットボール	6.6	キャッチボール	5.3
12位	ハイキング	6.2	ボウリング	6.4	サイクリング	5.1
13位	野球	6.0	バドミントン	5.9	釣り	
14位	スキー	5.4	ソフトボール		ゴルフ(コース)	4.7
15位	釣り	5.3	サイクリング	5.7	卓球	4.5
	バスケットボール				ゴルフ(練習場)	
平均実施項目数	2.8		2.8		2.3	

(4) スポーツ・レクリエーションの実施回数

過去 1 年間に行ったスポーツ・レクリエーション種目の年平均実施回数を尋ねたところ、「筋力トレーニング(ダンベル・自重のトレーニング)」「ウォーキング」「体操(軽い体操、ラジオ体操など)」「散歩(ぶらぶら歩き)」「筋力トレーニング(マシントレーニング)」「ソフトテニス(軟式テニス)」が多かった(図表 1-30)。

障害種別に見ると、全障害で「筋力トレーニング(ダンベル・自重のトレーニング)」「体操(軽い体操、ラジオ体操など)」「ウォーキング」「散歩(ぶらぶら歩き)」の年平均実施回数が多く、特に肢体不自由(車椅子不要)、視覚障害、聴覚障害では「筋力トレーニング」、精神障害では、「体操」が多かった。(図表 1-31)。

図表 1-30 スポーツ・レクリエーション種目(実施率上位 30 種目)の年平均実施回数
(回)

種目名	年平均 実施回数
筋力トレーニング(ダンベル・自重のトレーニング)[N=128]	138.3
ウォーキング[N=779]	123.6
体操(軽い体操、ラジオ体操など)[N=328]	123.6
散歩(ぶらぶら歩き)[N=1,054]	118.9
筋力トレーニング(マシントレーニング)[N=159]	98.7
ソフトテニス(軟式テニス)[N=49]	85.1
ラグビー[N=8]	83.0
ジョギング・ランニング[N=259]	82.7
サイクリング[N=157]	77.4
ヨーガ[N=125]	76.4
陸上競技[N=48]	69.0
バスケットボール[N=100]	68.1
エアロビックダンス[N=25]	63.4
ダンス(社交ダンス、フォークダンス、フラダンスなど)[N=78]	55.6
空手[N=48]	54.8
水中歩行[N=189]	54.0
アクアエクササイズ[N=18]	50.9
バレーボール[N=66]	50.4
サッカー[N=178]	48.6
太極拳[N=35]	47.3
卓球[N=149]	45.9
フットベースボール(キックベースボール)[N=19]	44.1
なわとび[N=145]	44.0
バドミントン[N=109]	42.6
ゴルフ(練習場)[N=113]	42.1
ドッジボール[N=80]	39.9
水泳[N=517]	34.2
野球[N=170]	34.1
車いすバスケットボール[N=12]	31.8
柔道[N=48]	31.7

図表 1-31 スポーツ・レクリエーション種目(実施率上位種目)の年平均実施回数(障害種別・全体:N=3,538) (回)

	(車椅子) 身体不自由 要由	(車椅子) 身体不自由 要由	(車椅子) 身体不自由 要由	視 覚 障 害	聴 覚 障 害	知 的 障 害	発 達 障 害	精 神 障 害	内 そ の 他 障 害 (音声を 含め る語 や)
	N=206	N=876	N=315	N=370	N=533	N=644	N=821	N=847	
1位	散歩(ぶらぶら歩き)	散歩(ぶらぶら歩き)	散歩(ぶらぶら歩き)	散歩(ぶらぶら歩き)	散歩(ぶらぶら歩き)	散歩(ぶらぶら歩き)	散歩(ぶらぶら歩き)	散歩(ぶらぶら歩き)	124.2
2位	キャッチボール	ウォーキング	ウォーキング	ウォーキング	水泳	水泳	ウォーキング	ウォーキング	117.7
3位	水泳	水泳	水泳	水泳	ウォーキング	ウォーキング	ウォーキング	体操(軽い体操、ラジ オ体操など)	141.2
4位	野球	水泳	体操(軽い体操、ラジ オ体操など)	体操(軽い体操、ラジ オ体操など)	体操(軽い体操、ラジ オ体操など)	なわとび	水泳	水泳	24.1
5位	ウォーキング	体操(軽い体操、ラジ オ体操など)	24.2	21.3	ジョギング・ランニング	ジョギング・ランニング	ジョギング・ランニング	ジョギング・ランニング	36.3
6位	ソフトボール	105.9	ジョギング・ランニング	ジョギング・ランニング	海水浴	2.0	体操(軽い体操、ラジ オ体操など)	26.4	32.0
7位	ボッチャ	8.5	釣り	野球	サッカー	30.8	サッカー	141.3	11.7
8位	体操(軽い体操、ラジ オ体操など)	147.8	釣り	釣り	20.2	ポウリング	海水浴	3.6	70.6
9位	ゴルフ(コース)	50.3	筋力トレーニング(ダ ンベル・自重のトレ ーニング)	海水浴	3.8	なわとび	31.8	58.4	75.4
10位	ふうせんハレー	20.8	サイクリング	卓球	55.8	バスケットボール	79.8	8.2	14.3
11位	ゴルフ(練習場)	125.4	野球	登山	7.5	ハイキング	5.7	ドッジボール	99.4
12位	釣り	20.4	ゴルフ(コース)	ソフトボール	14.3	キャッチボール	25.9	バドミントン	6.5
13位	水中歩行	87.4	海水浴	ハイキング	2.1	ダンス(社交ダンス、 フォークダンス、フラダ ンスなど)	44.5	卓球	9.9
14位	筋力トレーニング(マ シントレーニング)	142.9	登山	ゴルフ(コース)	16.7	キャンプ	5.7	バスケットボール	39.3
15位	ジョギング・ランニング	124.0	筋力トレーニング(マ シントレーニング)	ゴルフ(練習場)	36.1	卓球	55.2	2.4	143.7
平均実施回 数	海水浴	1.6	ソフトボール	サイクリング	39.6				
	グラウンド・ゴルフ	39.7							
	柔道	6.7							
	1.7	2.2	2.5	2.5	2.7	3.3	2.8	2.3	

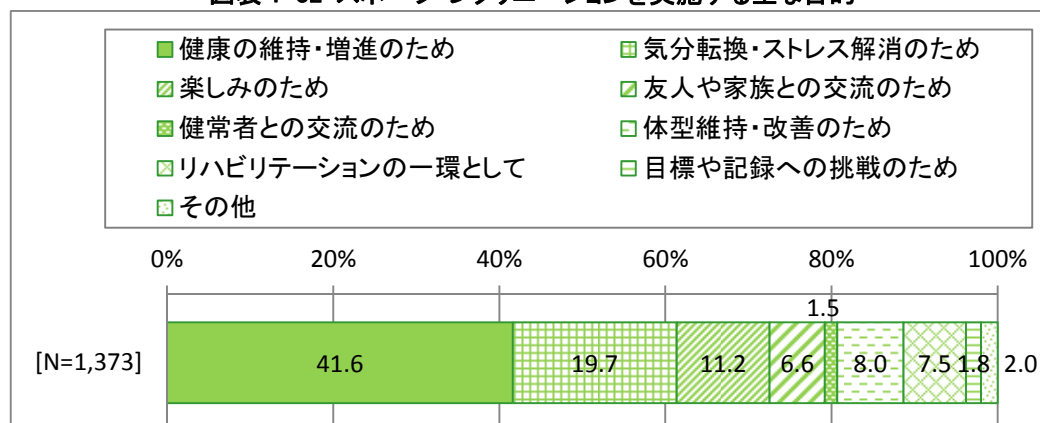
注)車椅子必要／不要とは、日常生活で車椅子を必要とする／必要としないこと。

(5) スポーツ・レクリエーションを実施する主な目的

スポーツ・レクリエーションを実施する主な目的については、「健康の維持・増進のため」(41.6%)が最も多く、次いで「気分転換・ストレス解消のため」(19.7%)、「楽しみのため」(11.2%)であった(図表 1-32)。スポーツ庁「スポーツの実施状況等に関する世論調査」(平成 28 年 11 月)では、「健康のため」「体力増進・維持のため」「楽しみ、気晴らしとして」との回答が多く、本調査と同様の傾向を示した。

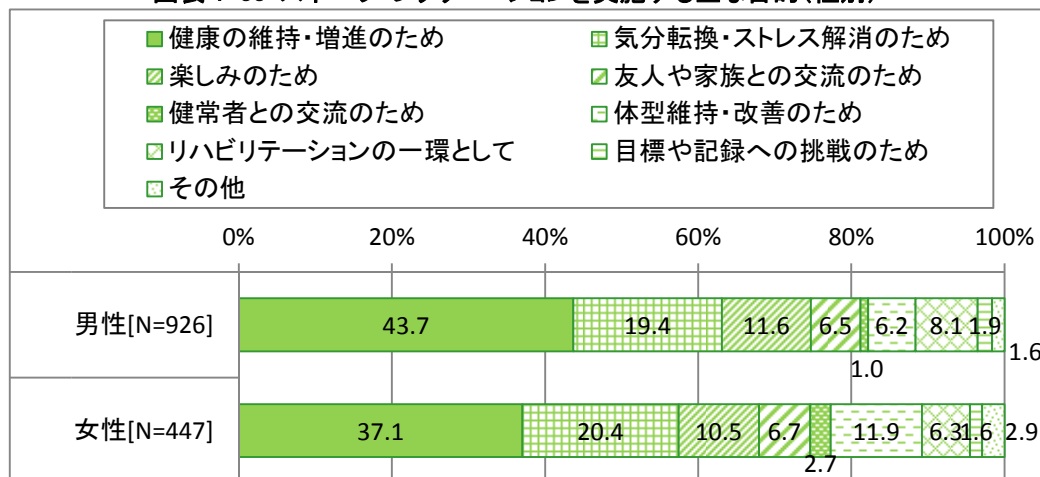
性別に見ると、「健康維持・増進のため」が男性で高く、「体型維持・改善のため」が女性で高くなった(図表 1-33)。障害種別で見ると、肢体不自由では、「リハビリテーションの一環として」が 1 割以上を占め、知的障害では「目標や記録への挑戦のため」が 10.9%と、ほかの障害と比べて高かった(図表 1-34)。肢体不自由(車椅子必要)では、「健康の維持・増進のため」が 31.3%と、ほかの障害と比べて低かった。

図表 1-32 スポーツ・レクリエーションを実施する主な目的



注) スポーツ・レクリエーションへの意識に関する設問のため、対象を回答者本人が障害児・者の場合に限定した。

図表 1-33 スポーツ・レクリエーションを実施する主な目的(性別)



注) スポーツ・レクリエーションへの意識に関する設問のため、対象を回答者本人が障害児・者の場合に限定した。

図表 1-34 スポーツ・レクリエーションを実施する主な目的(障害種別)

(%)

		調査年度	健康の維持・増進のため	気分転換・ストレス解消のため	楽しみのため	友人や家族との交流のため	健常者との交流のため	体型維持・改善のため	リハビリテーションの一環として	目標や記録への挑戦のため	その他
肢体不自由 (車椅子必要)	N=67	2017	31.3	23.9	14.9	4.5	6.0	1.5	14.9	3.0	0.0
	N=51	2015	31.4	21.6	13.7	5.9	2.0	2.0	19.6	3.9	0.0
	N=61	2013	26.2	13.1	18.0	8.2	3.3	4.9	21.3	4.9	0.0
肢体不自由 (車椅子不要)	N=308	2017	43.8	14.3	8.8	5.5	1.9	3.9	17.2	1.9	2.6
	N=266	2015	33.8	17.3	7.5	7.1	1.1	5.6	24.8	1.9	0.8
	N=273	2013	36.7	16.5	11.0	6.8	0.4	3.0	22.8	2.1	0.8
視覚障害	N=128	2017	47.7	13.3	10.9	11.7	0.8	5.5	6.3	3.1	0.8
	N=114	2015	34.2	28.9	9.6	8.8	1.8	6.1	7.9	1.8	0.9
	N=92	2013	38.0	23.9	10.9	8.7	0.0	6.5	7.6	3.3	1.1
聴覚障害	N=133	2017	48.9	18.0	13.5	7.5	0.8	6.8	2.3	1.5	0.8
	N=117	2015	39.3	21.4	16.2	4.3	1.7	3.4	7.7	5.1	0.9
	N=110	2013	36.4	29.1	15.5	7.3	0.0	6.4	1.8	3.6	0.0
知的障害	N=64	2017	42.2	28.1	3.1	6.3	0.0	4.7	1.6	10.9	3.1
	N=18	2015	33.3	27.8	16.7	0.0	11.1	5.6	0.0	5.6	0.0
	N=13	2013	30.8	15.4	15.4	0.0	7.7	7.7	7.7	15.4	0.0
発達障害	N=128	2017	39.1	25.8	13.3	5.5	1.6	9.4	2.3	0.8	2.3
	N=82	2015	35.4	22.0	15.9	3.7	1.2	7.3	12.2	2.4	0.0
	N=46	2013	45.7	26.1	4.3	6.5	0.0	4.3	8.7	4.3	0.0
精神障害	N=475	2017	37.7	22.7	10.5	5.9	0.6	11.8	6.5	1.3	2.9
	N=411	2015	39.7	28.7	6.1	4.4	0.2	9.7	8.5	1.7	1.0
	N=322	2013	34.2	30.7	8.1	5.6	1.2	9.0	8.4	1.6	1.2
その他(音声・言語・そしゃく機能障害や内部障害を含む)	N=272	2017	39.7	17.6	11.4	6.3	2.2	9.2	9.2	2.2	2.2
	N=227	2015	39.6	22.0	11.5	9.7	1.3	2.6	9.3	2.6	1.3
	N=186	2013	39.2	21.0	11.8	6.5	1.1	3.8	14.0	1.1	1.6

注 1)車椅子必要／不要とは、日常生活で車椅子を必要とする／必要としないこと。

注 2)スポーツ・レクリエーションへの意識に関する設問のため、対象を回答者本人が障害児・者である場合に限定した。

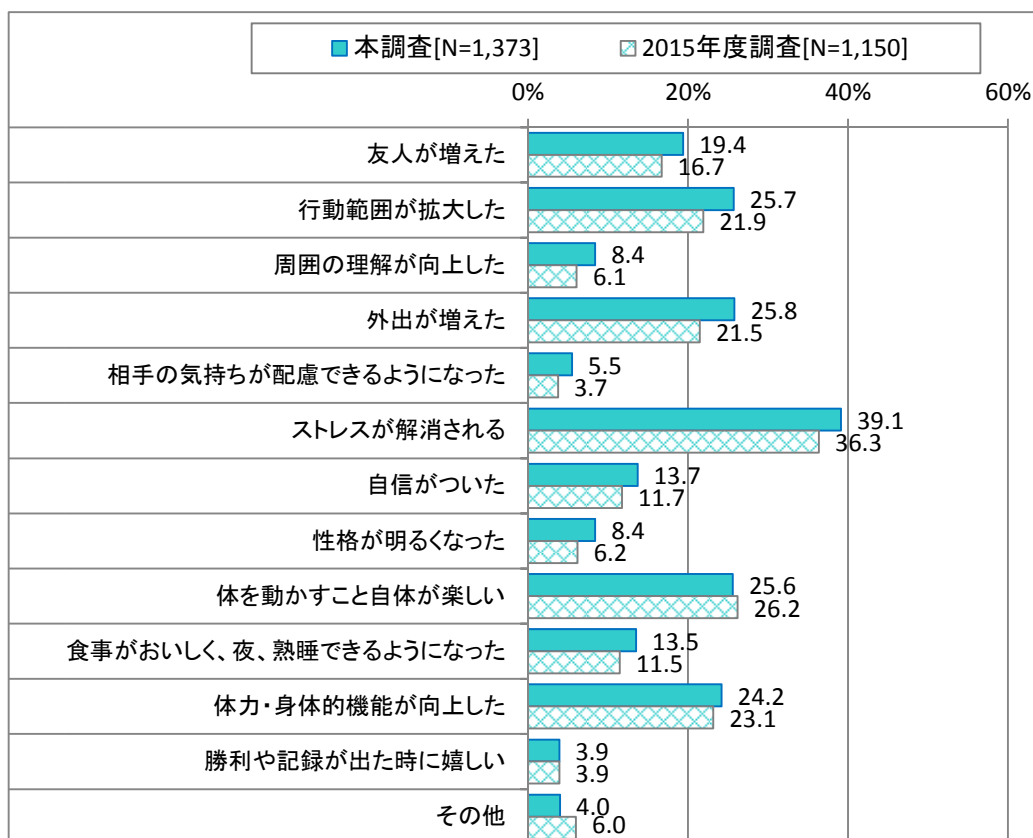
(6) スポーツ・レクリエーションをやってよかったこと

スポーツ・レクリエーションをやってよかったことについては、「ストレスが解消される」(39.1%)が最も多く、次いで「外出が増えた」(25.8%)、「行動範囲が拡大した」(25.7%)、「体を動かすこと自体が楽しい」(25.6%)であった(図表 1-35)。

障害種別に見ると、「肢体不自由(車椅子必要)」では「友人が増えた」、その他の障害では「ストレスが解消される」が高かった(図表 1-36)。

また、障害の程度を重度に絞り、障害種別に見ると、肢体不自由(車椅子必要)、発達障害、精神障害、では「友人が増えた」、肢体不自由(車椅子不要)、聴覚障害では「行動範囲が拡大した」、視覚障害、知的障害では「ストレスが解消される」の割合が高くなり、障害の程度による違いが見られた(図表 1-37)。

図表 1-35 スポーツ・レクリエーションをやってよかったこと(複数回答)



注) スポーツ・レクリエーションへの意識に関する設問のため、対象を回答者本人が障害児・者の場合に限定した。

図表 1-36 スポーツ・レクリエーションをやってよかったこと(障害種別)

(%)

	調査年度	友人が増えた	行動範囲が拡大した	周囲の理解が向上した	外出が増えた	相手の気持ちが配慮できるようになった	ストレスが解消される	自信がついた	性格が明るくなった	体を動かすこと自体が楽しい	食事がおいしく、夜、熟睡できるようになった	体力・身体的機能が向上した	勝利や記録が出た時に嬉しい	その他
肢体不自由 (車椅子必要)	2017 [N=67]	41.8	19.4	11.9	23.9	9.0	17.9	6.0	4.5	13.4	6.0	11.9	3.0	4.5
	2015 [N=51]	31.4	21.6	9.8	27.5	5.9	15.7	5.9	9.8	9.8	5.9	9.8	2.0	2.0
肢体不自由 (車椅子不要)	2017 [N=308]	22.4	27.9	8.4	24.4	5.8	31.8	13.3	7.8	26.3	13.0	27.6	3.2	3.9
	2015 [N=266]	20.7	21.1	5.3	21.4	4.1	28.9	12.0	4.9	25.6	10.2	27.4	4.9	8.3
視覚障害	2017 [N=128]	23.4	24.2	7.8	21.1	2.3	34.4	9.4	7.0	19.5	10.2	26.6	3.9	3.1
	2015 [N=114]	22.8	27.2	10.5	24.6	5.3	35.1	10.5	7.0	23.7	14.9	15.8	2.6	1.8
聴覚障害	2017 [N=133]	25.6	30.8	10.5	24.1	4.5	42.9	15.8	12.0	28.6	10.5	18.0	3.8	2.3
	2015 [N=117]	16.2	22.2	5.1	14.5	5.1	41.9	9.4	4.3	30.8	8.5	20.5	6.0	3.4
知的障害	2017 [N=64]	20.3	21.9	4.7	21.9	10.9	37.5	12.5	7.8	20.3	10.9	15.6	7.8	0.0
	2015 [N=18]	44.4	33.3	5.6	22.2	11.1	27.8	11.1	11.1	33.3	5.6	11.1	5.6	11.1
発達障害	2017 [N=128]	14.8	24.2	11.7	26.6	7.8	41.4	15.6	9.4	25.8	13.3	23.4	4.7	3.1
	2015 [N=82]	17.1	22.0	3.7	17.1	2.4	36.6	12.2	7.3	24.4	12.2	20.7	6.1	6.1
精神障害	2017 [N=475]	15.2	26.1	8.4	32.0	6.3	43.2	15.6	10.7	29.7	16.2	25.1	4.8	4.6
	2015 [N=411]	11.9	23.6	5.1	24.8	2.7	43.1	12.9	7.1	26.8	13.6	24.8	3.6	8.0
その他(音声・言語・そしゃく機能障害や内部障害を含む)	2017 [N=272]	16.9	24.6	5.5	21.0	3.7	43.0	15.4	8.1	25.7	12.9	28.3	4.0	6.3
	2015 [N=227]	13.7	23.3	7.0	18.9	3.1	38.8	13.2	4.0	29.5	12.3	24.7	1.8	3.5

注 1) 車椅子必要／不要とは、日常生活で車椅子を必要とする／必要としないこと。

注 2) スポーツ・レクリエーションへの意識に関する設問のため、対象を回答者本人が障害児・者である場合に限定した。

図表 1-37 スポーツ・レクリエーションをやってよかったこと(障害種別)【重度】

(%)

	調査年度	友人が増えた	行動範囲が拡大した	周囲の理解が向上した	外出が増えた	相手の気持ちが配慮できるようになった	ストレスが解消される	自信がついた	性格が明るくなった	体を動かすこと自体が楽しい	食事がおいしく、夜、熟睡できるようになった	体力・身体的機能が向上した	勝利や記録が出た時に嬉しい	その他
肢体不自由 (車椅子必要)	2017 [N=39]	48.7	17.9	10.3	30.8	10.3	17.9	10.3	5.1	15.4	10.3	15.4	2.6	5.1
	2015 [N=28]	35.7	32.1	14.3	35.7	3.6	17.9	3.6	3.6	10.7	3.6	14.3	0.0	0.0
肢体不自由 (車椅子不要)	2017 [N=66]	24.2	36.4	16.7	28.8	10.6	22.7	19.7	10.6	25.8	9.1	28.8	4.5	7.6
	2015 [N=66]	16.7	19.7	3.0	22.7	4.5	24.2	9.1	1.5	18.2	7.6	31.8	4.5	12.1
視覚障害	2017 [N=32]	25.0	21.9	9.4	31.3	6.3	40.6	12.5	3.1	25.0	9.4	25.0	6.3	0.0
	2015 [N=33]	36.4	27.3	12.1	12.1	3.0	18.2	12.1	3.0	18.2	15.2	18.2	6.1	6.1
聴覚障害	2017 [N=31]	38.7	51.6	22.6	32.3	6.5	45.2	22.6	16.1	32.3	16.1	35.5	6.5	0.0
	2015 [N=28]	28.6	32.1	10.7	14.3	3.6	46.4	7.1	3.6	32.1	3.6	21.4	7.1	7.1
知的障害	2017 [N=13]	30.8	30.8	0.0	0.0	15.4	38.5	15.4	15.4	15.4	7.7	7.7	0.0	0.0
	2015 [N=5]	60.0	80.0	0.0	20.0	20.0	0.0	0.0	0.0	60.0	20.0	0.0	20.0	0.0
発達障害	2017 [N=9]	55.6	22.2	44.4	33.3	22.2	33.3	22.2	22.2	11.1	11.1	11.1	11.1	0.0
	2015 [N=31]	12.9	38.7	6.5	22.6	0.0	29.0	9.7	12.9	16.1	16.1	12.9	0.0	6.5
精神障害	2017 [N=38]	42.1	28.9	15.8	23.7	10.5	28.9	15.8	13.2	10.5	10.5	13.2	5.3	7.9
	2015 [N=167]	11.4	26.3	6.0	29.9	2.4	43.1	13.8	9.0	25.7	15.6	23.4	3.0	9.0
その他(音声・言語・そしゃく機能障害や内部障害を含む)	2017 [N=100]	18.0	23.0	4.0	24.0	2.0	46.0	16.0	4.0	25.0	15.0	36.0	4.0	7.0
	2015 [N=92]	9.8	21.7	8.7	20.7	3.3	40.2	16.3	5.4	26.1	17.4	30.4	2.2	2.2

注 1) 車椅子必要／不要とは、日常生活で車椅子を必要とする／必要としないこと。

注 2) スポーツ・レクリエーションへの意識に関する設問のため、対象を回答者本人が障害児・者である場合に限定した。

(7) スポーツ・レクリエーションを行っている施設

スポーツ・レクリエーションを行っている施設について尋ねたところ、利用したことがある施設は、「公共スポーツ施設の体育館」「公共スポーツ施設のプール(屋内)」「公共スポーツ施設のグラウンド」が多かった(図表 1-38)。「その他」で多かったのは、「デイケア・デイサービス」「病院・病院周辺」「自宅・自宅周辺」「公園」などであった。

図表 1-38 スポーツ・レクリエーションを行っている施設(複数回答)

(%)

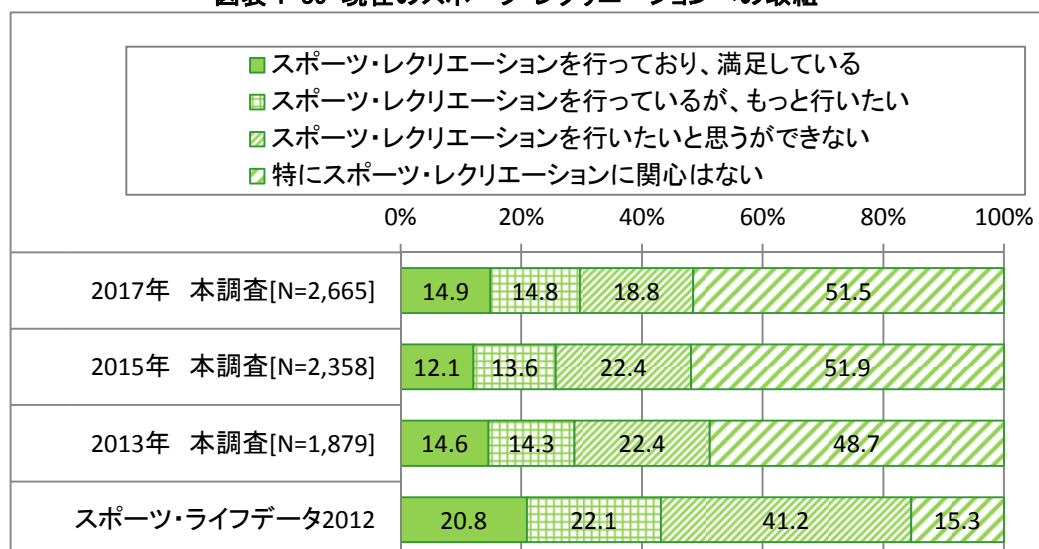
施設		N=3,099	N=187	N=589	N=264	N=325	N=454	N=576	N=720	N=566
		全体	(車椅子 不自由 不要)	(車椅子 不自由 不要)	視覚 障害	聴覚 障害	知的 障害	発達 障害	精神 障害	その他(音声・言語・ 内部障害を含む)
公共スポーツ施設	体育館	16.4	33.2	12.6	16.3	19.4	16.3	17.4	14.0	15.4
	グラウンド	12.3	17.1	11.7	15.2	17.5	9.7	14.2	10.8	9.9
	プール(屋外)	5.3	8.0	4.6	6.4	6.2	6.2	5.7	4.0	6.0
	プール(屋内)	12.6	15.0	12.6	8.7	8.6	20.3	15.8	11.1	11.5
	トレーニング室	4.0	1.1	4.2	2.3	4.9	3.1	4.2	5.4	3.5
	その他	0.7	0.0	0.5	1.1	0.6	1.1	0.7	1.0	0.7
民間スポーツ施設	体育館	4.7	7.5	3.1	6.4	6.2	4.4	6.3	4.2	4.9
	グラウンド	5.3	7.5	5.4	7.2	7.1	3.3	3.6	6.3	6.0
	プール(屋外)	3.3	4.3	3.6	3.8	4.0	4.2	2.6	1.8	4.6
	プール(屋内)	7.2	5.9	6.8	6.1	8.0	8.6	10.4	5.6	5.3
	トレーニング室	5.0	1.1	6.3	4.5	7.4	2.9	3.0	6.7	4.2
	その他	2.3	0.5	2.0	1.5	2.5	2.4	1.9	2.8	2.7
公立小中学校	体育館	6.4	4.3	2.0	3.8	4.6	9.9	16.8	3.8	5.1
	グラウンド	7.4	4.8	4.6	6.4	6.2	7.7	16.8	3.9	6.0
	プール	2.8	1.1	1.0	2.3	1.5	5.1	6.9	1.4	2.3
	その他	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.5	0.0	0.4
障害者スポーツ専用・ 優先施設	体育館	2.8	8.0	1.4	3.0	3.4	7.0	2.4	1.7	3.2
	小体育館(卓球室、訓練室等)	2.1	5.3	1.9	1.9	4.0	4.6	3.0	1.8	2.7
	グラウンド	1.7	2.7	1.5	1.9	1.2	3.5	1.6	1.5	2.3
	プール	2.2	3.2	2.0	1.5	2.5	6.4	2.8	1.4	3.0
	その他	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.2
福祉施設・高齢者施設	体育館	2.2	2.1	1.9	3.0	2.5	4.8	1.7	2.2	2.3
	小体育館(卓球室、訓練室等)	2.5	5.9	2.7	1.5	2.5	4.6	2.3	2.8	3.2
	プール	0.7	1.6	0.0	1.5	0.6	1.8	0.7	1.0	1.6
	その他	1.4	4.3	2.4	1.9	1.2	2.2	1.0	1.4	1.4
特別支援学校	体育館	3.5	4.3	1.7	3.0	3.4	13.2	7.1	1.8	3.2
	小体育館(卓球室、訓練室等)	1.5	1.6	1.0	1.1	2.2	4.6	3.1	0.7	1.4
	グラウンド	3.0	3.7	1.2	5.3	3.7	10.4	4.0	1.4	3.2
	プール	1.5	1.6	1.4	0.8	0.9	6.4	3.0	0.8	2.8
	その他	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0
その他		47.5	19.3	50.3	46.2	43.4	44.1	46.5	56.9	50.7

(8) 現在のスポーツ・レクリエーションへの取組

現在のスポーツ・レクリエーションへの取組については、「特にスポーツ・レクリエーションに関心はない」(51.5%)が最も多く、次いで「スポーツ・レクリエーションを行いたいと思うができない」(18.8%)であった(図表 1-39)。「スポーツ・レクリエーションを行っており、満足している」のは 14.9%であった。笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」(2012)と比較すると、「特にスポーツ・レクリエーションに関心はない」無関心層が多かった。

過去 1 年間のスポーツ・レクリエーションの実施有無別に見ると、非実施者において、「特にスポーツ・レクリエーションに関心はない」無関心層が 81.7%となり、実施者の約 4 倍の無関心層がいた(図表 1-40)。

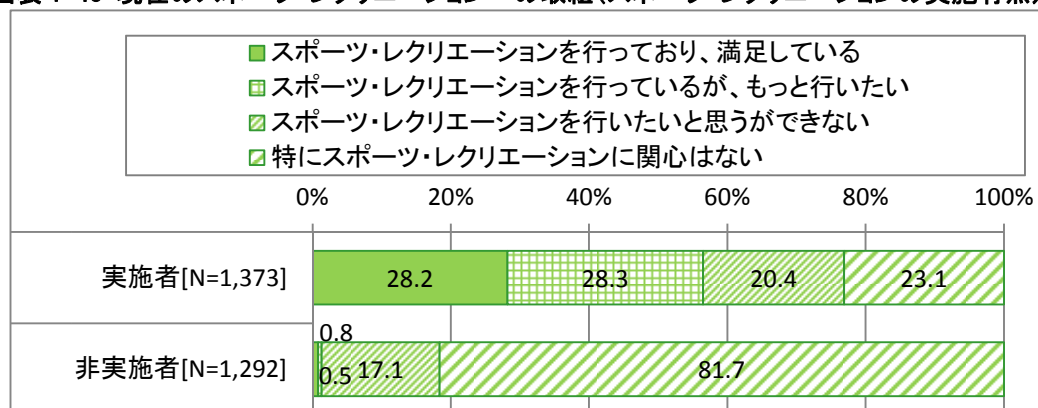
図表 1-39 現在のスポーツ・レクリエーションへの取組



注 1) スポーツ・レクリエーションへの意識に関する設問のため、対象を回答者本人が障害児・者である場合に限定した。

注 2) 笹川スポーツ財団「スポーツライフ・データ」(2012): 成人を対象とした全国調査。

図表 1-40 現在のスポーツ・レクリエーションへの取組(スポーツ・レクリエーションの実施有無別)



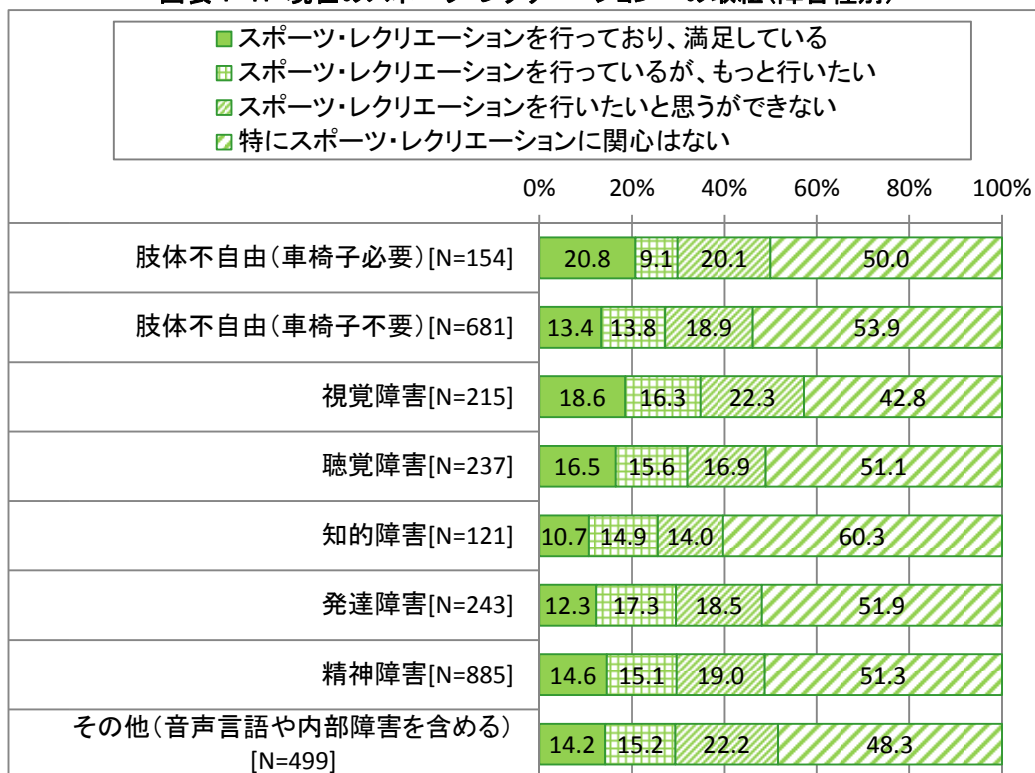
注 1) スポーツ・レクリエーションへの意識に関する設問のため、対象を回答者本人が障害児・者である場合に限定した。

注 2) 非実施者の中に、「スポーツ・レクリエーションを行っており、満足している」「スポーツを行っているが、もっと行いたい」と回答した人がいる。矛盾した回答であるが、比較の参考として、そのまま掲載した。

障害種別に見ると、全障害において「特にスポーツ・レクリエーションに関心はない」無関心層の割合が高く、肢体不自由（車椅子必要）、視覚障害においては「スポーツ・レクリエーションを行いたいと思うができない」が2割を超えた。（図表 1-41）。

障害の程度を重度に絞ると、視覚障害では「スポーツ・レクリエーションを行いたいと思うができない」が約 3 割とほかの障害に比べて高く、聴覚障害では「特にスポーツ・レクリエーションに関心はない」、発達障害では「スポーツ・レクリエーションを行っており、満足している」の割合が高かった。重度障害者ほど、スポーツ・レクリエーションへの関心が高く、行いたいと思っているが行えない実態が分かった（図表 1-42）。

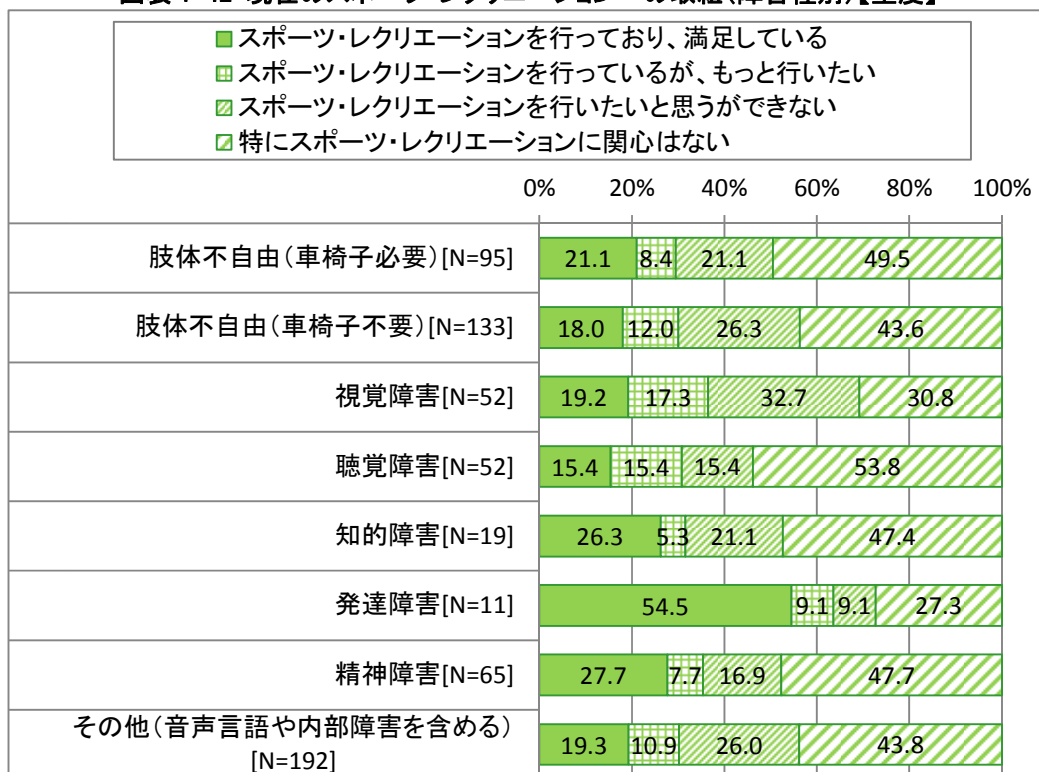
図表 1-41 現在のスポーツ・レクリエーションへの取組（障害種別）



注 1) 車椅子必要／不要とは、日常生活で車椅子を必要とする／必要としないこと。

注 2) スポーツ・レクリエーションへの意識に関する設問のため、対象を回答者本人が障害児・者である場合に限定した。

図表 1-42 現在のスポーツ・レクリエーションへの取組(障害種別)【重度】



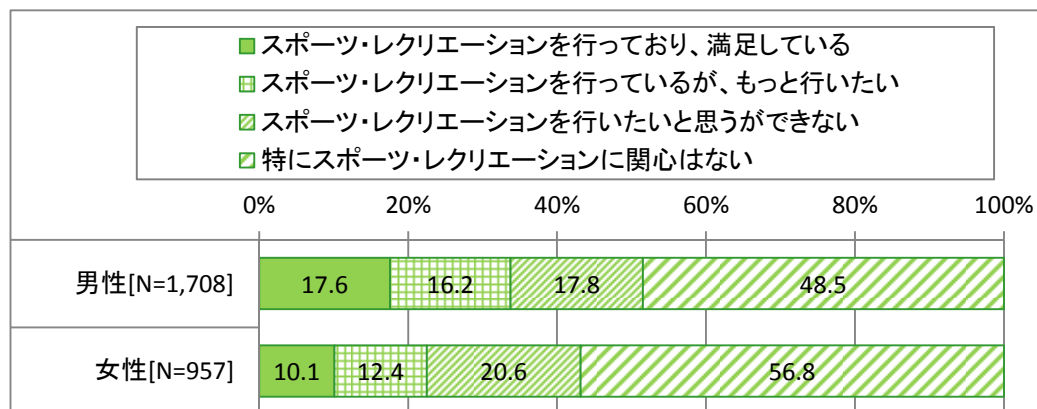
注 1) 車椅子必要／不要とは、日常生活で車椅子を必要とする／必要としないこと。

注 2) スポーツ・レクリエーションへの意識に関する設問のため、対象を回答者本人が障害児・者である場合に限定した。

性別に見ると、「スポーツ・レクリエーションを行っており、満足している」の男性の割合が高く、「特にスポーツ・レクリエーションに関心はない」無関心層の割合では女性の方が高くなった(図表 1-43)。

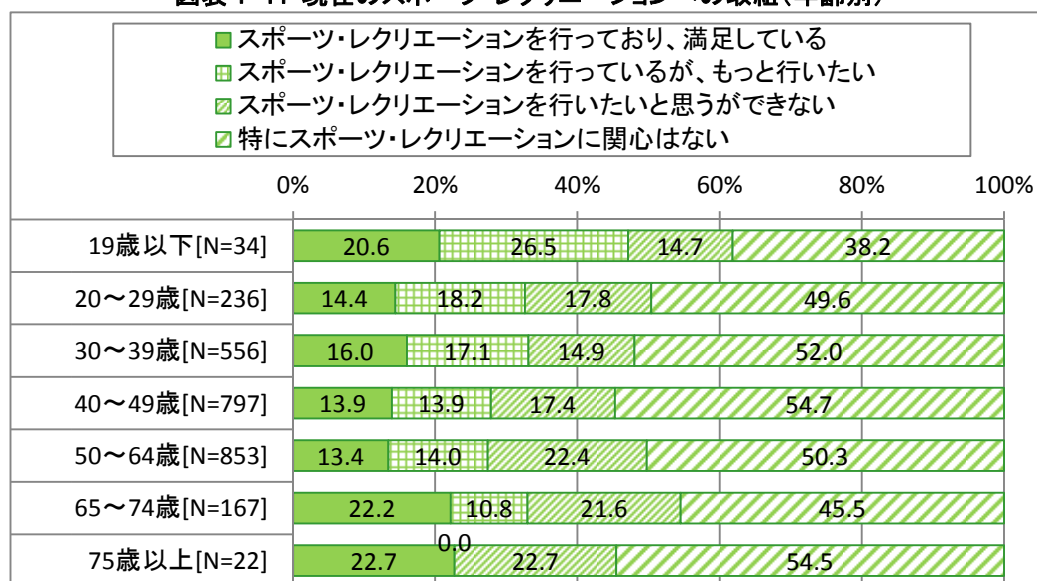
年齢別に見ると、20～64 歳に比べて、65 歳以上では「スポーツ・レクリエーションを行っており、満足している」割合が高かった(図表 1-44)。

図表 1-43 現在のスポーツ・レクリエーションへの取組(性別)



注) スポーツ・レクリエーションへの意識に関する設問のため、対象を回答者本人が障害児・者である場合に限定した。

図表 1-44 現在のスポーツ・レクリエーションへの取組(年齢別)



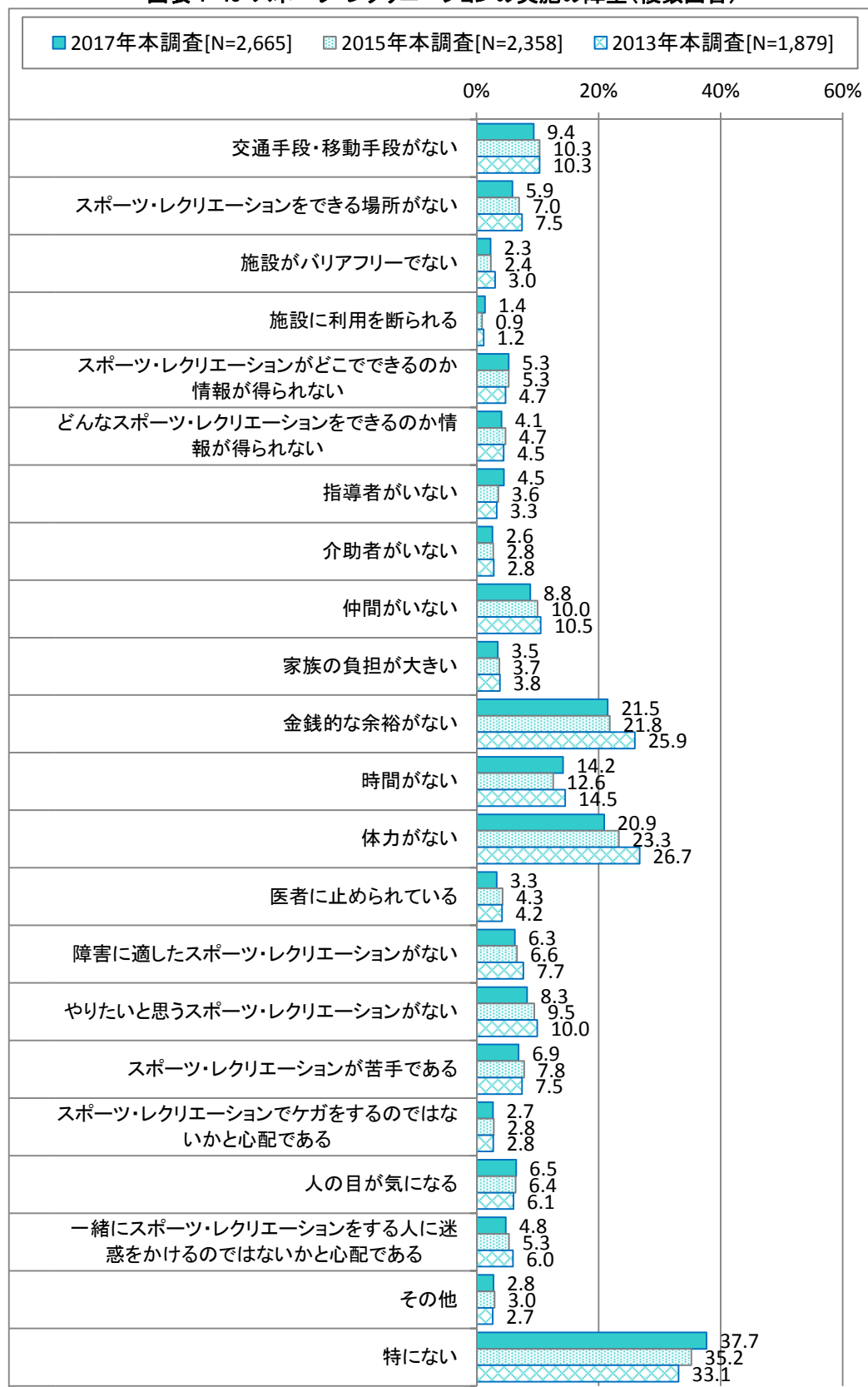
(9) スポーツ・レクリエーションの実施の障壁

スポーツ・レクリエーションの実施において障壁となっているものについて尋ねたところ、「特にない」が37.7%であった。障壁があると回答した中では、「金銭的な余裕がない」(21.5%)が最も多く、次いで「体力がない」(20.9%)、「時間がない」(14.2%)、「交通手段・移動手段がない」(9.4%)、「仲間がいない」(8.8%)であった(図表 1-45)。

障害種別に見ると、前述の障壁に加えて、肢体不自由では車椅子の要・不要にかかわらず、「障害に適したスポーツ・レクリエーションがない」、聴覚障害では「スポーツ・レクリエーションをできる場所がない」、発達障害では「スポーツ・レクリエーションが苦手である」「やりたいと思うスポーツ・レクリエーションがない」が上位になった(図表 1-46)。

障害の程度を重度に絞り、障害種別に見ると、肢体不自由、視覚障害、精神障害において、「交通手段・移動手段がない」「体力がない」「金銭的な余裕がない」が上位になった(図表 1-47)。

図表 1-45 スポーツ・レクリエーションの実施の障壁(複数回答)



注) スポーツ・レクリエーションへの意識に関する設問のため、対象を回答者本人が障害児・者である場合に限定した。

図表 1-46 スポーツ・レクリエーションの実施の障壁(複数回答)

(%)

	(車椅子が必要)		(車椅子不自由)		視覚障害		聴覚障害		知的障害		発達障害		精神障害		その他の障害(音声言語や)	
	N=154		N=681		N=215		N=237		N=121		N=243		N=885		N=499	
1位	交通手段・移動手段がない	21.4	体力がない	17.8	金銭的な余裕がない	20.5	時間がない	19.8	金銭的な余裕がない	20.7	金銭的な余裕がない	32.5	金銭的な余裕がない	32.1	体力がない	24.8
2位	体力がない	18.8	金銭的な余裕がない	17.0	時間がない	17.7	金銭的な余裕がない	16.5	時間がない	18.2	体力がない	26.3	体力がない	28.4	金銭的な余裕がない	19.4
3位	金銭的な余裕がない	16.2	時間がない	10.6	体力がない	15.8	体力がない	13.5	交通手段・移動手段がない	14.9	時間がない	18.1	時間がない	16.2	時間がない	15.0
4位	障害に適したスポーツ・レクリエーションがない	13.0	障害に適したスポーツ・レクリエーションがない	10.0	交通手段・移動手段がない	15.8	スポーツ・レクリエーションをできる場所がない	6.8	仲間がいない	13.2	スポーツ・レクリエーションが苦手である	17.7	仲間がいない	13.3	交通手段・移動手段がない	9.2
5位	スポーツ・レクリエーションをできる場所がない	12.3	交通手段・移動手段がない	9.1	仲間がいない	11.2	交通手段・移動手段がない	6.3	体力がない	9.9	仲間がいない	14.8	人の目が気になる	12.9	障害に適したスポーツ・レクリエーションがない	8.8
											やりたいと思うスポーツ・レクリエーションがない					
	特にない	31.2	特にない	42.3	特にない	34.9	特にない	42.2	特にない	44.6	特にない	30.9	特にない	30.8	特にない	33.5

注 1) 車椅子必要／不要とは、日常生活で車椅子を必要とする／必要としないこと。

注 2) スポーツ・レクリエーションへの意識に関する設問のため、対象を回答者本人が障害児・者である場合に限定した。

図表 1-47 スポーツ・レクリエーションの実施の障壁(複数回答)【重度】

(%)

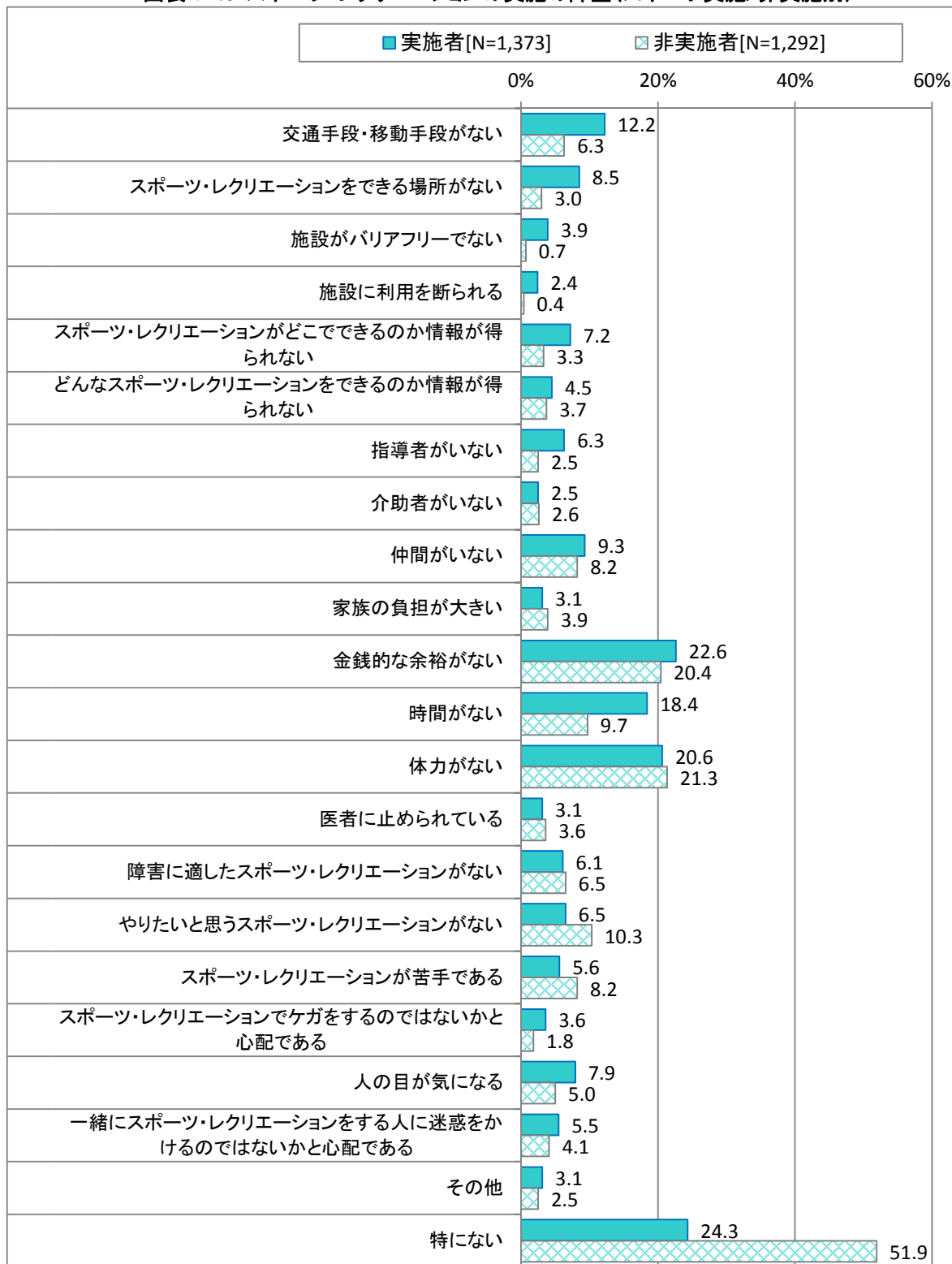
	(車椅子が必要)		(車椅子が不要)		視覚障害		聴覚障害		知的障害		発達障害		精神障害		その他の障害(音声言語等)	
	N=95		N=133		N=52		N=52		N=19		N=11		N=65		N=192	
1位	交通手段・移動手段がない	27.4	体力がない	27.1	交通手段・移動手段がない	34.6	時間がない	15.4	交通手段・移動手段がない	42.1	交通手段・移動手段がない	54.5	交通手段・移動手段がない	26.2	体力がない	27.1
2位	体力がない	26.3	金銭的な余裕がない	21.8	金銭的な余裕がない	26.9	交通手段・移動手段がない	13.5	金銭的な余裕がない	21.1	金銭的な余裕がない		金銭的な余裕がない	20.0	金銭的な余裕がない	17.2
3位	金銭的な余裕がない	21.1	交通手段・移動手段がない	18.8	体力がない	17.3	金銭的な余裕がない	13.5	スポーツ・レクリエーションをできる場所がない		スポーツ・レクリエーションをできる場所がない		体力がない	18.5	時間がない	15.1
4位	家族の負担が大き	16.8	障害に適したスポーツ・レクリエーションがない	16.5	時間がない	15.4	体力がない	11.5	指導者がいない		仲間がいない	18.2	スポーツ・レクリエーションをできる場所がない	13.8	障害に適したスポーツ・レクリエーションがない	10.4
5位	障害に適したスポーツ・レクリエーションがない	15.8	時間がない	10.5	介助者がいない	11.5	スポーツ・レクリエーションがどこでできるのか情報が得られない	9.6	仲間がいない		スポーツ・レクリエーションがどこでできるのか情報が得られない		やりたいと思うスポーツ・レクリエーションがない		交通手段・移動手段がない	9.9
											介助者がいない					
	特にな	22.1	特にな	25.6	特にな	17.3	特にな	40.4	特にな	15.8	特にな	9.1	特にな	30.8	特にな	31.8

注 1) 車椅子必要／不要とは、日常生活で車椅子を必要とする／必要としないこと。

注 2) スポーツ・レクリエーションへの意識に関する設問のため、対象を回答者本人が障害児・者である場合に限定した。

スポーツの実施／非実施別に見ると、「交通手段・移動手段がない」「スポーツ・レクリエーションをできる場所がない」「時間がない」においては、実施者の割合が高く、「やりたいと思うスポーツ・レクリエーションがない」「スポーツ・レクリエーションが苦手である」においては、非実施者の割合が高かった(図表 1-48)。「特にない」の非実施者の割合も高かった。

図表 1-48 スポーツ・レクリエーションの実施の障壁(スポーツ実施/非実施別)



注) スポーツ・レクリエーションへの意識に関する設問のため、対象を回答者本人が障害児・者である場合に限定した。

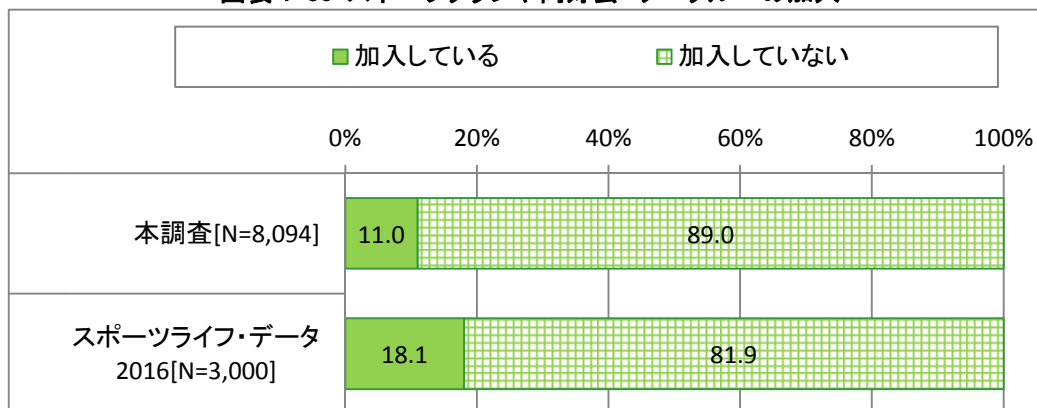
(10) 今後行いたいと思うスポーツ・レクリエーション

今後行いたいと思うスポーツ・レクリエーション(現在行っているスポーツ・レクリエーションを含む)については、どの障害においても「特にない」との回答が多かった。行いたいと思うスポーツ・レクリエーションの中では、「散歩(ぶらぶら歩き)」「ウォーキング」「水泳」「筋力トレーニング」の回答が多く(図表 1-49)、この傾向は、過去 1 年間に行ったスポーツ・レクリエーション(図表 1-26、図表 1-27、図表 1-28)と同様の結果である。また、笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」(2016)においても、「散歩(ぶらぶら歩き)」「ウォーキング」「筋力トレーニング」の実施希望が高く、本調査も同じ傾向を示した。

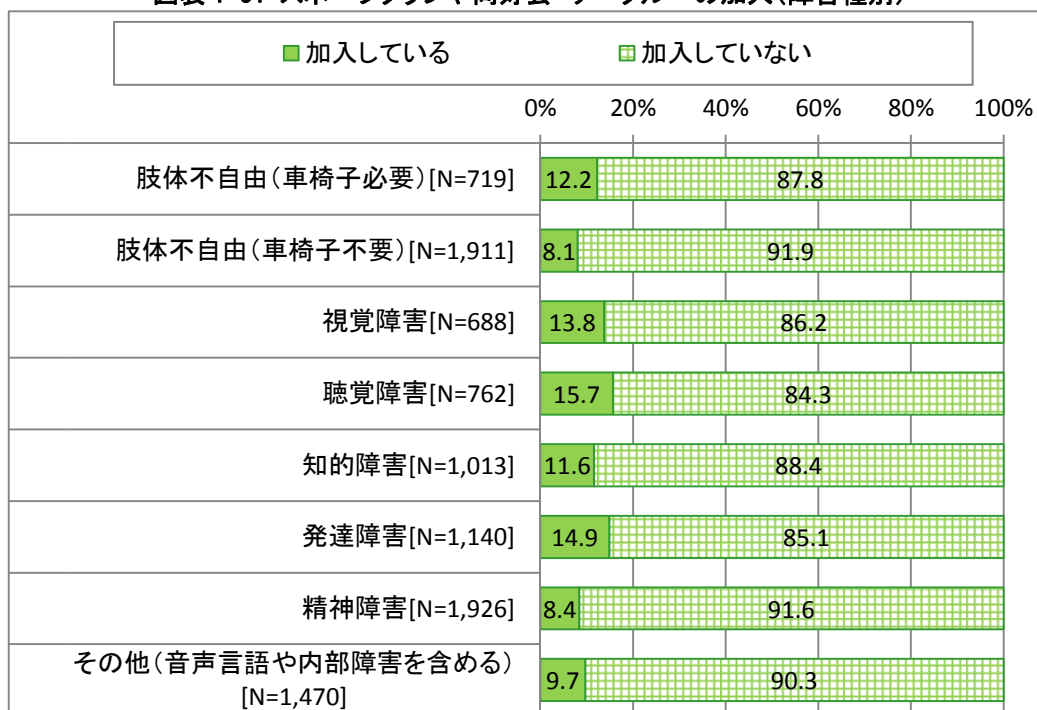
(11) スポーツクラブや同好会・サークルへの加入

スポーツクラブや同好会・サークルに加入しているかについて尋ねたところ、「加入している」は 11.0%であった(図表 1-50)。笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」(2016)では、スポーツクラブや同好会・サークルに加入しているのは 18.1%であった。障害種別に見ると、聴覚障害で 15.7%、発達障害で 14.9%、視覚障害で 13.8%が加入していた(図表 1-51)。

図表 1-50 スポーツクラブや同好会・サークルへの加入

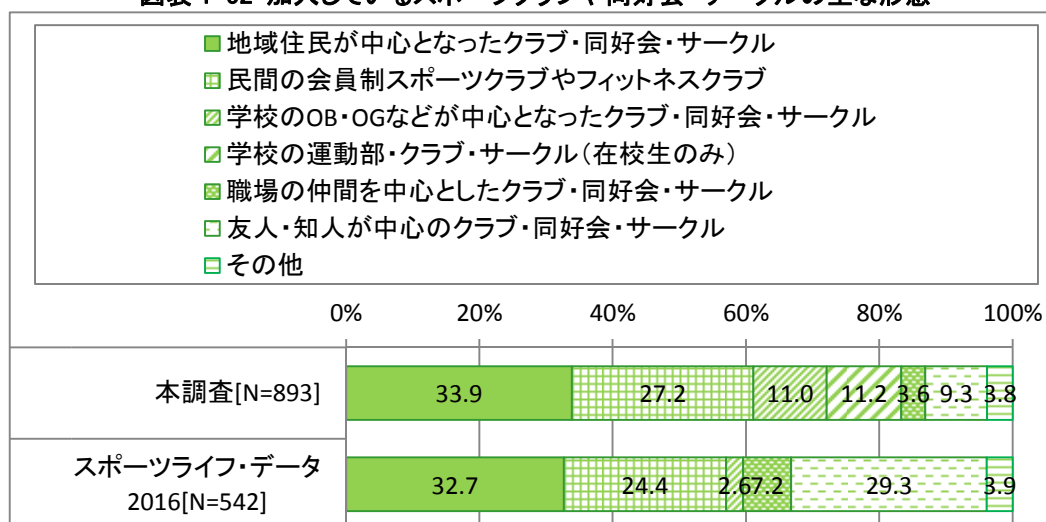


図表 1-51 スポーツクラブや同好会・サークルへの加入(障害種別)



加入しているスポーツクラブや同好会・サークルの主な形態について見ると、「地域住民が中心となったクラブ・同好会・サークル」(33.9%)が最も多く、次いで「民間の会員制スポーツクラブやフィットネスクラブ」(27.2%)、「学校の運動部・クラブ・サークル(在校生のみ)」(11.2%)、「学校のOB・OGなどが中心となったクラブ・同好会・サークル」(11.0%)であった(図表 1-52)。

図表 1-52 加入しているスポーツクラブや同好会・サークルの主な形態

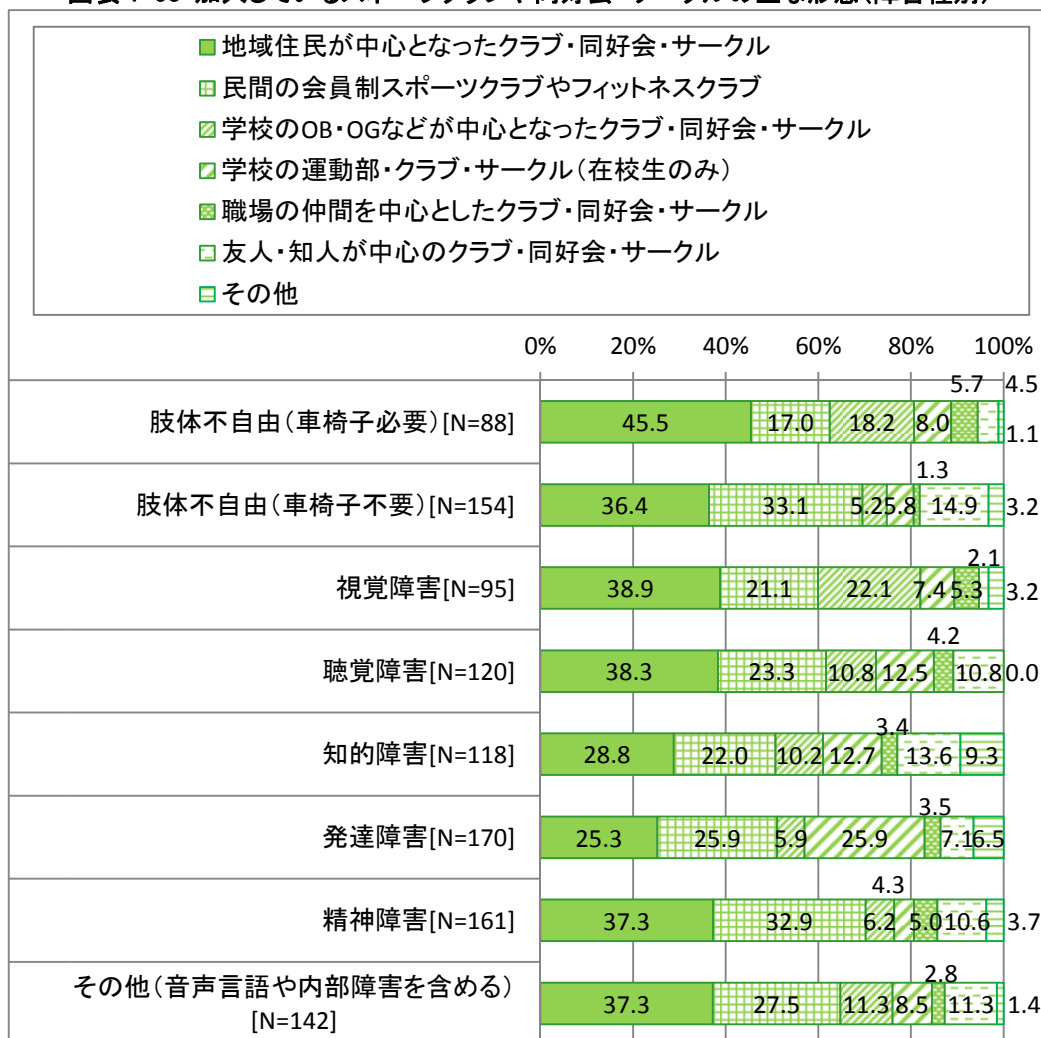


注 1) 笹川スポーツ財団「スポーツライフ・データ」(2016)では、選択肢「学校の運動部・クラブ・サークル(在校生のみ)」はない。

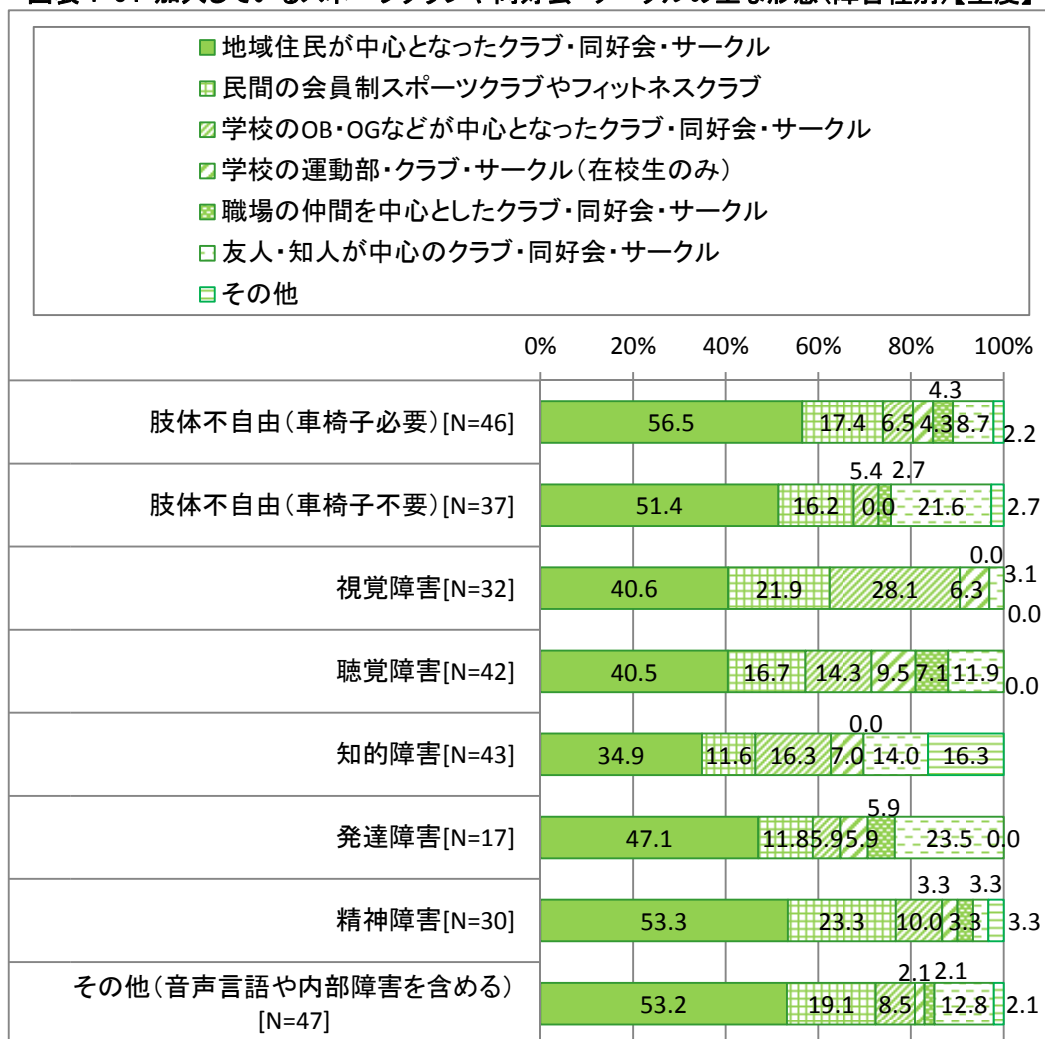
障害種別に見ると、肢体不自由(車椅子必要)では「地域住民が中心となったクラブ・同好会・サークル」(45.5%)、肢体不自由(車椅子不要)、精神障害では「民間の会員制スポーツクラブやフィットネスクラブ」(33.1%) (32.9%)、視覚障害では「学校のOB・OGなどが中心となったクラブ・同好会・サークル」(22.1%)、発達障害では「学校の運動部・クラブ・サークル(在校生のみ)」(25.9%)がほかの障害に比べて高かった(図表 1-53)。

障害の程度を重度に絞り障害種別に見ると、肢体不自由、精神障害では、「地域住民が中心となったクラブ・同好会・サークル」の割合が5割を越えた(図表 1-54)。

図表 1-53 加入しているスポーツクラブや同好会・サークルの主な形態(障害種別)

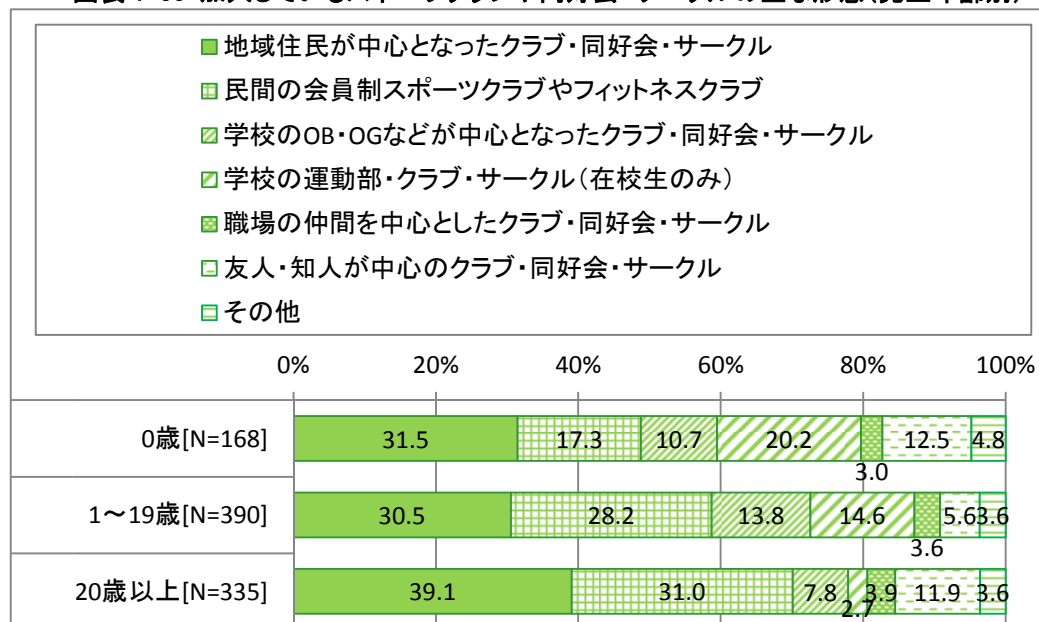


図表 1-54 加入しているスポーツクラブや同好会・サークルの主な形態(障害種別)【重度】



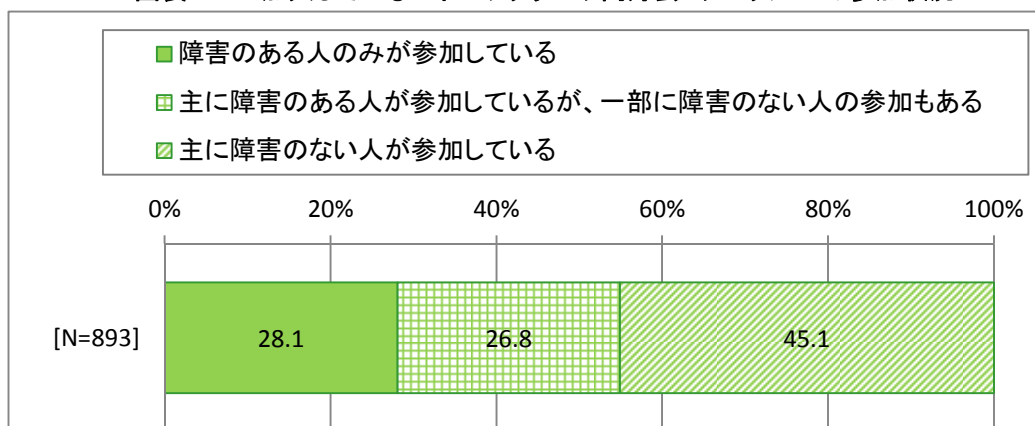
発生年齢別に見ると、全年齢とも「地域住民が中心となったクラブ・同好会・サークル」が最も高く、次いで、0 歳では「学校の運動部・クラブ・サークル(在校生のみ)」(20.2%)、1～19 歳と 20 歳以上では「民間の会員制スポーツクラブやフィットネスクラブ」(28.2%) (31.0%)が高く、障害の発生以前から加入しているクラブ・同好会・サークルに、障害が発生した後も参加している状況が考えられる(図表 1-55)。

図表 1-55 加入しているスポーツクラブや同好会・サークルの主な形態(発生年齢別)

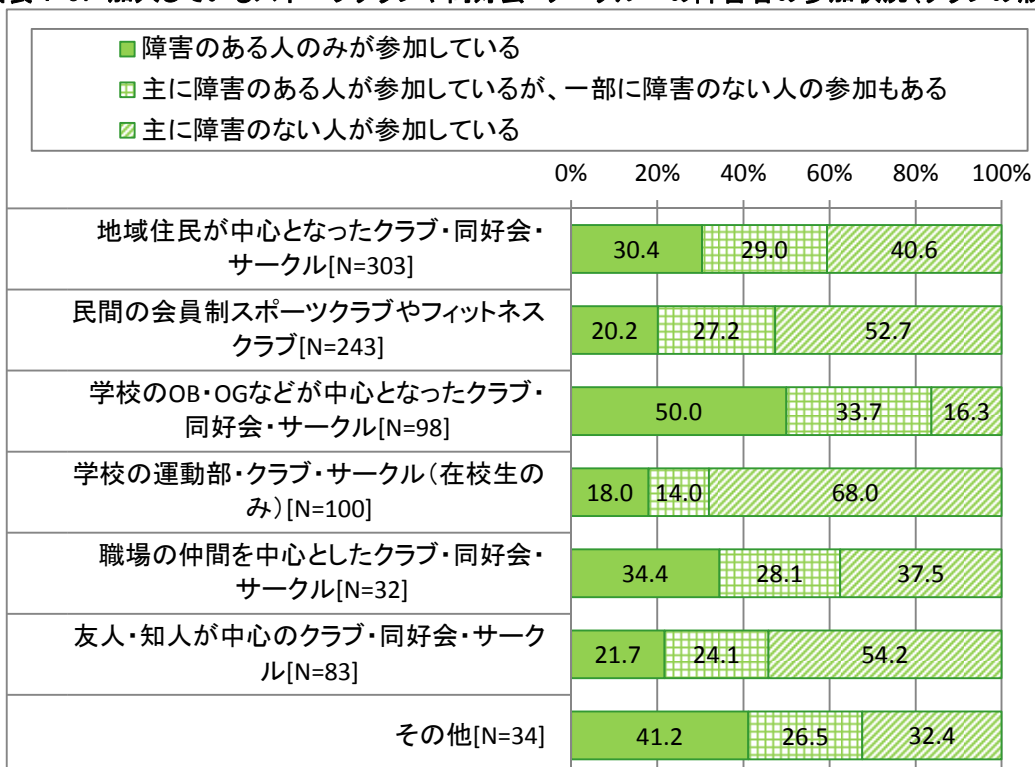


加入しているスポーツクラブや同好会・サークルへの障害者の参加状況について見ると、「障害のある人のみが参加している」は 28.1%で、「主に障害のある人が参加しているが、一部に障害のない人の参加もある」(26.8%)とあわせると、半数を越えた(図表 1-56)。クラブの形態別に見ると、「学校の OB・OG などを中心となったクラブ・同好会・サークル」では、「障害のある人のみが参加」しているが 50.0%で、「主に障害のある人が参加しているが、一部に障害のない人の参加もある」(33.7%)とあわせると 8 割を越えた(図表 1-57)。

図表 1-56 加入しているスポーツクラブや同好会・サークルへの参加状況



図表 1-57 加入しているスポーツクラブや同好会・サークルへの障害者の参加状況(クラブの形態別)



(12) 過去1年間のスポーツ観戦の有無

過去1年間のスポーツ観戦の有無では、直接のスポーツ観戦、テレビでのスポーツ観戦、インターネットでのスポーツ観戦の全てにおいて、「観戦した種目はない」が最も多かった。笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」(2016)によると、直接のスポーツ観戦をしたことないが67.1%、テレビでのスポーツ観戦をしたことないが12.0%であった。障害者のスポーツ観戦は、直接のスポーツ観戦では、一般と同様の傾向を示したが、テレビでのスポーツ観戦では、「観戦した種目はない」が47.4%となっており、一般に比べて低いことが分かる(図表1-58)。観戦した種目を見ると、直接のスポーツ観戦では「プロ野球(NPB)」「高校野球」「Jリーグ(J1、J2、J3)」、テレビでのスポーツ観戦では「プロ野球(NPB)」「高校野球」「大相撲」、インターネットでのスポーツ観戦では「プロ野球(NPB)」「高校野球」「Jリーグ(J1、J2、J3)」が多かった。

図表 1-58 過去1年間のスポーツ観戦の有無(複数回答)

(%)

	直接スポーツの試合を観戦したことがある			テレビでスポーツの試合を観戦したことがある			インターネットでスポーツの試合を観戦したことがある
	本調査 (全体)	本調査 (成人)	スポーツ ライフ・データ 2016	本調査 (全体)	本調査 (成人)	スポーツ ライフ・データ 2016	本調査 (全体)
	N=8,094	N=6,700	N=3,000	N=8,094	N=6,700	N=3,000	N=8,094
プロ野球(NPB)	16.5	16.8	15.6	31.2	33.3	53.8	8.1
メジャーリーグ(アメリカ大リーグ)	1.7	1.9	—	10.9	12.1	19.7	1.9
高校野球	5.1	5.4	5.5	23.2	25.2	48.4	2.6
アマチュア野球(大学、社会人など)	2.1	2.1	1.5	4.0	4.5	—	1.4
Jリーグ(J1、J2、J3)	4.5	4.5	5.3	10.9	11.5	25.3	2.2
海外プロサッカー(欧州、南米など)	1.2	1.2	—	5.9	6.4	—	1.5
サッカー日本代表試合(五輪代表含む)	1.8	1.8	0.9	16.9	18.2	45.3	1.6
サッカー日本女子代表試合(なでしこジャパン)	1.1	1.0	—	8.7	9.4	30.9	1.3
サッカー(高校、大学、JFLなど)	1.3	1.3	2.4	4.2	4.6	—	0.9
プロバスケットボール(Bリーグ)	0.9	0.8	0.8	3.2	3.3	—	0.9
海外プロバスケットボール(NBAなど)	0.5	0.5	—	2.6	2.7	—	0.9
バスケットボール(高校、大学など)	0.8	0.8	1.4	1.8	1.8	—	0.7
バレーボール(日本代表試合)	0.8	0.9	—	9.3	9.9	—	0.7
バレーボール(高校、大学、Vリーグなど)	0.8	0.8	1.4	3.2	3.5	—	0.5
大相撲	2.9	3.3	1.2	22.5	25.2	38.0	1.2
マラソン・駅伝	2.5	2.6	3.9	16.7	18.4	43.2	1.0
ラグビー	1.1	1.1	1.3	6.0	6.9	19.0	0.7
プロテニス	1.0	1.0	—	10.5	11.6	36.5	1.1
プロゴルフ	1.2	1.3	1.3	8.6	10.0	23.5	1.1
フィギュアスケート	1.0	1.0	0.5	15.6	17.0	46.2	1.2
格闘技(ボクシング、総合格闘技など)	1.4	1.6	1.2	8.8	10.0	19.9	1.2
F1やNASCARなど自動車レース	0.8	0.9	0.5	4.5	5.0	—	1.3
その他	0.5	0.5	—	0.8	0.8	—	0.4
観戦した種目はない	72.0	72.0	67.1	47.4	45.3	12.0	81.4

障害種別に見ると、直接のスポーツ観戦、テレビでのスポーツ観戦ともに、聴覚障害の観戦率が高く、知的障害の観戦率が低かった(図表 1-59、1-60)。

図表 1-59 過去 1 年間のスポーツ観戦の有無【直接観戦】(障害種別)

(%)

直接観戦	(車椅子必要) 肢体不自由	(車椅子不要) 肢体不自由	視覚障害	聴覚障害	知的障害	発達障害	精神障害	その他(音声言語や 内部障害を含める)
	N=719	N=1,911	N=688	N=762	N=1,013	N=1,140	N=1,926	N=1,470
プロ野球(NPB)	16.0	15.2	15.8	20.2	14.0	15.0	16.5	16.7
メジャーリーグ(アメリカ大リーグ)	2.5	1.9	1.6	2.2	1.4	0.8	1.5	1.6
高校野球	3.2	5.3	6.1	6.2	2.6	4.8	5.8	5.6
アマチュア野球(大学、社会人など)	2.8	1.1	2.8	3.8	1.5	1.8	2.3	2.9
Jリーグ(J1、J2、J3)	2.4	3.1	4.1	4.9	5.3	6.1	5.5	4.2
海外プロサッカー(欧州、南米など)	1.5	1.0	1.6	1.8	0.8	1.1	1.1	1.4
サッカー日本代表試合(五輪代表含む)	1.8	1.5	2.0	2.0	0.5	1.4	2.2	2.2
サッカー日本女子代表試合(なでしこジャパン)	1.3	0.6	1.6	2.0	0.9	1.1	0.9	1.1
サッカー(高校、大学、JFL など)	1.1	0.8	2.2	2.0	0.9	0.9	1.5	1.7
プロバスケットボール(Bリーグ)	0.6	0.4	0.9	2.4	1.1	1.1	0.9	0.5
海外プロバスケットボール(NBA など)	0.6	0.4	0.6	0.9	0.5	0.4	0.6	0.3
バスケットボール(高校、大学など)	1.0	0.5	1.7	1.4	0.7	0.9	0.8	0.5
バレーボール(日本代表試合)	1.0	0.4	0.7	1.4	0.7	1.1	0.9	0.9
バレーボール(高校、大学、Vリーグなど)	0.8	0.6	0.9	1.3	0.8	1.1	1.0	1.0
大相撲	1.8	3.0	2.8	3.8	1.8	2.0	3.2	3.6
マラソン・駅伝	1.3	1.9	1.9	3.0	2.6	2.5	3.4	3.0
ラグビー	0.6	1.0	1.3	1.7	0.7	1.0	1.0	1.0
プロテニス	1.1	0.5	1.7	1.7	0.8	0.7	0.9	1.7
プロゴルフ	1.3	1.2	1.3	1.7	0.8	0.7	1.0	1.5
フィギュアスケート	0.7	0.7	1.6	1.6	1.3	1.3	1.3	0.7
格闘技(ボクシング、総合格闘技など)	1.0	1.2	1.0	1.2	0.8	1.8	2.1	1.4
F1 や NASCAR など自動車レース	0.6	0.6	0.7	1.0	0.5	0.9	1.3	0.5
その他	0.1	0.4	0.1	0.7	0.3	0.7	0.5	0.8
観戦した種目はない	75.4	74.5	70.9	66.4	75.9	70.7	73.6	70.9

図表 1-60 過去 1 年間のスポーツ観戦の有無【テレビ観戦】(障害種別)

(%)

テレビ観戦	肢体不自由 (車椅子必要)	肢体不自由 (車椅子不要)	視覚障害	聴覚障害	知的障害	発達障害	精神障害	その他(音声言語 や内部障害を含め る)
	N=719	N=1,911	N=688	N=762	N=1,013	N=1,140	N=1,926	N=1,470
プロ野球(NPB)	27.0	32.1	31.4	34.3	23.7	27.0	33.0	35.2
メジャーリーグ(アメリカ大リーグ)	8.2	12.1	11.8	12.3	6.4	8.6	11.8	13.5
高校野球	17.5	24.4	23.3	24.1	14.7	19.5	26.2	28.6
アマチュア野球(大学、社会人など)	3.6	3.2	3.9	4.9	2.9	2.7	5.1	5.2
Jリーグ(J1、J2、J3)	7.1	10.4	11.3	11.3	8.0	11.1	12.6	12.8
海外プロサッカー(欧州、南米など)	4.0	6.3	4.2	6.7	3.2	5.7	7.7	7.4
サッカー日本代表試合(五輪代表含む)	12.0	18.1	15.8	17.2	10.5	16.2	18.0	19.7
サッカー日本女子代表試合(なでしこジャパン)	5.6	9.2	7.8	8.7	5.2	7.5	10.0	10.6
サッカー(高校、大学、JFL など)	2.9	4.5	4.9	4.6	2.7	3.3	5.0	4.8
プロバスケットボール(Bリーグ)	2.1	2.9	3.6	3.0	3.0	3.8	3.8	3.3
海外プロバスケットボール(NBA など)	1.5	2.3	3.1	2.8	2.7	3.0	3.4	3.0
バスケットボール(高校、大学など)	1.4	1.3	2.5	2.0	1.5	2.2	2.4	1.6
バレーボール(日本代表試合)	6.7	7.6	9.3	10.2	8.3	10.9	11.3	11.1
バレーボール(高校、大学、Vリーグなど)	2.2	2.5	3.8	3.3	2.2	3.0	4.8	4.2
大相撲	20.2	25.0	23.4	25.7	15.1	16.1	25.4	27.8
マラソン・駅伝	11.7	19.0	17.2	18.8	8.7	13.6	18.0	21.6
ラグビー	3.5	6.6	6.8	5.0	2.4	4.4	7.7	7.5
プロテニス	7.0	11.4	9.9	12.3	4.1	8.6	12.5	13.1
プロゴルフ	6.1	10.4	9.3	10.1	3.9	4.8	9.5	11.7
フィギュアスケート	11.4	15.3	15.3	15.0	10.0	14.6	19.4	18.5
格闘技(ボクシング、総合格闘技など)	6.0	10.4	8.4	9.4	3.4	6.9	10.0	11.1
F1 や NASCAR など自動車レース	1.9	4.8	5.1	4.2	2.1	4.1	6.1	5.3
その他	0.7	0.9	0.3	0.8	0.4	0.9	1.0	1.0
観戦した種目はない	50.6	48.6	47.1	39.9	57.8	52.6	46.6	40.4

(2) 障害のある人となない人が一緒に行うスポーツ大会に関する調査

1. 調査概要

1. 1 調査目的

本調査は、地域で開催されている障害のある人となない人が一緒に行える地域のスポーツ大会の開催状況と運営体制の実態を明らかにすることを目的とする。

1. 2 調査方法

【調査 1】事例調査（ヒアリング調査）

(1) 調査方法

障害がある人となない人が一緒に行うスポーツ大会の運営状況について、大会事務局の担当者に対して、電話並びに現地訪問による聞き取り調査を実施した。

(2) 調査対象

- ・ 東京 CUP 卓球大会
- ・ 全国ユニファイドサッカー大会
- ・ 全日本フロアホッケー競技大会
- ・ ひっぱりリーグ神戸
- ・ 全国車いすマラソン大会
- ・ 全国車椅子バスケットボール大学選手権大会
- ・ 会津若松市鶴ヶ城ハーフマラソン大会
- ・ 郡山シティーマラソン大会
- ・ 北九州チャンピオンズカップ国際車椅子バスケットボール大会
- ・ 国際親善女子車椅子バスケットボール大阪大会

(3) 調査内容

主な調査項目は、以下のとおりである。

- ・ 大会の開催背景、目的、運営体制など
- ・ 障害のある人となない人が一緒に参加するうえでの工夫、取組

(4) 調査期間

2017 年 8 月～2017 年 12 月

【調査 2】事例調査（文献調査）

（1）調査方法

イギリス、カナダ、オーストラリアを中心に、障害がある人となない人が一緒に行えるスポーツ大会の事例について、文献やホームページから情報収集を行った。

（2）調査内容

主な調査項目は、以下のとおりである。

- ・ 大会の開催背景、目的
- ・ 大会参加者数
- ・ 障害のある人となない人の参加方法

（3）調査期間

2017 年 10 月～2017 年 11 月

2. 調査結果(ヒアリング調査)

2017年2月に策定された「ユニバーサルデザイン2020行動計画」では、「障害のある人となない人がともに参加できるスポーツ大会の開催や、障害のある人のスポーツ大会と障害のない人のスポーツ大会の融合を推進する等により、スポーツを通じて心のバリアフリーの普及を図ること」としている。一部の競技においては、障害のある人となない人が一緒に参加できる大会が全国各地で普及してきており、開催の背景、目的、運営方法、障害のある人の参加形態など、大会の開催方法は多様である。「障害のある人となない人がともに参加できるスポーツ大会」「障害のある人のスポーツ大会と障害のない人のスポーツ大会の融合」のベストプラクティスを提示することは容易ではないが、国内のスポーツ大会をみたときに、障害のある人となない人が一緒に参加している形態は、以下、3つに大別できるだろう。

1) 一般のスポーツ大会に特別な配慮なしに障害のある人が参加

一般のスポーツ大会に障害のある人への特別な配慮をせずに、障害のある個人またはチームが参加しているケース。障害のある人だけのチームの場合もあれば、障害のある人となない人が合同でチームを組んで参加している場合もある。外見では障害があると判別しにくい聴覚障害者や障害の程度の軽い障害者などは、大会運営側も障害があることを把握してない状況で大会に参加している事例も存在する。

2) 一般のスポーツ大会に障害者部門を設置

一般のスポーツ大会に障害者部門(車いすの部、視覚障害者の部など)を設置して、障害のある個人またはチームが参加しているケース。市民マラソン大会やロードレースなど、障害のある人となない人が一緒に参加する大会としては、国内では多く見られる形態である。

3) 障害者のスポーツ大会に障害のない人が参加

障害者のスポーツ大会に障害のない個人またはチームが参加しているケース。参加チームは、障害のない人だけのチームもあれば、合同でチームを組んで参加している場合もある。障害のない人だけのチームでは、当事者関係者で構成する場合や、障害者スポーツだけに存在している競技種目(車いすバスケットボール、シッティングバレーボールなど)に興味のある個人が参加している事例もある。

障害種、障害の程度などによっては、一緒にスポーツを行うことが難しい場合も存在する。重度障害や重複障害がある人と障害のない人が、どの競技種目でも一緒に行うというのは現実的ではないが、競技レベルに応じたクラス分けや参加者のカテゴリー属性に応じた配慮などにより、一緒にスポーツをすることができる競技種目もあるだろう。障害のある人、特にスポーツに関心のない障害者が気軽にスポーツに取り組めるようなきっかけとしての大会、障害の有無にかかわらず、障害のある人が当たり前に参加できる大会の観点から、今後増えることが期待されるモデルとなりうる事例を紹介する(図表2-1)。

図表 2-1 事例調査で対象とした大会

障害のある人もない人も一緒に楽しむスポーツ大会	
大会名	特徴
東京CUP卓球大会	・ 障害の有無を問わずに競技力（一部障害種別）に応じて、A～Eの5グループに区分し、団体戦と個人戦を実施 ・ 団体戦には、障害の有無と障害の種類の枠を越えて編成されたチームが出場
全国ユニファイドサッカー大会	・ ほぼ同数の知的障害者と健常者で構成されたチームが継続的に活動して試合に参加 ・ 障害の有無に関わらず、チームメイトの対等な関係性を重視し、選手はコーチを兼務しない
全日本フロアホッケー競技大会	・ 競技レベルが同程度のチーム同士が競い合うためのディビジョニングを採用 ・ スポンサー企業やミニバスケットボールチームが実行委員やボランティアとして大会運営をサポート
ひっぱりリーグ神戸	・ 障害種や障害の程度に関わらず参加できるよう、競技力に応じたリーグ制（8部）を採用 ・ 療育手帳保有者と障害のない職員やボランティアと一緒にチームを編成
全国車いすマラソン大会	・ 障害者手帳のない選手が生活用車・競技用車で参加できるオープン部門を設置 ・ 1,000人を超える競技役員と市民ボランティアが大会を支え、約30年の歴史を誇る
全国車椅子バスケットボール大学選手権大会	・ 主に障害のない大学生を対象に車椅子バスケットボールを普及することを目的に活動 ・ 大会を通じて学生チームと地域の車椅子バスケットボール社会人チームの交流を促進

一般のスポーツ大会に障害者部門を設置して理解啓発を図る	
大会名	特徴
郡山シティーマラソン大会	・ 全国身体障がい者スポーツ大会をきっかけに、生活用車と競技用車の2つの車イス部門を設置 ・ 一般部門に視覚障害者、聴覚障害者、知的障害者が参加
会津若松市鶴ヶ城ハーフマラソン大会	・ 2015年より車イス部門を設置し、市内外から生活用車と電動車椅子の選手が参加 ・ 車椅子の選手の安全を保ちながら、一般ランナーと触れ合えるコースを設定

国際大会をきっかけに地域の子どもたちとの交流を続ける	
大会名	特徴
北九州チャンピオンズカップ国際車椅子バスケットボール大会	・ 市内の小学校を対象にした北九州市小学校車椅子バスケットボール大会を同時開催 ・ 来日する海外のトップアスリートと市内の小・中学生が直接触れ合う交流会を実施
国際親善女子車椅子バスケットボール大阪大会	・ 平日夜間にも試合を組むなど工夫を凝らし、大会期間中の観客動員数は約1万人 ・ 市内8行政区の小・中学校で地域親善交流会を開催し、障害者に対する理解啓発を促進

●障害者のある人もない人も一緒に楽しむスポーツ大会

東京 CUP 卓球大会

【特徴】

- ・ 障害の有無を問わずに競技力(一部障害種別)に応じて、A～E の 5 グループに区分し、団体戦と個人戦を実施
- ・ 団体戦には、障害の有無と障害の種類の枠を越えて編成されたチームが出場

1. 開催の背景

障害のある人と障害のない人の交流の場が必要だと感じた東京都障害者スポーツセンターの担当者が大会を企画して、すでに 27 年間継続開催されている。開催当初は、ただでさえ少ない障害者のスポーツ機会を減らす可能性があるのと、障害のない人との交流大会に懐疑的な声も上がったが、当時の明治大学卓球部の監督をはじめとして日本を代表する卓球界の関係者が大会の意義に理解を示し、審判員としての運営支援や、デモンストレーションによる大会の盛り上げに一役買っていた。障害の有無や程度を問わずに、卓球愛好者が大会を通して選手相互の交流と親睦を図り、障害の理解並びに障害者の社会参加の促進に寄与することを目的に開催している(図表 2-2)。



図表 2-2 東京 CUP 卓球大会の変遷

回数	年度	大会名	参加者数 (のべ人数)	回数	年度	大会名	参加者数 (のべ人数)
第1回	1991	東京身体障害者卓球交流大会 注1)	146	第15回	2005	東京はばたき卓球大会	-
第2回	1992	東京身体障害者卓球交流大会	169	第16回	2006	東京CUP卓球大会	400
第3回	1993	東京身体障害者卓球交流大会	153	第17回	2007	東京CUP卓球大会	312
第4回	1994	東京身体障害者卓球交流大会	176	第18回	2008	東京CUP卓球大会	407
第5回	1995	東京身体障害者卓球交流大会	190	第19回	2009	東京CUP卓球大会	554
第6回	1996	はばたき卓球大会 注2)	137	第20回	2010	東京CUP卓球大会	543
第7回	1997	はばたき卓球大会	201	第21回	2011	東京CUP卓球大会	630
第8回	1998	はばたき卓球大会	174	第22回	2012	東京CUP卓球大会	578
第9回	1999	はばたき卓球大会	334	第23回	2013	2013東京CUP卓球大会 注4)	480
第10回	2000	はばたき卓球大会 注3)	372	第24回	2014	東京CUP卓球大会	462
第11回	2001	はばたき卓球大会	455	第25回	2015	東京CUP卓球大会	482
第12回	2002	はばたき卓球大会	454	第26回	2016	東京CUP卓球大会	495
第13回	2003	はばたき卓球大会	411	第27回	2017	東京CUP卓球大会	334
第14回	2004	はばたき卓球大会	-				

注 1) 東京都障害者総合スポーツセンター開設 6 年目に開催 (1986 年 6 月開設)

注 2) 大会の名称を変更

注 3) 競技力別(一部障害別)に、5 グループの団体戦と個人戦を実施

注 4) 東京都障害者スポーツ協会設立 10 周年記念事業として開催

2. 大会の概要

(1) 競技区分と参加者数

競技区分は、競技力(一部障害種別)に応じてA～Eグループの5つに分類され、初日に個人戦、2日目に団体戦を実施する(サウンドテーブルテニスは実施しない)。Eグループは、車椅子を使用する選手が出場する。

競技区分は主催者により変更する場合もあるが、基本条件は以下の通りである。

- ① 過去2回以上の出場経験がある選手は、Cグループ以上に参加(知的障害はこれに限らない)
- ② 前回大会の優勝・準優勝者は、前回よりも上位のグループで参加
- ③ 障害のない中学生以上60歳未満の選手はBグループ以上、小学生以下および60歳以上の選手はCグループ以上に参加
- ④ 団体戦では、競技力の異なる者でチームを構成する場合は、競技力上位の者の競技区分で参加

2016年度は、団体戦に96チーム230人、個人戦に265人が参加した(図表2-3、2-4)。



図表 2-3 団体戦の出場チーム・出場選手数の変遷

団体戦										
グループ	2013年3月		2013年12月		2014年		2015年		2016年	
	チーム	人数	チーム	人数	チーム	人数	チーム	人数	チーム	人数
A(上級者)	13	33	12	28	7	15	10	25	14	32
B(中級者)	29	71	17	36	27	58	25	59	27	64
C(初級者)	39	87	38	88	38	85	48	109	34	80
D(初心者)	25	56	14	35	18	46	8	19	14	36
E(車椅子使用者)	9	23	10	24	8	17	8	21	7	18
合計	115	270	91	211	98	221	99	233	96	230

図表 2-4 個人戦の出場選手数の変遷

個人戦					
グループ	2013年 3月	2013年 12月	2014年	2015年	2016年
A(上級者)	35	23	22	18	17
B(中級者)	64	44	54	47	51
C(初級者)	95	109	78	90	85
D(初心者)	89	72	60	70	96
E(車椅子使用者)	23	20	27	24	16
合計	306	268	241	249	265

(2) チームの構成

1) 団体戦への出場

団体戦は 1 チーム 2～3 人構成で、「①障害者チーム」「②健常者チーム」「③障害者と健常者の混合チーム」の 3 パターンに大別できる。立位の肢体不自由者と精神障害者、聴覚障害者と精神障害者など、異なる障害種でチームを編成しているケースも多く、チームの形態は多様である。参加料は 1 チーム 2,000 円である。

2) 個人戦への出場

2016 年度大会は、知的障害者の参加が最も多く 101 人で、重複障害の選手が 3 人いた。参加料は 1 人 1,000 円である(図表 2-5)。

図表 2-5 個人戦出場選手の障害区分 (2016 年度大会)

個人戦	グループ					合計
	A	B	C	D	E	
立位	1	12	25	13	0	51
車椅子	0	0	2	0	16	18
聴覚障害	6	14	23	5	0	48
内部障害	0	0	1	0	0	1
知的障害	4	5	23	69	0	101
精神障害	0	2	3	8	0	13
視覚障害	0	1	0	0	0	1
障害なし	5	17	7	0	0	29
※重複障害	1 (聴覚と精神)	0	1 (立位と知的)	1 (知的と精神)	0	3
合計	17	51	85	96	16	265

(3) 運営体制

現在は、東京都障害者スポーツ協会が主催し、障がい者スポーツ指導員や三菱商事株式会社や NEC グループの社員や、明治大学の社会福祉関係サークルの学生らがボランティアとして大会運営をサポートしている。

参加資格は「競技規則を理解している健康上競技可能な者」で、障害の有無や程度を問わずに参加できることが本大会の特徴の一つとしてあげられ、「ダブルス競技では、A グループを除きセンターラインの延長線を踏み越えずにプレイすれば、1人が続けて打球することが可能」「車椅子プレーヤーと立位プレーヤーのシングルスにおけるサービスについては、レシーブ側のルールに合わせる」「審判は原則として、団体戦予選リーグはリーグ内での相互審判」などの大会申し合わせ事項を設けることで、様々な障害を有する出場選手が公平にプレーできるよう配慮して開催している。



スペシャルオリンピックス日本の取り組み

スペシャルオリンピックス(Special Olympics、国際本部:アメリカ合衆国、以下 SO)は、知的障害のある人たちの成長にスポーツが大きなプラスになると考えており、性別、年齢、スポーツのレベルを問わず、共に成長し、共に楽しむ、そしてその経験を分かち合うことが重要と考えている。本報告書では、スペシャルオリンピックス日本(以下、SON)の数ある活動のなかで特徴的な2事例(「全国ユニファイドサッカー大会」「全日本フロアホッケー競技大会」)を紹介する。

全国ユニファイドサッカー大会

【特徴】

- ・ ほぼ同数の知的障害者と健常者で構成されたチームが継続的に活動して試合に参加
- ・ 障害の有無に関わらず、チームメイトの対等な関係性を重視し、選手はコーチを兼務しない

1. 大会開催の背景：スペシャルオリンピックスの「ユニファイドスポーツ」

ユニファイドスポーツは、ほぼ同数の知的障害者と障害のない人でチームを作り、継続的に練習し、競技大会に出場することを通じて、知的障害者の成長と障害理解の促進を図る取り組みである。スペシャルオリンピックスが普及を進めているプログラムで、世界各国で120万人以上が参加している。イギリスやカナダでは、学校の児童生徒を対象としたユニファイドスポーツを積極的に展開している。チームスポーツとしては、バスケットボール、サッカー(5人制、7人制、11人制)、バレーボール、フロアホッケーなどの競技がある。

ユニファイドスポーツは、障害の有無を問わず、同程度の年齢や同程度の競技レベルのメンバーでチームを構成してプレーすることを狙いとしている。しかし、各地域のSOの活動現場において、障害のあるプレーヤー(SOでは「アスリート」という)と障害のないプレーヤー(同「パートナー」)の年代や競技レベルをそろえるのは簡単ではない。このため、SOでは、競技能力の高いパートナーが、アスリートの指導的な役割を担うことを許容する「ユニファイドスポーツ・プレーヤーデベロップメント」という、前段階のモデルを示している。

SONでは、2013年からユニファイドスポーツの普及に力を入れている。2015年にはアメリカ・ロサンゼルスで開催された世界大会にバスケットボールとボウリング・ダブルスのチームを派遣したほか、同年の「第2回スペシャルオリンピックス日本 全国バスケットボール大会」の中で、ユニファイドスポーツの4チームによる競技会を初めて開催した。さらに、ユニファイドスポーツによる単独の全国大会として、2016年12月に「2016年第1回全国ユニファイドサッカー大会」を開催した。2017年12月にも、引き続き第2回大会を開催している。



2. 大会の概要

(1) 概要

図表 2-6 第2回全国ユニファイドサッカー大会概要

大会名	スペシャルオリンピックス日本2017年第2回全国ユニファイドサッカー大会
開催期間	2017年12月9日～10日
会場	J-GREEN堺(堺市立サッカー・ナショナルトレーニングセンター)
競技種目	ユニファイドスポーツ® 11人制サッカー／7人制サッカー
主催	公益財団法人スペシャルオリンピックス日本
参加チーム数	国内12地区の19チームと韓国チームの計20チーム 12地区: 青森、福島、長野、新潟、富山、福井、愛知、三重、大阪、和歌山、京都、熊本 11人制5チーム、7人制15チーム
参加者数	アスリートとパートナー237人、コーチ65人の計302人
ボランティア数	のべ384人(競技役員26人を含む)

(2) チーム構成と大会参加資格

1) チーム構成

- ・ 11人制:1チーム13～16人。アスリート7人とパートナー6人を最低登録人数とする。
- ・ 7人制:1チーム9～12人。アスリート5人とパートナー4人を最低登録人数とする。

11人制には4人のコーチ、7人制には3人のコーチがそれぞれ登録されるが、コーチと選手の兼任は認められていない。「ユニファイドスポーツ チームメイトガイドライン」には、「チーム戦略決定と、一人一人が有意義な参加をできるように指導するのはコーチの役目であり、パートナーの役目ではない。すべてのプレーヤーは、チームメイトとしてお互いが対等であるということを尊重しなければならない。」と記されている。障害のない選手兼指導者が障害のある選手を指導する、という関係性をチーム内に作らないことが、このユニファイドスポーツのプログラムの特徴のひとつである。



2) 大会参加資格

- ①SOの日本地区組織にアスリートまたはパートナーとして登録し、大会当日に16歳以上であること。
- ②大会当日までにSOの日本地区組織が提供するユニファイドスポーツのトレーニングプログラムに8週間以上にわたり8回以上参加した経験があること。
- ③家族を離れ(コーチとともに)、居住地からの往復旅行と1泊2日を自立した生活ができること。

大会参加資格は、ユニファイドスポーツのプログラムに継続して参加したアスリートとパートナーに与えられる。日頃別々に活動している選手たちが、試合のためだけに急造チームを編成して参加することはできない。

(3) 競技の実施状況

1) 競技方法

競技は、初日の前半の予選と、その後二日目にかけて行われる決勝の二部構成である。

①予選

- ・ 11 人制 15 分、7 人制 10 分(いずれもハーフタイムなし)の試合を各チーム 2 試合以上

参加チームは、大会エントリー時に、SO が定めた「サッカーチーム技能評価テスト」に基づいて、ドリブル、パス、シュートなど、すべての登録選手のスキルを提出する。予選は、各チームが提出した選手の技能評価を参考に、競技レベルが近いチーム同士が対戦するよう考慮されたテストマッチである。すべての選手に参加の機会を確保するため、予選では、登録したチームメンバー全員の出場を義務づけている。SO の競技大会では、競技レベルが同程度のチームの試合をできる限り多く創出することを目的に、ディビジョニング(グループ分け)が行われる。15 チームが参加した 7 人制では、技能評価テストに基づいて 4 つのディビジョンで予選を行う。

②決勝

- ・ 11 人制は 25 分ハーフ(ハーフタイム 5 分)、7 人制は 20 分ハーフ(ハーフタイム 5 分)

予選の結果を踏まえて、各チームの実力をより正確に反映したディビジョンに再編成して決勝を行った。各ディビジョンでは、3~4 チーム総当たりのリーグ戦を行い、ディビジョンごとの順位を決定した。また、5 チームが参加した 11 人制では、決勝はトーナメント戦で順位を決定した。

2) 全選手の表彰

SO では、アスリートの日々の継続的なトレーニングから成果発表の場である試合までの過程を重視しており、競技成績を問わず、大会に参加したすべての選手を表彰している。これはユニファイドスポーツでも同様で、大会に参加したすべてのアスリートとパートナーが表彰される。



3) 参加選手の状況

同程度の年齢と競技能力の人が集まってチームを作るのが本来のユニファイドスポーツである。多くの試合の中で、レベルの高いパートナーがゲームメイクしながら、アスリートを上手く活かすよう工夫していた。また、レベルの高いアスリートが、対戦チームのパートナーを抜き去ったり、ボールを奪ったりするシーンがみられた。

全日本フロアホッケー競技大会

【特徴】

- ・ 競技レベルが同程度のチーム同士が競い合うためのディビジョニングを採用
- ・ スポンサー企業やミニバスケットボールチームが実行委員やボランティアとして大会運営をサポート

1. 日本フロアホッケー連盟の設立経緯

フロアホッケーは、アイスリンクのない地域でもできるようにスペシャルオリンピックスが独自に考案してできた冬季競技である。1 チームは 11 人～16 人で構成され、ゴールキーパーを含めた 6 人のプレイヤーが、直径 20cm の穴の空いた「パック」を「スティック」で操り、相手側のゴールに入れる。フロアホッケーは木製のフローリングの上で行うため、学校の体育館や市民体育館などで子どもから高齢者まで幅広い年齢層の人が楽しめる。

2005 年に長野で開催されたスペシャルオリンピックス冬季世界大会では、49 の国と地域から 800 人を超えるアスリートが同競技に参加した。同年、知的障害者のスポーツとして限定するのではなく、年齢や性別、障害の有無に関わらず、体力や競技レベルに応じて楽しめるユニバーサルスポーツであるフロアホッケーの普及を図ることを目的に、日本フロアホッケー連盟が設立された。その後、山形支部(2008 年)と長野支部(2010 年)に引き続き、熊本支部(2012 年)、大分支部(2016 年)、東京支部(2017 年)の地区組織が設立され、全国各地で積極的に普及活動を行っている。

2. エフピコ杯全日本フロアホッケー競技大会の概要

(1) 開催の目的と変遷

2005 年スペシャルオリンピックス冬季世界大会(長野大会)のレガシーとして、フロアホッケーの普及啓発と競技力の向上を目的に、2006 年より開催されている。第 1 回大会(2006 年)から第 5 回大会(2010 年)まで長野県長野市で開催され、その後第 6 回～第 8 回大会は山形県山形市、第 9 回大会(2014 年)以降は東京都の荒川区(2014 年)・葛飾区(2015 年～)を会場に開催され、第 8 回大会(2013 年)より株式会社エフピコがメインスポンサーとして大会を支援している。葛飾区は、2017 年大会までは後援・協力団体として会場提供等の支援をしていたが、2018 年大会以降は共催団体となり、大会の運営全体に関わるようになってきた(図表 2-7)。



図表 2-7 全日本フロアホッケー競技会場の変遷

大会	年	会場	備考
第1回	2006	長野市立通明小学校／長野俊英高等学校	
第2回	2007	長野市総合スポーツアリーナ「ホワイトリング」	
第3回	2008	長野市総合スポーツアリーナ「ホワイトリング」	・スペシャルオリンピックス冬季全国大会(山形)開催 ・日本フロアホッケー連盟山形支部の設立
第4回	2009	長野市総合スポーツアリーナ「ホワイトリング」	
第5回	2010	長野市総合スポーツアリーナ「ホワイトリング」	・日本フロアホッケー連盟長野支部の設立
第6回	2011	山形市総合スポーツセンター	
第7回	2012	山形市総合スポーツセンター	
第8回	2013	山形市総合スポーツセンター	
第9回	2014	荒川総合スポーツセンター	
第10回	2015	葛飾区総合スポーツセンター	
第11回	2016	葛飾区総合スポーツセンター	
第12回	2017	葛飾区総合スポーツセンター	・日本フロアホッケー連盟東京支部の設立

注) 2004 年にスペシャルオリンピックス冬季全国大会(長野)、2005 年にスペシャルオリンピックス冬季世界大会(長野)を開催

(2) 競技ルール

1) 参加チーム

参加資格は「日本フロアホッケー連盟に登録する選手・チームで、過去に日本フロアホッケー連盟が規定する ClassB 以上の大会の参加経験があること」としており、選手の障害の有無は問わない。2016 年大会は 24 チーム、2017 年大会は 27 チームが参加した。2017 年大会の 27 チームのうち、障害のない選手のみで編成されたチームは 3 チームで、24 チームは障害のある選手とない選手の混成チームだった。参加チームは、スペシャルオリンピックス地区支部組織(福島、東京、京都など)、大学生、特別支援学校の生徒や卒業生、その保護者、ミニバスケットボールクラブ(葛飾区を拠点に活動するクラブ「きさらぎジュニア」)、エフピコグループ従業員(後述)などである。



2) ディビジョニング

大会では、チームのスキル(技術・技能)が同程度のチーム同士が競い合うための大会オリジナルルール「ディビジョニング」が行われる。出場チームは過去に参加した同大会の成績、ブロック大会の成績や自己申告に基づき仮ディビジョニングを行い、大会当日は競技前にディビジョニングゲームの時間(1 チーム約 6 分)を設け、日本フロアホッケー連盟に登録するレフェリーが審査を行いディビジョニングを確定している。2017 年大会は、A～H の 9 ディビジョン(1 ディビジョンに 3 チーム)で大会が実施された。

(3) 運営体制

1) 実行委員会

大会実行委員会は、日本フロアホッケー連盟、長野県フロアホッケー連盟、エフピコグループ(スポンサー)、ミニバスケットボールチームの「きさらぎジュニア」を中心に約 35 人で構成され、連盟は競技部や体験・交流・研修会部、エフピコグループは式典部や会場部、きさらぎジュニアはボランティア部や DAL(デリゲーション・アシスタント・リエゾン:出場選手のサポート)部など、連盟、スポンサー企業、スポーツクラブが連携してそれぞれが専門性をいかして円滑な大会運営を行っている。

2) メインスポンサー「株式会社エフピコ」

1986 年設立の株式会社エフピコ(当時の株式会社ダックス)は、食品容器・トレーの製造と販売を専門とする会社で、障害者雇用への取り組みは、本社設立と同年に知的障害児の親の会「あひるの会」との連携で設立されたエフピコダックス株式会社千葉工場(特例子会社ダックスから名称を変更)から始まる。2017 年 3 月時点で、障害のある従業員は 374 人で、障害者雇用率は約 14%である。2010 年以降、障害の有無に関係なく社員同士のコミュニケーションの活性化と相互理解の促進を目的に、フロアホッケーに取り組んでいる。2017 年現在、全国 10 拠点(山形、茨城、東京、八王子、関西、中部、福山、広島、四国、佐賀)に 18 チームがあり、エフピコグループの社員約 650 人(障害のある従業員約 200 人、障害のない従業員約 450 人)が活動している。障害のある従業員の 53.5%、障害のない従業員の 19.6%がフロアホッケーに関わっており、大会のメインスポンサーであることによる社員への貢献度は、非常に高いと言える。



ひっぱリーグ神戸

【特徴】

- ・ 障害種や障害の程度に関わらず参加できるよう、競技力に応じたリーグ制(8部)を採用
- ・ 療育手帳保有者と障害のない職員やボランティアと一緒にチームを編成

1. 大会開催の背景

知的障害者支援施設の利用者と職員を中心としたチーム対抗の綱引き大会「ひっぱリーグ神戸」は、グリーンアリーナ神戸(神戸市須磨区)を会場に、2月に開催される(2017年大会は2月5日)。1980年代、市内の知的障害者が参加する団体競技としてサッカーなどのボール競技の人气が高かったが、運動が苦手・肥満傾向の知的障害者には活躍の機会が限られていた。そこで、障害当事者全員が参加できるイベントとして、知的障害者支援施設の職員が中心となって、当時近畿地区でテレビ放映されるほど人气が高かった綱引きの大会を企画することとなった。綱引きは運動会でも実施するため障害者支援施設の多くが綱を保有しており、廊下で練習を行えることから、体育施設等を保有していない施設でも採用へのハードルが低かった。

1990年を準備年として、知的障害者支援施設の職員のみで編成されたチームで一般の綱引き大会へ出場するなどして、大会運営を視察・経験したうえで、知的障害者が楽しめる大会の運営方法を検討し、1991年に第1回大会を開催した。

2. 大会の概要

(1) 参加方法

参加チームは、障害者中心に編成される「ハンディキャップチーム」と、健常者のみで編成される「一般チーム」の2つに分けられる。1991年第1回大会から一般チームも参加している。参加チーム数(ハンディキャップと一般)は、第1回大会の18チームに始まり、2017年大会へは合計62チームが参加した(図表2-8)。大会に参加するチームは、市内の知的障害者施設の入所者・通所者と職員が大半である。会場をA～Cの3レーンに分けし、総当たり戦で3試合が同時に実施される。



図表 2-8 出場チーム数の変遷（2005 年～2017 年）

開催年	出場チーム数		
	障害者 (ハンディキャップ)	健常者 (一般)	合計
2005	65	5	70
2006	64	6	70
2007	58	4	62
2008	57	11	68
2009	62	4	66
2010	61	7	68
2011	64	4	68
2012	57	4	61
2013	60	4	64
2014	54	4	58
2015	54	9	63
2016	60	4	64
2017	58	4	62

(2) 競技力や障害の程度に応じたリーグ制

知的障害者支援施設に入・通所する障害者の障害種や障害の程度は施設によって多様であり、チームによってチームの力に差が生じてしまう。そこで、全ての参加者が勝つ機会を得られるようにと、1992 年以降、競技力に応じたリーグ制を採用した。1992 年には 3 部、2017 年度現在は 8 部制となっており、前年の成績順にチームを 1 部からリーグに振り分けることで、毎年同レベルのチームとの対戦が可能となる。

2017 年現在、「ビッグテン(10 チームに出場権がある)」と呼ばれる 1 部リーグに出場資格のあるチームは 12 チームだが、大会当日は 10 チームのみ 1 部リーグへ出場可能である(図表 2-9)。残りの 2 チームは、1 部リーグに不参加のチームが出た際、補欠チームとして 2 部リーグから昇格する。

1 部リーグへは、療育手帳保有者で構成されるハンディキャップチームは 8 人編成、一般チームは 6 人編成で出場できる。2～8 部リーグのハンディキャップチームは、療育手帳保有者 5 人と、最後尾から指示出しをする指導者(施設職員)1 人の 6 人で編成する。一般チームは、女性選手の数によって 4～6 人編成である。

図表 2-9 1 部リーグ出場チームと所属先（2017 年大会）

No.	チーム名	所属	施設サービス	2017年大会 順位
1	クレバークマン	上野丘更生寮	短期入所、施設入所支援、 就労継続支援(A型、B型)、 就労移行支援(一般型)等	2
2	フェニックス	上野丘更生寮		1
3	ゼロ	上野丘更生寮		7
4	ワイルドキャッツ	上野丘更生寮		9
5	いっばい	上野丘学園	短期入所、生活介護、施設入所支援等	10
6	みちるべ神戸A	みちるべ神戸	就労継続支援(B型)、就労移行支援(一般型)等	4
7	エクスペンダブル	いくせい	就労継続支援(A型)、グループホーム等	8
8	dream works	WSフレニード	就労継続支援(B型)、就労移行支援(一般型)等	6
9	WKB48	サッカークラブ	共に歩む会サッカー部(サッカークラブわかば)	3
10	蛸苦籍軍	一般	障害者支援施設の職員	5

(3) 健常者の参加

本大会の特徴として、1 部リーグでは障害者のみで編成される「ハンディキャップチーム」と、健常者のみで編成される「一般チーム」が対戦し、2～8 部では、療育手帳保有者と最後尾の健常者でハンディキャップチームを編成し、障害の有無に関わらず、選手全員がチーム一丸となって競技を楽しんでいることがあげられる。障害のない選手は、一般チームとして 8 部全てのリーグに出場できる。1 部リーグに出場資格のある 12 チームの内、一般チームは知的障害者施設の若手職員で構成される 1 チームのみである。そのほか、保護者、高校生ボランティア、障害者支援施設のボランティア等がチームを編成して各リーグに出場している。

1 部リーグでは、チームの選手数に特別ルールを設けて実力差の均衡を図ることで、フェニックス(上野丘更生寮)、クレバーワークマン(上野丘更生寮)、みちしるべ神戸 A(みちしるべ神戸)などのハンディキャップチームが一般チーム(蛸苦籍軍)よりも上位に入賞することができる。



(4) 運営体制

共に歩む会が主催し、神戸市の教育委員会、知的障害施設連盟、スポーツ教育協会、手をつなぐ育成会など 8 組織・団体が後援に名を連ねる(図表 2-10)。共に歩む会は、知的障害について学ぶ勉強会の開催を目的に 1988 年に神戸市で設立されたボランティアグループで、知的障害者のためのサッカー、バスケットボール、マラソン教室を開催している。

神戸市立神戸西高等学校では、「福祉・ボランティア精神を育み、相互扶助的な人間関係を築くことができる人材を育成する」の教育目標の下、生徒は様々なボランティア活動に取組み、1994 年頃から運営補助として本大会をサポートしてきた。2009 年、神戸市立神戸西高等学校と神戸市立須磨高等学校を再編・統合する形で、神戸市立須磨翔風高等学校が開校した。統合後も、当日の運営や出場をキャンセルしたチームの代わりに高校生チームとして出場するなど、学校の年間行事として須磨翔風高等学校の生徒が本大会に関わっている。2017 年度は、ラグビーやバレーボール部などの運動部のほか、放送部(場内アナウンスを担当)や写真部(記念撮影を担当)の生徒約 40 人が大会運営ボランティアとして参加した。



図表 2-10 主催・後援・協力団体

主催	共に歩む会	
後援	神戸市	神戸市知的障害施設連盟
	神戸市教育委員会	神戸市綱引き連盟
	神戸市社会福祉協議会	神戸市手をつなぐ育成会
	神戸市スポーツ教育協会	神戸新聞厚生事業団
大会運営協力	神戸市立須磨翔風高校	神戸市立六甲アイランド高等学校

3. その他

2017 年大会に、利用者と職員あわせて 5 チーム(1 部に 4 チーム、2 部に 1 チーム)を派遣した法人に、社会福祉法人上野丘さつき会が運営する就労継続支援 A 型・B 型事業所の「上野丘更生寮」がある。上野丘更生寮は、ゴルフコースの管理や農作業を中心に、自然に親しみながら豊かな心と体力を養うことを目的に就労支援に取り組んでいる。特に利用者の体力向上を重視し、神戸市障がい者スポーツ大会へ参加したり、フットサルチームを編成し、積極的にスポーツ大会やイベントに出場している。



全国車いすマラソン大会

【特徴】

- ・ 障害者手帳のない選手が生活用車・競技用車で参加できるオープン部門を設置
- ・ 1,000 人を超える競技役員と市民ボランティアが大会を支え、約 30 年の歴史を誇る

1. 障害者手帳が無くても参加できる「オープン部門」設置の背景

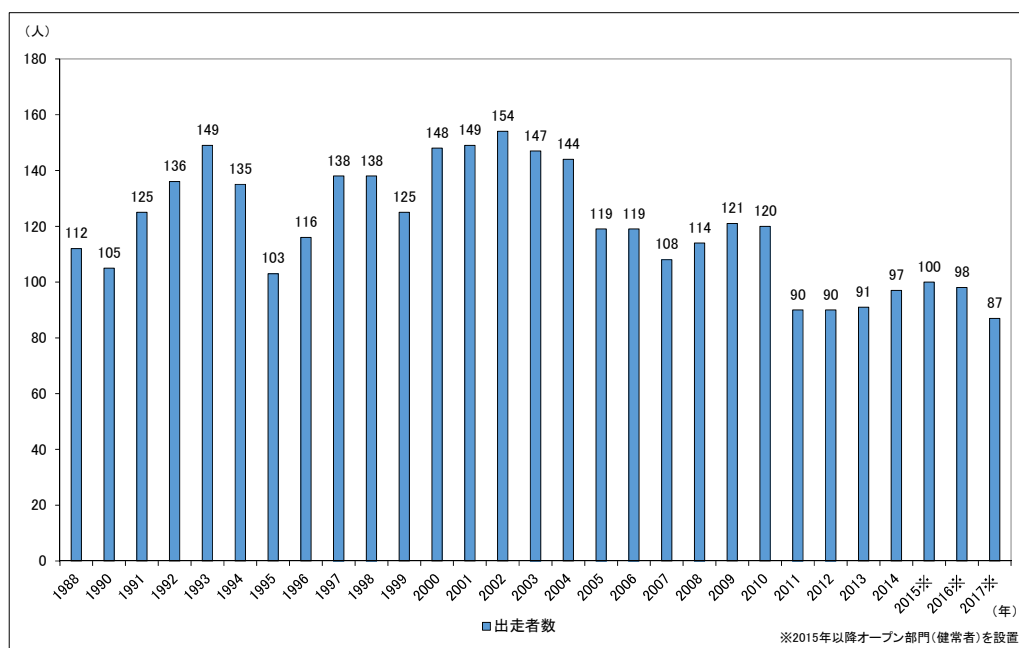
全国車いすマラソン大会は、毎年 9 月下旬(2017 年大会は 9 月 24 日)に兵庫県篠山市の篠山城跡マラソンコース(日本陸上競技連盟公認コース)で開催され、フルマラソンとハーフマラソンの 2 部門を設置している。本大会は、身体障害者の体力の維持増進と社会参加への意欲の高揚を図ることを目的に開催しており、生活用車椅子でハーフマラソンを走れる国内唯一の大会である。1987 年に近畿大会として開催され、1988 年に現在の「全国車いすマラソン大会」に名称を変更し、2017 年度大会で第 29 回目を迎えた。1989 年度は、9 月 15 日～9 月 20 日に神戸フェスティック大会※が開催されたため、本大会は実施されていない。



大会の参加者数は、1987 年大会の 112 人に始まり、一時期、阪神・淡路大震災(1995 年)の影響で減少したものの、2002 年まで徐々に増えていった(図表 2-11)。その後は、減少の一途をたどり、2011 年には 100 人を割った。全国に増えつつあった車椅子マラソン大会との差別化を図るため、障害の有無に関わらず誰もが楽しめる大会を目指し、2015 年大会から、手帳が無くても出場できる「オープン部門(ハーフマラソン)」を設置した。

※アジア、および太平洋地域の障害者スポーツの競技大会で、2010 年からはアジアパラ競技大会として開催

図表 2-11 大会出走者数の変遷 (1988 年～2017 年)



2. 大会の概要

(1) 参加者の属性

2017 年度は、フルマラソン 12 人(男子のみ)、ハーフマラソン 82 人(男子 79 人、女子 3 人)の 94 人がエントリーし、87 人が出走(日中の気温や体調などを考慮し、7 人が辞退)、69 人が完走した。全国 31 都府県・政令指定都市から選手がエントリーし、選手の最年少は 14 歳、最年長は 75 歳で、50 代～70 代が全体の約半数を占める(図表 2-12)。過去には、後にパラリンピアンとなる花岡伸和氏、畑中和氏、土田和歌子氏などが出場していた。

図表 2-12 参加者の年齢層 (2013 年～2017 年)

(人)

年代	第25回(2013年)			第26回(2014年)			第27回(2015年)				第28回(2016年)				第29回(2017年)			
	フル	ハーフ	計	フル	ハーフ	計	フル	ハーフ	オープン	計	フル	ハーフ	オープン	計	フル	ハーフ	オープン	計
10歳代	0	3	3	0	3	3	0	4	1	5	0	7	1	8	0	6	0	6
20歳代	1	11	12	0	11	11	0	10	4	14	0	8	8	16	0	11	1	12
30歳代	10	22	32	4	20	24	4	14	4	22	5	12	4	21	3	11	3	17
40歳代	6	11	17	6	16	22	4	18	2	24	3	20	2	25	3	17	1	21
50歳代	7	18	25	7	19	26	7	18	0	25	5	12	0	17	4	18	2	24
60歳代	1	16	17	1	15	16	2	14	0	16	2	13	0	15	2	15	0	17
70歳代	0	1	1	0	2	2	0	3	0	3	0	2	0	2	0	4	0	4
80歳代	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
90歳代	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	25	82	107	18	86	104	17	81	11	109	15	74	15	104	12	82	7	101

(2) 「オープン部門」への参加

障害者手帳が無くても参加できるオープン部門の設置は、障害者や車椅子マラソンに対する理解啓発を図り、参加者数が減少傾向にある大会をより多くの人々に PR する目的がある。オープン部門への参加条件は、「車いすスポーツ歴があり、参加種目について無事完走できる力を持つと主催者の認める者」であり、リハビリテーションセンターの理学療法士や障害者支援施設の支援員らが生活用車または競技用車で出場している。2015 年大会は 9 人(男子 9 人)、2016 年大会は 14 人(男子 12 人、女子 2 人)、2017 年大会は 7 人(男子 4 人、女子 3 人)が当日のレースに参加した。



3. 運営体制

主催は兵庫県、篠山市、兵庫県障害者スポーツ協会で、後援には兵庫陸上競技協会、兵庫県社会福祉協議会、ライオンズクラブ、メディア関連団体など 35 組織が名を連ねている。大会事務局である兵庫県障害者スポーツ協会の事務局は神戸市内の兵庫県庁にあることから、篠山市内の関連団体への依頼、広報活動、会場の設営などをより円滑に行うため、現地事務局を篠山市保健福祉部福祉総務課に設置している。

車いすマラソン大会を開催するにあたり、一般のマラソン大会以上に、転倒した選手の救護、体温調節が困難な脊髄損傷者の給水、車高の高い車からは車椅子が見えにくいことなど、安全面での配慮が必要とされる。そのため、フルマラソンとハーフマラソンを実施する本大会でボランティアが担う役割は大きく、ボランティアを多く配置し、兵庫県警察の協力のもと自転車を含めた交通規制を徹底することで、選手の安全を確保している。2017 年大会では、競技役員と中高生を含めた市民ボランティアの合計約 1,000 人が給水所、場内放送、走路の安全係として大会を支援した。

大会の参加者数の減少を危惧し、継続した開催と円滑な大会運営を図るため、フルマラソンとハーフマラソンに拘ることなく、20 km や 30 km ロードなど幅広い競技レベルの選手が参加できる部門を新設することを検討している。また、交通規制やボランティアの確保に係る負担を考慮し、自転車ロードレースの一つで 1 周 1 ～3km 程度のコースを周回して順位を競う「クリテリウム」方式の採用も提案されている。



4. 重度障害者の参加

交通に及ぼす影響を考慮して、フルマラソンの部では 6 つの関門、ハーフマラソンの部では 4 つの関門に制限時間を設けている。生活用車椅子使用者、特に重度重複障害者の中には、全関門を通過して完走するのが難しい選手もいるが、日頃の運動の成果を発表する場として、また、「1 つ目の関門を通過する」などの個々の目標達成に向けて、毎年参加を楽しみにしている選手もいる。兵庫県立総合リハビリテーションセンターの利用者に付き添う形でオープン部門に医療スタッフ(理学療法士など)が参加することもあり、リハビリテーションセンターで提供される運動療法やリハビリテーショントレーニングとの関係は大きい。また、重度障害者がリハビリテーションセンターで形成したコミュニティを退所後も継続する動機づけとしても本大会は大きく貢献している。

全国車椅子バスケットボール大学選手権大会

【特徴】

- ・ 主に障害のない大学生を対象に車椅子バスケットボールを普及することを目的に活動
- ・ 大会を通じて学生チームと地域の車椅子バスケットボール社会人チームの交流を促進

1. 日本車椅子バスケットボール大学連盟の設立背景

2002 年、障害の有無に関わらず、生涯スポーツとしての車椅子バスケットボールを大学生に対して普及・振興することを目的に、日本車椅子バスケットボール大学連盟 (Japan Wheelchair Basketball University Foundation: JWBUF) が設立された。車椅子バスケットボールチームを有する関西学院大学や埼玉県立大学等の学生が中心となって JWBUF を設立し、設立を主導した障害当事者が長年連盟の代表を務めた。設立や運営に関わった学生は、過半数が障害のない学生であった。

連盟の特徴の一つとして、学生が中心となって、主に障害のない学生を対象に車椅子バスケットボールの普及のために大会やイベントを企画・開催していることが挙げられる。JWBUF の主要事業として、全国車椅子バスケットボール大学選手権大会と学生車椅子バスケットボール春季大会の開催、選抜チームの編成、選抜チームの合宿開催(年 2 回)、LESPO CUP 九州オープン車椅子バスケットボール大会と伊丹親善車いすバスケットボール大会への選手派遣がある。当時中心となって活動していた学生達が、社会人となった今も役員として連盟事業の運営を担っている。

2. 全国車椅子バスケットボール大学選手権大会の概要

(1) 目的

各大学の車椅子バスケットボールチームは、車椅子バスケットボールに興味があった障害のない有志で作上げられたチーム、車椅子バスケットボールをしていた障害当事者と一緒にプレーしたいと集まってきたチームなど、設立目的と背景は多様だが、「同年代の選手・チームと対戦したい」という想いを持って活動をしている。本大会は、大学生達のその想いに応えるため、健常者と障害者の枠を越えて、車椅子バスケットボールの大学日本一を競うことを目的に開催している。

(2) 大会の変遷

2002 年 11 月に開催された第 1 回大会は、大阪府、兵庫県、京都府、埼玉県、広島県から合計 8 つの大学が出場した。第 12 回大会までは、大阪市舞洲障害者スポーツセンター(アミティ舞洲)、大阪市中央体育館、泉佐野市民総合体育館、大阪府立門真スポーツセンター(なみはやドーム)など、関西を中心に開催された(図表 2-13)。その後、連盟の設立や大会運営に携わったメンバーの多くが東京で就職したこと、関東圏からの参加校が増加したことなどを受けて、第 13 回大会以降、会場を東京の町田市立総合体育館に移して開催している。



図表 2-13 大会出場校数と会場の変遷

大会	年	出場大学数	会場
第1回	2002	8	大阪市舞洲障害者スポーツセンター(アミティー舞洲)
第2回	2003	9	大阪府中央体育館
第3回	2004	10	兵庫県立総合体育館
第4回	2005	9	大阪府中央体育館
第5回	2006	10	三田市駒ヶ谷体育館
第6回	2007	12	泉佐野市民総合体育館
第7回	2008	12	三重県営サンアリーナ
第8回	2009	12	大阪府立門真スポーツセンター(なみはやドーム)
第9回	2010	12	大阪府立門真スポーツセンター(なみはやドーム)
第10回	2011	8	大阪府立門真スポーツセンター(なみはやドーム)
第11回	2012	8	大阪府立門真スポーツセンター(なみはやドーム)
第12回	2013	7	大阪府立門真スポーツセンター(なみはやドーム)
第13回	2014	7	町田市総合体育館
第14回	2015	7	町田市総合体育館
第15回	2016	8	町田市総合体育館
第16回	2017	6	町田市総合体育館

(3) 参加選手と競技ルール

「身体障害がある人が身内にいる」「中学・高校時代にバスケットボール部に所属していた」など、車椅子バスケットボールチームに所属する学生理由は多様である。また、医療福祉系の学科(看護、理学療法、作業療法、社会福祉)以外にも、教育や工学など他学部の学生も多く参加している。車椅子バスケットボールチームで選手として経験した学生の中には、卒業後、地域の社会人チームでマネージャーや選手として活動を継続したり、自身が所属していた大学チームでコーチとして関わる者も少なくない。また、車椅子バスケットボールのキャンプを通じて競技の普及を図る「NPO 法人 J キャンプ」のスタッフとして働く卒業生もいる。

なお、本大会は日本車椅子バスケットボール連盟の競技規則に準じて開催しているが、障害のない選手が参加チームの過半数を占め、女性選手の参加が多いなどの特徴を考慮して、「男女の区別は行わない」「クラス分け・持ち点は採用しない」など特別ルールを設けている。



(4) 運営体制

2014 年に会場が町田市総合体育館へ変更されてからは、町田市から後援を受け、町田市バスケットボール協会と協力して開催している(2017 年度大会から共催)。2017 年度大会は、パラリンピック出場経験のある神保康広氏や根木慎志氏らが JWBUF 顧問として大会役員を務め、大会実行委員には町田市バスケットボール協会の理事らが名を連ねた。また、各出場校から選出された学生が、実行委員(学生代表として学生チームの連絡調整を担っている。

3. 社会人チームや地域住民との交流

JWBUF は、大会の開催を通じて、学生チームと車椅子バスケットボール社会人チームや地域住民との交流を促している。

(1) 埼玉県立大学「SPREAD」と「埼玉ライオンズ」

過去に数回の優勝を誇る埼玉県立大学の「SPREAD」と社会人チーム「埼玉ライオンズ」は、埼玉県立大学の体育館での合同練習の実施、車椅子操作や修理に関する情報交換、埼玉県立大学の学園祭で埼玉ライオンズの選手とデモゲームや車椅子バスケットボール体験会を開催するなど、日常的な交流が生まれている。埼玉ライオンズの選手にとっても、埼玉県立大学の体育館を使用でき、スキルの習得スピードが早い学生達と一緒に練習を行うことで、練習内容が充実するメリットがあり、学生チームと社会人チームが、障害の枠を越えて互いに刺激しあえる関係を築いている。



(2) 北里大学「VANGS」と「パラ神奈川 SC」

社会人チーム「パラ神奈川 SC」の園田康典選手が、北里大学の「VANGS」の監督を務めている。両チームは日頃から一緒に練習を行っており、また、2016 年 8 月には車椅子バスケットボール女子日本代表の強化合宿にパラ神奈川 SC と VANGS が参加し、3 チームで練習試合が行われた。

(3) 茨城県立医療大学「ROOTs」

同大学の卒業生で、2017 年現在、准教授として教鞭を取る車椅子バスケットボール女子日本代表前ヘッドコーチの橘香織氏が、「ROOTs」の指導を行っている。ROOTs の橘氏と選手達は、つくば市を拠点に活動する NPO 法人アクティブつくばの主要事業「つくばスポーツ探検隊」の一環として開催している車椅子スポーツ体験会で、子供達に車椅子バスケットボールを指導するなど、積極的に地域での車椅子バスケットボールの普及に取り組んでいる。

●地域の市民マラソン大会に障害者部門を設置

福島県では、1995 年の全国身体障害者スポーツ大会の開催に、行政・障がい者スポーツ協会・障害者スポーツ指導者協議会（指導協）の三者が協力して取り組んだことをきっかけに、障害者スポーツの振興は現在も三者が密に連携して行っている。また、指導協は広い県域をカバーするため、6 つの支部（県北、相双、県中、いわき、会津、県南）が設けられている。地域においては、指導協支部と市のスポーツ部局が連携し、市民マラソンで車イス部門を設置する動きが出始めている。本報告書で紹介する「郡山市シティーマラソン（郡山市）」と「会津若松市鶴ヶ城ハーフマラソン大会（会津若松市）」では、高低差のないフラットな市道をコースに設定するなど、車イス部門出場選手の安全を確保しながら一般ランナーと触れ合える機会を創出している。1994 年以降、「郡山市シティーマラソン（郡山市）」では競技用車椅子と生活用車椅子での参加を可能にし、2013 年以降、「会津若松市鶴ヶ城ハーフマラソン大会（会津若松市）」でも県内外から生活用車椅子または電動車椅子での参加がある。

郡山シティーマラソン大会

【特徴】

- ・ **全国身体障がい者スポーツ大会をきっかけに、生活用車と競技用車の 2 つの車イス部門を設置**
- ・ **一般部門に視覚障害者、聴覚障害者、知的障害者が参加**

1. 車イス部門設置の背景

郡山市では、1981 年以降、日本陸上競技連盟に登録する選手を主な対象に「東日本 30 キロロードレース大会（1992 年から東日本郡山ハーフマラソン大会に名称を変更）」等を開催していたが、交通規制が長時間に渡り、交通に及ぼす影響が大きいことから、2002 年をもって大会を中止するに至った。一方で、市内のランニング人口が増加したこと、そして郡山市のランニングクラブ「郡山健康走る会」が既に大会を実施しており、大会運営のノウハウがあったことから、広く市民を対象として、郡山市と郡山市陸上競技協会等の共催で、1994 年 5 月 22 日、郡山市制施行 70 周年記念事業として、「郡山メモリアル市民マラソン大会」を開催することとなった。1995 年の第 2 回大会から大会名を「郡山シティーマラソン」へ変更し、毎年 4 月 29 日（祝日）に開催している。2017 年現在、郡山健康走る会は、郡山シティーマラソンの実行委員会の委員として名を連ねている。

1995 年の全国身体障がい者スポーツ大会（うつくしまふくしま大会）の開催を経て、大会の盛り上がりを消さないよう、郡山シティーマラソンへ身体障害者も参加できるように車イス部門の設置に関する提案があった。コースの安全性について数年に渡って協議を重ね、1999 年の第 6 回大会以降、障害の有無に関わらず市民がスポーツを楽しみ、障害者と大会をサポートするボランティアや家族の触れ合いを大切にすることを理念に、車イス部門を設置することとなった。1999 年以降、県内で開催されていたその他の市民マラソン大会でも、徐々に車イス部門が設置され始めた（ふくしま健康マラソン、会津若松市鶴ヶ城ハーフマラソンなど）。

2. 大会の概要

(1) コース設定

男女別、学年別、年代別に 34 部門があり、2017 年大会には全国から約 7,300 人が参加した。34 部門の中に、車イス生活用車(1.5km)と競技用車(5km)の 2 つの部門を設置している。部門が細分化され、車イス使用者も 1 つの部門として参加者・観戦者に認知されており、障害児・者は健常者と大会の盛り上げを共感することができる。スタートとゴール地点は全部門同じで、開成山陸上競技場をスタートし、高低差がほぼないフラットな市道を走り、郡山市役所前がゴールとなる。

(2) 参加者数の推移

2017 年大会は、生活用車部門に 12 人、競技用車部門に 1 人が出場申込みをしている(図表 2-14)。一般部門には親子で出場できる部門も設置しており、生活車イス部門に出場した選手の保護者と兄弟が親子部門に出場するなど、家族と一緒に大会に参加できるのが特徴である。競技用車の場合、5km では物足りないと感じる選手も多く、1999 年以降、競技用車部門に出場する選手数は年々減少している。そのため、競技用車部門への県内外からの出場選手の確保に向けて、10km や 20km などの長距離部門の設置を検討している。

2017 年大会では、生活用車部門に出場した 12 人の大半が郡山支援学校の児童生徒や卒業生らで、年代は小学生から成人まで様々である。参加児童生徒の多くが、福島県障がい者スポーツ協会が週 1 回開催する陸上導入教室で練習しており、本大会が、練習成果を発表する場となっている。また、陸上導入教室へ参加する以外にも学校の体育館や寄宿舎で個人練習を積み、毎年大会に参加して自己記録の更新を目指す生徒もいる。過去には、ソチパラリンピック金メダリスト(アルペンスキー)の鈴木猛史選手が、生活用車部門で優勝している。また、郡山市職員であり、2008 北京パラリンピックの銀メダリスト(陸上競技)の八巻智美選手も出場している。



図表 2-14 車イス部門の申込者数と距離

年	生活用車		競技用車		年	生活用車		競技用車	
	申込者(人)	距離(km)	申込者(人)	距離(km)		申込者(人)	距離(km)	申込者(人)	距離(km)
1999	17	2	7	5	2009	11	2	8	5
2000	5	2	5	5	2010	8	2	8	5
2001	6	2	5	5	2011	東日本大震災の影響により中止			
2002	7	2	6	5	2012	9	1.5	7	5
2003	6	2	6	5	2013	7	1.6	7	5
2004	5	2	10	5	2014	6	1.6	6	5
2005	7	2	12	5	2015	12	1.6	5	5
2006	6	2	12	5	2016	6	1.6	7	5
2007	6	2	11	5	2017	12	1.5	1	5
2008	9	2	10	5					

3. 運営方法

福島県では、2016 年 4 月、障害者スポーツに関する事業が保健福祉部障がい福祉課から企画調整部文化スポーツ局スポーツ課に移管されたが、郡山市では福島県に先立ち、2015 年 4 月に市内の障害者スポーツ事業が障がい福祉課からスポーツ振興課へ移管されている。

(1) 実行委員会

大会前に第 1 回総会と総務部会を約 1 回、競技部会を約 4 回、交通部会を約 1 回、医務部会を約 2 回開催し、本番を迎える。大会後に開催される第 2 回総会では、大会の振り返りが行れる。

大会当日は、車イスランナー対応のため、実行委員会(福島県障害者スポーツ指導者協議会など)から、約 23 人がサポートとして参加している。障がい者スポーツ指導員は、レース開始前に選手のウォームアップおよびレース時の伴走等の補助を行う。前述の陸上導入教室に参加している選手と保護者は、障がい者スポーツ指導員と顔見知りのため、安心してレースに臨むことができる。



(2) 福島県障がい者スポーツ指導員の配置

スタート時は、ハーフマラソンランナー、生活用車と競技用車、小学生と保護者の親子ペア、その他一般ランナーの順に走り始めるため、生活用車の参加者(特に重度障害児・者)が、1.5km を走りきる前に一般ランナーに追い抜かれる場合がある。選手同士の接触を避けるため、生活用車 1 人に対して 1 人以上の障がい者スポーツ指導員を含むスタッフが付き添い、一般ランナーを誘導しながらレースを行っている。車イス部門への出場者は、一般ランナーに追い越されながらも、盛大な応援に出迎えられて一般道を一般ランナーと走れることが、出場を目標に練習を積むモチベーションとなっている。

また、一般部門に視覚障害者(伴走者付き)、聴覚障害者、知的障害者が参加しており、例年 1 人の手話通訳者を 2015 年以降は 3 人に増員し、総合案内所などに配置し、聴覚障害者ランナーの対応にあたっている。



4. その他

本大会へ郡山支援学校の児童生徒が参加したことをきっかけに、小学校体育連盟が郡山市内小学校陸上競技交歓会に郡山支援学校の児童を招待するなど、大会を通じて日常の交流が生まれている。その取組は 2015 年から始まり、2017 年 9 月 27 日開催の第 57 回交歓会へは、郡山支援学校の 6 年生 8 人が 50m 走に参加し、5 年生 5 人も応援に駆け付けた。

会津若松市鶴ヶ城ハーフマラソン大会

【特徴】

- ・ 2015 年より車イス部門を設置し、市内外から生活用車と電動車椅子の選手が参加
- ・ 車椅子の選手の安全を保ちながら、一般ランナーと触れ合えるコースを設定

1. 車イス部門設置の背景

毎年 10 月に開催される本大会のハーフマラソンの部と 10km コースは、鶴ヶ城の中も一部コースとなっている全国でも珍しい大会で、ハーフマラソンは日本陸上競技連盟公認コースである。年代、性別、学年別に合計 35 部門あり、小学生とその父親または母親の親子ペア部門など、家族で楽しむことができる。以前は、鶴ヶ城周辺は高低差が激しく、舗装されていないコースが多く、車椅子で走ることが困難だったため、当初、主催する会津若松市鶴ヶ城ハーフマラソン大会実行委員会・福島会津陸上競技協会は車イス部門の設置に難色を示していた。しかし福島県障がい者スポーツ指導者協議会 会津支部が総合運動公園内に車椅子で走行可能な 1km コースを確保できたことから、会津若松市鶴ヶ城ハーフマラソン大会実行委員会との協議の結果、福島県障がい者スポーツ協会と福島県障がい者スポーツ指導者協議会 会津支部が中心となって車イス部門参加者の安全確保に努めることを条件に、2013 年の第 25 回大会以降、車イス部門(1km)を設置して開催することとなった。近年、県内で車イス部門を設置するマラソン大会が増加したことも後押しとなった。



2. 大会の概要

(1) コース設定

車イス部門参加者のスタート地点は、一般ランナーとは異なる「あいづ陸上競技場」だが、観客に応援してもらえよう、大会受付を設置するあいづ総合体育館と出店前を周回するコースを設定している。ゴールは全部門共通で会津総合運動公園のため、車椅子部門の選手の後に親子ペアがゴールできるよう、スタート順序や時間を調整し、障害児・者の安全を保ちながら一般ランナーと触れ合える機会を設けている。

(2) 参加者数の変遷

車イス部門への参加者数は、設置当初(2013 年)の 4 人から、2 年目(2014 年)は 3 人へ減ったものの、会津支部の障がい者スポーツ指導員が会津若松周辺の障害者支援施設等に対して周知啓発をした結果、2015 年は参加者が 8 人になった(図表 2-15)。また、2015 年以降、大会の実行委員をはじめ、一般の陸上競技連盟関係者の車イス部門参加者に対する理解が高まり、2017 年大会は、市内からは会津支援学校の児童生徒(1 人)、障害者支援施設の入所者(3 人)、県外からは栃木県宇都宮市(1 人)など、

合計 11 人の参加があった。年代は、小学校高学年から 50 代後半まで様々で、女性 7 人、男性 4 人であった。2013 年以降、電動車椅子での参加も可能にしており、2017 年大会は 2 人の参加があった。

図表 2-15 車イス部門の参加者数の変遷

開催年	参加人数(人)						
	生活用車椅子			電動車椅子			合計
2013	4	男子	女子	0	男子	女子	4
		1	3		0	0	
2014	3	男子	女子	0	男子	女子	3
		1	2		0	0	
2015	6	男子	女子	2	男子	女子	8
		4	2		1	1	
2016	8	男子	女子	2	男子	女子	10
		3	5		1	1	
2017	9	男子	女子	2	男子	女子	11
		3	6		1	1	

3. 運営方法

(1) 実行委員会の設置

本大会は会津若松市鶴ヶ城ハーフマラソン大会実行委員会・福島会津陸上競技協会が主催し、会津若松市教育委員会、会津若松市体育協会、会津若松市スポーツ推進委員会、会津若松市公園緑地協会などが共催し、車イス部門を設置した 2013 年以降、大会実行委員会に福島県障がい者スポーツ指導者協議会の理事が名を連ねている。

(2) 福島県障がい者スポーツ指導員の配置

会津若松市には 42 人の障がい者スポーツ指導員が登録しており、2017 年大会は、サポートとして障がい者スポーツ指導員 21 人が参加した。指導員は、病院勤務の理学療法士、作業療法士、銀行員、会津若松市社会福祉協議会職員、会津若松市ボランティア連絡協議会職員など多種多様である。レース中は、選手 1 人に対して障がい者スポーツ指導員 1 人が付き、さらに先頭に 2 人、最後尾に 2 人の障がい者スポーツ指導員を配置し、誘導ミスによるコース間違いや他のランナーとの接触を防いでいる。



●国際大会をきっかけとした海外の障害者アスリートと小・中学生の交流会

本報告書で紹介する「北九州チャンピオンズカップ国際車椅子バスケットボール大会(福岡県北九州市)」と「国際親善女子車椅子バスケットボール大会(大阪府大阪市)」は、いずれも2003年より開催されており、国際大会の開催を通じた国内の車椅子バスケットボールの競技力向上を図っている。さらには、国際交流を通じた地域住民に対する障害者スポーツの普及・啓発を目的としていることが、もう1つの特徴として挙げられる。近年、障害者スポーツの普及を目的に、地域住民を対象とした障害者アスリートとの交流を図る地域スポーツ交流会が全国で開催されているが、両大会では、小・中学校で海外のアスリートと児童生徒が触れ合える交流会を開催している。海外のアスリートは、大会に先立ち数日前に来日し、交流会に参加する。交流会で触れ合った児童生徒が、大会期間中に学校を挙げて海外チームの応援のために観戦に来るなど、国際競技会としてだけではなく、障害者と障害者スポーツに対する地域住民の深い理解を促すため工夫を凝らしている。

北九州チャンピオンズカップ国際車椅子バスケットボール大会

【特徴】

- ・ 市内の小学校を対象にした北九州市小学校車椅子バスケットボール大会を同時開催
- ・ 来日する海外のトップアスリートと市内の小・中学生が直接触れ合う交流会を実施

1. 大会の概要

障害者スポーツの発展と普及、国内の競技力向上や国際交流、車椅子バスケットボールを通じた地域のバリアフリー化などを目的に、世界各国の代表チームを招いて開催される。また、海外チームとの国際交流を図ることを目的に、全国10ブロック(北海道、東北、関東、東京、甲信越、東海北陸、近畿、中国、四国、九州)から代表チームが参加する「全日本ブロック選抜車椅子バスケットボール選手権大会」と、市内の小学校に通う児童が参加する「北九州市小学生車椅子バスケットボール大会(後述)」を同時開催している(図表2-16)。

図表 2-16 大会スケジュール (2017 年)

日時		Aコート	Bコート
11月8日(水)		小・中学校交流会(各学校にて)	
		チームトレーニング	
11月9日(木)		小学生大会開会式	国際大会交流試合 (海外チームvs全日本ブロック大会出場チーム)
11月10日(金)	午前	日本vs韓国	全日本ブロック 試合
		総合開会式	
		小学生大会決勝	全日本ブロック 試合
	午後	オランダvsカナダ	全日本ブロック 試合
		全日本ブロック 試合	全日本ブロック 試合
		全日本ブロック 試合	
11月11日(土)	午前	全日本ブロック 準決勝	全日本ブロック 準決勝
		オランダvs日本	全日本ブロック 7位決定戦
	午後	韓国vsカナダ	全日本ブロック 5位決定戦
		全日本ブロック 決勝戦	全日本ブロック 3位決定戦
		全日本ブロック 開会式	
11月12日(日)	午前	カナダvs日本	韓国vsオランダ
		障がい者スポーツの紹介	
	午後	3位決定戦	障がい者スポーツの紹介
		決勝戦	
		表彰式・閉会式	

2. 大会開催の背景

1967 年、北九州市内に脊髄損傷者を中心とした車椅子バスケットボールのクラブチーム「足立クラブ」が発足し、徐々に国内・国際大会の開催に向けた土壌が作られてきた。1990 年に福岡県で開催された「第 26 回全国身体障害者スポーツ大会」では、北九州市総合体育館が、車椅子バスケットボールの大会の会場となった。これを契機に、1991 年の西日本選抜車椅子バスケットボール選手権大会、1996 年の全国選抜車椅子バスケットボール選手権大会、1998 年の東アジア選抜車椅子バスケットボール選手権大会などが北九州市を会場に開催されるようになった。2002 年、4 年に一度行われる車椅子バスケットボールの世界選手権大会「第 8 回世界車椅子バスケットボール選手権大会（通称：北九州ゴールドカップ）」が、北九州市で開催された。

10 日間で約 8 万人が観戦に訪れた北九州ゴールドカップを記念して、2003 年以降、北九州市が掲げる「バリアのないまちづくり」を象徴する大会として、「北九州チャンピオンズカップ国際車椅子バスケットボール大会（以下、チャンピオンズカップ）」を開催している。また、2020 年東京オリンピック・パラリンピック大会に向けて、若手選手の育成を見据えた国際大会の開催を通じ、チャンピオンズカップに参加する各国の事前合宿地としての働きかけや、2020 年東京パラリンピックの成功への貢献を目指している。

3. 北九州チャンピオンズカップ

(1) 参加者数

第 14 回目の 2017 年大会は、11 月 10～12 日の 3 日間、開催された。オランダ、カナダ、韓国から選手・スタッフ 49 人が来日し、日本選手団 17 人とあわせて 66 人が参加した。大会期間中の入場者数は、のべ約 1 万 2,000 人で、ボランティア数はのべ約 1,200 人であった。優勝は昨年に続き日本で、2 位韓国、3 位オランダ、4 位カナダの順であった。2017 年大会では、障害者スポーツの普及と理解促進のため、車椅子ツインバスケットボール、ボッチャ、ブラインドサッカー、車椅子ソフトボールなどの種目を体験できる「障害者スポーツフェスタ 2017 in 北九州」を最終日に開催している。

(2) 運営体制

主催は北九州市、北九州市障害者スポーツ協会、(社)北九州市福祉事業団、(一社)日本車椅子バスケットボール連盟で、大会実行委員会事務局を北九州市障害者スポーツセンター「アレアス」内に設置している。大会運営費は約 3,000 万円で、約 7 割を北九州市が拠出し、約 3 割をスポンサー収入で賄っている。チャンピオンズカップの特徴のひとつとして、第 1 回大会(2003)より観戦チケットを有料化していることがあげられる。



4. 北九州市小学校車椅子バスケットボール大会

チャンピオンズカップ開催期間中には、市内の小学校を対象に、車椅子バスケットボールへの理解や障害者への配慮、バリアフリーへの意識の醸成を目的とした「北九州市小学校車椅子バスケットボール大会(以下、小学生大会)」を2006年より同時開催している。2017年大会で第12回目を迎えた。市内の小学校5年生以上を対象としており、2015年大会へは4校(合計8チーム)、2016年大会へは3校(合計6チーム)、2017年大会へは3校(合計6チーム)が出場した。予選リーグでは全員出場が規定されており、大会に向けて日常的に練習ができるように、大会事務局が競技用車椅子を貸し出し、大会開催5ヵ月前から週1回のペースで、体育や総合の授業、昼休み等の練習時間に、地元選手や大会運営事務局職員が直接指導を行っている。前年の大会に出場した6年生(当時、5年生)を相手に練習試合を行う小学校もある。



5. 小・中学校交流会

大会では、海外のトップアスリートと小学生が直接触れ合う機会をもてるようにと、海外チームは大会開催4日前から来日する。2016年大会では、アメリカ、イギリス、オーストラリア、日本のチームが市内の小中学校9校を訪問し、車椅子バスケットボールの体験会やレクリエーションなどで交流を図った。

2016年大会のイギリスチームを例にとると、来日後、休養日を挟み、初日に市内小学校を訪れ交流会を開催し、2日目と3日目午前は小学生大会に出場する児童をイギリスチームがコート脇で応援した。3日目午後から5日目までは、チャンピオンズカップに出場するイギリスチームに、小学生が作成した英語の応援歌で観客席から声援を送った。2017年までに、のべ110校を超える小・中学校が学校交流会に参加し、海外チームとの交流を図っている。その結果、交流した小学生が本大会や障害者スポーツに興味をもち、成人してから大会運営事務局にボランティアとして携わる好循環もみられ始めた。



国際親善女子車いすバスケットボール大阪大会

【特徴】

- ・ 平日夜間にも試合を組むなど工夫を凝らし、大会期間中の観客動員数は約 1 万人
- ・ 市内 8 行政区の小・中学校で地域親善交流会を開催し、障害者に対する理解啓発を促進

1. 大会の概要

本大会は、女子車椅子バスケットボールの普及・発展を目指すとともに、広く地域住民や学校に参加を呼びかけ各国選手団との交流や車椅子バスケットボールの体験などを通じて、国際親善と障害のある人に対する理解高揚を図ることを目的に実施している。2017 年大会は、2 月 9 日から 11 日まで、大阪市中央体育館を会場に開催された。会期中は、各国代表チームが小・中学校の児童生徒と触れ合う地域親善交流会(後述)、車椅子操作を学ぶ体験会、肢体不自由児が選手から指導を受ける夜間のジュニアレッスンなど、国際競技会としてだけではなく、障害と障害者に対する市民の適切な理解を促すため、様々なイベントを企画している(図表 2-17)。



図表 2-17 開催スケジュール(2017 年大会)

8日(水)	午前	地域親善交流会(オーストラリア・イギリス)	10日(金)	午前	第3試合
		チーム練習(日本・オランダ)			第4試合
	午後	地域親善交流会(日本・オランダ)			車椅子バスケットボール体験会・チャレンジコーナー
		チーム練習(オーストラリア・イギリス)		午後	第5試合
9日(木)	午前	車椅子バスケットボール体験会・チャレンジコーナー			車椅子バスケットボール体験会・チャレンジコーナー
		第1試合		夜間	第6試合
	午後	車椅子バスケットボール体験会・チャレンジコーナー	11日(土)	午前	車椅子バスケットボール体験会・チャレンジコーナー
		第2試合			3位決定戦
		車椅子バスケットボール体験会・チャレンジコーナー		午後	優勝決定戦
	夜間	ジュニアレッスン			

2. 大会開催の背景

本大会の前身である「日本車椅子マラソン大阪大会」は、大阪市の身体障害者福祉法施行 40 周年記念事業として 1991 年に始まったマラソン大会で、2002 年まで大阪市障害者福祉・スポーツ協会(当時の大阪市障害更生文化協会)が主催し、2006 年に大会を終了するまでは、日本身体障害者陸上競技連盟(現:日本パラ陸上競技連盟)が主催した。車椅子マラソンでの障害者スポーツの普及に取り組んでいたが、大阪市と大阪市障害者福祉・スポーツ協会は、大阪市障害者福祉・スポーツ協会に車椅子バスケットボ

ール連盟に携わっていた職員がいたこともあり、2003 年以降、日本車椅子マラソン大阪大会の開催で培ったネットワークとノウハウをいかし、「国際親善女子車いすバスケットボール大阪大会」を開催することとなった。2003～2006 年までの 4 大会は男子大会として開催していたが、大阪市出身で日本代表の網本麻里選手が大阪市の障がい者スポーツセンターで練習を積んでいたことなどから、2007 年以降は、女子選手の活躍に期待し、国内唯一となる女子大会として開催している。



3. 国際親善女子車いすバスケットボール大会

(1) 出場チームと観客動員数

2017 年大会にはオーストラリア、イギリス、オランダ、日本の 4 チームが出場した(図表 2-18)。過去には、アメリカ、カナダ、ドイツ、韓国などの車椅子バスケットボール強豪国が出場している。3 日間の大会期間中の観客動員数は約 1 万人に達し、2017 年大会からは、生産年齢世代の観戦を促すため、平日の夜間(18:15～)にも試合を組むなど、工夫を凝らしている。

図表 2-18 出場チームと観客動員数

年	出場チーム	3日間の 観客動員数(人)
2003	オーストラリア、カナダ、韓国、日本	11,750
2004	オーストラリア、カナダ、韓国、日本	10,500
2005	オーストラリア、カナダ、韓国、日本	11,100
2006	オーストラリア、カナダ、中国、日本	10,500
2007	アメリカ、オーストラリア、カナダ、日本	11,000
2008	アメリカ、オーストラリア、カナダ、日本	11,500
2009	アメリカ、オーストラリア、カナダ、日本	12,000
2010	アメリカ、オーストラリア、カナダ、日本	10,000
2011	オーストラリア、カナダ、日本A、日本B ※アメリカチームのキャンセルにより、日本が2チーム出場	10,500
2012	オーストラリア、カナダ、中国、日本	12,100
2013	オーストラリア、カナダ、日本	11,300
2014	オーストラリア、日本 ※「車椅子バスケットボール親善交流会in大阪」を1日のみ開催	2,200
2015	イギリス、オーストラリア、カナダ、日本	5,305
2016	イギリス、オーストラリア、ドイツ、日本	9,713
2017	イギリス、オーストラリア、オランダ、日本	9,786 注)

注) 2017 年大会より、観客動員数に大会関係者を含めずに計上

(2) 運営体制

大会事務局は、大阪市福祉局障がい者施策部障がい福祉課、大阪市障害者福祉・スポーツ協会、障がい者スポーツ振興部スポーツ振興室、長居・舞洲障がい者スポーツセンター指導課、大阪府バスケットボール協会の職員など 23 人で構成され、大会当日は行政、協会、センター職員の 3 者が協力して開催している。2014 年、当時の橋下大阪市長が掲げた「市政改革プラン」による予算削減により、大阪市予算が無くなった。海外チームの渡航費等含めた約 2,100 万円の大会開催費用を捻出するため、大阪市障害者福祉・スポーツ協会が中心となって、日本生命保険相互会社・ニッセイニュークリエーション、沢井製薬、エイベックス・グループ・ホールディングスなど多くのスポンサー企業を獲得し、運営費に充てている。

大会の円滑な運営を図るため、通訳として ECC 国際外語専門学校、チーム帯同や運営ボランティアとして大阪体育大学、大阪国際大学、武庫川女子大学、大阪障がい者スポーツ指導者協議会、会場案内として日本ケアフィット共育機構(サービス介助士養成組織)など、毎年延 300 人を超えるボランティアが参加して、大会を支えている。

4. 地域親善交流会を通じた障害と障害者スポーツの理解啓発

第 1 回大会より、大会前日に各出場チームが小・中学校を訪問する地域親善交流会を開催している(第 11 回大会までは「学校交流会」として開催)。障害者の理解啓発を目的としており、市内 24 行政区から希望を募り、その内 8 区の小・中学校に選手を派遣する。各区に障がい者スポーツセンター職員を 2 人ずつ配置し、区役所担当者、学校担当者と密に連携を取り、当日のプログラムを企画する。2017 年は、5 つの小学校、3 つの中学校で約 1,700 人の児童生徒が参加した。2018 年大会には、14 区からの開催希望があり、抽選が行われた。

交流会に参加したり、大会観戦に来た小・中学生が、大学生になって障害者スポーツに興味を持ち、本大会に学生ボランティアとして関わり、その後教員として教え子を観戦に連れてくるなど、15 年の歴史を経て、ポジティブな効果が生まれ始めている。



3. 調査結果(海外事例)

各国の障害者のスポーツ環境は、国の成り立ちや歴史的背景、行政や予算の仕組み、文化や社会資源など、国ごとに異なっている。そのなかで、障害のある人となない人が一緒に行うスポーツイベントを国際的に比較することは容易ではないが、本調査では、これからの障害者のスポーツ大会の方向性を模索するための参考として、文献調査を行い、取りまとめた(図表 2-19)。

図表 2-19 海外事例

国名	事業・大会名称	主催	特徴
イギリス	プロジェクト・アビリティ (Project Ability)	ユーススポーツトラスト	・スクールゲームズ(各学校を拠点にした競技会)への障害児・者の参加を促進 ・健全児と障害児でチームを編成し、ボッチャや車椅子バスケットボールなどに出場 ・リーダー校は近隣の特別学校や普通学校と連携し、年間を通してスポーツ大会を企画
オーストラリア	パシフィック・スクール・ゲームス (Pacific School Games)	スクールスポーツオーストラリア 南オーストラリア州 ツーリズムコミッション	・10～19 歳の代表選手と約15か国の代表選手が出場するジュニア世代の国際大会 ・障害のある児童生徒も出場できる種目としてゴールボールを実施 ・障害者スポーツと連携し、陸上や水泳においても障害のある選手が積極的に出場
カナダ	カナダ・ゲームス (Canada Games)	カナダ・ゲームス評議会	・州・準州の代表選手(アマチュア選手に限定)が出場する全国大会 ・知的障害部門(スペシャルオリンピックス部門)を水泳、陸上、フィギュアスケートに設置 ・身体障害者は陸上、水泳、セーリング、車椅子バスケットボールなどに出場

プロジェクト・アビリティ（Project Ability）

イギリスにおいてプロジェクト・アビリティを主導するユーススポーツトラストは、1995年に設立した登録慈善団体で、国内の学校体育・スポーツの質的向上や、障害児を含む青少年のスポーツ参加の促進において中心的役割を担っている。

1. セインズベリーズ競技会（スクールゲームズ）

2012年ロンドンパラリンピック大会のスポンサーでもある大手スーパーマーケット・セインズベリーズ（Sainsbury's）は、大会の開催決定を機に、学校体育をはじめ、障害児・者の競技スポーツへの促進を目的に、セインズベリーズ競技会（スクールゲームズ）を開催し、障害児・者のスポーツを支援するようになった。スクールゲームズは、運動会・体育祭を含む「校内対抗試合」、児童生徒が各学校を代表して対戦する「学校間の交流会」、地区ごとに開催される「地区大会」、そして「全国大会」の4つのレベルで構成されている。学校は、各学校の希望と児童生徒の特徴に合わせて、約30種目から選択する。

2. プロジェクト・アビリティとリーダー校

プロジェクト・アビリティは、スクールゲームズへの障害児・者の参加を促進し、よりインクルーシブな競技会にすることを目的にした取組である。普通学校の中には、健常児と障害児でチームを構成し、テーブルクリケット、ボッチャ、車椅子バスケットボールなどの障害者スポーツ種目に参加したり、特別学校と普通学校との合同クラブを設置し、他校と対戦を組むこともある。

ユーススポーツトラストは、障害児・者が競技会に参加している先進的な国内の学校を「リーダー校」に指定している。約50校（2017年時点）のリーダー校は、障害児・者の競技会への参加を希望する学校へのアドバイス、地域でのスポーツ機会の創出、学校のクラブ活動の企画運営支援などを行っている。

(1) フライアーズ・アカデミー（Friars Academy）

イングランド中部のノーサンプトンシャー地域では、障害の有無にかかわらず学習が困難である児童生徒（Special Educational Needs）が通う特別学校「フライアーズ・アカデミー」が、リーダー校として指定されている。フライアーズ・アカデミーは、児童生徒への充実した運動・スポーツへの参加機会の提供と、学校と地域間のパートナーシップの構築に対する功績と努力が評価され、2009年にユーススポーツトラスト主催のスペシャリストスポーツカレッジ賞を受賞している。リーダー校として、近隣の特別学校や普通学校と連携しながら、年間を通してアーチェリー、ゴールボール、女子のシッティングバレーボールなど様々な年間イベント・行事を企画・参加している。

(2) ヴェイル・スクール（Vale School）

北ロンドンのハーリングエイ・ロンドン特別区にある特別学校「ヴェイル・スクール」は、2～16歳の障害がある児童生徒（身体障害、発達障害、精神障害など）が在籍するリーダー校である。北ロンドンのハーリングエイ、エンフィールド、ウォルサム・フォレスト地区にある学校を中心に、体育や部活動を担当する教員に対して、インクルーシブなスポーツ環境の創出に向けてアドバイスを行っている。また、障害の有無に関わらず18歳以下の生徒を対象とした3日間のスポーツキャンププログラム「ステップ・イントゥー・スポーツ・キャンプ（Step into Sport Camp）」に毎年参加している。キャンプでは、障害者スポーツ体験などを行い、地域や学校で障害者スポーツイベントの企画・運営を担う障害者スポーツリーダーの養成に貢献している。

パシフィック・スクール・ゲームス（Pacific School Games）

オーストラリアには、6 つの州と 1 つの準州、そして首都がある特別地域があり、パシフィック・スクール・ゲームスは、州・準州大会を勝ち進んだ 10～19 歳の代表選手と海外約 15 か国の代表選手が出場するジュニア世代の国際大会である。

1. 歴史的な変遷

1982 年にクイーンズランド州の州都ブリスベン市で開催されたコモンウェルスゲームズ（イギリス連邦に属する国・地域が参加し、4 年毎に開催される国際大会）のプレイベントとして、同市で第 1 回パシフィック・スクール・ゲームスが開催された。同大会への出場選手数は、第 1 回大会（1982 年）の 2,187 人から、2008 年キャンベラ大会では 4,888 人が出場するまで増加したが、2008 年のリーマン・ショックにより開催の継続が困難となり、2008 年大会で終了となったが、2015 年、南オーストラリア州ツーリズムコミッションとスクールスポーツオーストラリアの支援のもと、南オーストラリア州で第 9 回大会として復活した。以前の 4 年周期の開催から 2 年周期へと変わり、2017 年第 10 回大会も 12 月 3～9 日に同州で開催された。

2. 実施種目

7 年ぶりに復活した 2015 年大会では、野球、バスケットボール、ダイビング、サッカー、ゴールボール、ソフトボール、水泳、卓球、タッチフットボールの 9 競技（種目）が実施された。2017 年大会では、野球と卓球が廃止され、国内で人気の高いゴルフ、ホッケー、ネットボール、陸上の 4 競技が採用され、合計 11 競技（種目）が実施された。

3. 障害がある選手の参加

2015 年大会で実施された卓球では、車椅子使用者、立位、知的障害の 3 部門を設け、各州・準州を代表する障害のある選手が出場した。

ゴールボールは 2015 年大会以降実施されており、視覚障害のある生徒が障害のない児童生徒と一緒にチームを組み出場できる。チーム編成の条件として、最低 4 人の選手で構成し、その半数以上が視覚障害のある選手でなくてはならない。オーストラリアゴールボール選手権大会（Australian Goalball Championships）で優勝した 14 歳の選手が、ニューサウスウェールズ代表として 2017 年大会に出場した。

また、オーストラリアパラリンピック委員会、オーストラリア聴覚障害者スポーツ協会、スポーツ・インクルージョン・オーストラリアと連携し、陸上や水泳においても障害のある選手が積極的に出場できるよう支援している。

カナダ・ゲームス（Canada Games）

カナダは 10 の州と 3 つの準州で構成されており、カナダ・ゲームスは、各州・準州の代表選手（アマチュア選手に限定）が出場する国内最高峰の大会で、次世代の国際大会に出場するであろう選手の登竜門として位置付けられている。

1. 歴史的な変遷

カナダ建国 100 周年記念大会として、1967 年にカナダ・ゲームス冬季大会（第 1 回）がケベック州ケベック・シティーで開催され、10 の州と 2 つの準州から 1,800 人を超える選手が 15 競技に出場した。1969 年にはカナダ・ゲームス夏季大会（第 2 回）がノバスコシア州のハリファックス市とダートマス市（2017 年現在はハリファックスに合併されている）で開催された。第 1 回大会以降、各州・準州が持ち回りで冬季大会と夏季大会を 2 年おきに開催し、2017 年 11 月時点で 2035 年冬季大会までの開催地が決定している。

2. 実施種目

2017 年 7 月に開催された夏季大会は 18 競技（種目）、2019 年冬季大会は 21 競技（種目）が実施される予定である（図表 2-20）。夏季大会と冬季大会の開催地の負担を均等にするため、体操、柔道、スカッシュなど室内で実施可能な競技については冬季大会で実施している。

図表 2-20 カナダ・ゲームス実施種目

2017 年夏季大会（18 競技・種目）		2019 年冬季大会（21 競技・種目）	
陸上 ●◆	ラグビー	アルペンスキー ◆	柔道
野球	セーリング ◆	アーチェリー	リンゲット ※
ビーチバレーボール	サッカー	体操	スピードスケート（ロング）
カヌー	ソフトボール	バドミントン	スピードスケート（ショート）
自転車（マウンテンバイク）	水泳 ●◆	バイアスロン	スノーボード
自転車（ロード）	テニス	ボクシング	スカッシュ
ダイビング	トライアスロン	クロスカントリースキー ◆ （ノルディックスキー含む）	シンクロ
ゴルフ	バレーボール	カーリング	卓球
ローイング	レスリング	フィギュアスケート ●	トランボリン
		フリースタイルスキー	車椅子バスケットボール ◆
		ホッケー	

●：知的障害者の参加あり ◆：身体障害者の参加あり

※アイス・ホッケーに似た女性が参加できるスポーツ

3. 障害がある選手の参加

スペシャルオリンピックス・カナダと連携し、知的障害部門（スペシャルオリンピックス部門）を水泳、陸上、フィギュアスケートに設けている。また、身体障害のある選手は、車椅子バスケットボールに加えて、身体障害者部門（パラリンピック部門）を設けている陸上、水泳、セーリング、アルペンスキー、クロスカントリースキーへも出場が可能である。水泳、陸上、車椅子バスケットボールに出場した障害がある選手には、その後パラリンピックに出場しメダルを獲得した選手も多くいる。例えば、Bo Hedges 氏は、1999 年大会と 2003 年大会の車椅子バスケットボールにブリティッシュ・コロンビア州代表として出場し、その後、カナダ代表として 2008 年北京パラリンピックで銀メダル、2012 年ロンドンパラリンピックで金メダルを獲得している。

4. 調査結果(大会一覧)

国内の障害者が参加する主な大会を、一般のスポーツ大会に障害者部門を設置している大会と障害者のスポーツ大会に障害のない人が参加している大会に分けて一覧にした(図表 2-21、2-22)。

図表 2-21 一般のスポーツ大会に障害者部門を設置している主な大会

No	大会名	競技	障害種別	備考
1	全日本自転車競技選手権大会 トラック・レース 兼日本パラサイクリング選手権・トラック大会	自転車競技	エリートの部(一般男女) パラサイクリングの部(男女)	日本自転車競技連盟とパラサイクリング連盟共催
2	全日本選手権自転車競技大会ロードレース 兼日本パラサイクリング選手権・ロード大会			日本自転車競技連盟とパラサイクリング連盟共催
3	かすみがうらマラソン兼国際盲人マラソン	マラソン	車いすの部、国際盲人の部	主催 かすみがうらマラソン大会実行委員会 他
4	くまもと車いすふれあいジョギング大会		車いす常用户のみ	平成28年は健常者の方で車いすを持参できる方も参加可能
5	長良川ふれあいマラソン		ハーフ(21キロ):男女車イス(競技用) クォーター(10キロ):男女車イス(生活用) 2キロ:男女車イス(生活用)	ハーフは車イス(競技用)のみ
6	とまこまいマラソン大会		生活用車いすの部(3キロマラソン) 競技用車いすの部(ハーフ) 視覚障害者の部(3・5キロ)	
7	岡山吉備高原車いすふれあいロードレース		車いすロードレースの部	主催:岡山吉備高原車いすふれあいロードレース大会組織委員会
8	大町アルプスマラソン		全種目視覚障害者も参加可能	主催:大町アルプスマラソン実行委員会
9	あいの風リレーマラソン		一般の部(車いすは事前の申請が必要)	主催:富山あいの風リレーマラソン実行委員会
10	赤穂市民マラソン		車いすの部(2キロ)	主催:赤穂シティマラソン大会実行委員会
11	下関海響マラソン		車いすの部(2キロのみ参加可能)	主催:下関海響マラソン実行委員会
12	福岡マラソン		車いす競技の部(レース仕様車) ファンラン	※マラソン及びファンランでは障がいのある方で単独走行が困難な方は伴走者及びガードランナーをそれぞれ1人つけることができる(盲導犬の伴走は不可)。
13	つわぶきハーフマラソン&車いすマラソン大会		車いすハーフマラソンの部	主催:つわぶきハーフマラソン&車いすマラソン大会実行委員会
14	鈴鹿シティマラソン		競技用車いすの部 生活用車いすの部	
15	こうべしあわせNEWYEARマラソン			障害者手帳を持っている方・車イスのかたも参加可能 (競技用車イスは不可) 主催:しあわせNEW YEARマラソン実行委員会
16	はまなす車いすマラソン		車いすの部	2015年から北海道マラソンと同日に同じコースで開催
17	会津若松市鶴ヶ城ハーフマラソン大会		車いすの部	主催:福島陸上競技協会 会津若松市鶴ヶ城ハーフマラソン大会実行委員会
18	鳥取さわやか車いす大会	マラソン ウォーキング	車いすの部 障害者の部(身体・知的・精神)	湖山池マラソン大会と同日に同じコースで開催 主催:一般財団法人鳥取陸上競技協会
19	世界トライアスロンシリーズ横浜	トライアスロン	パラトライアスロンの部 エイジパラトライアスロンの部	
20	長良川パラトライアスロン		パラトライアスロンの部 パラスーパースプリメント	主催 長良川パラトライアスロン大会2017実行委員会
21	みやぎ国際トライアスロン仙台ベイセツ大会		パラトライアスロンの部	セツ浜町 公益社団法人日本トライアスロン連合と日本学生トライアスロン連合の共催
22	蒲郡オレンジトライアスロン		パラトライアスロンの部	主催:蒲郡トライアスロン実行委員会
23	びわ湖トライアスロンin近江八幡		パラの部、パラジュニアの部	主催:びわ湖トライアスロンin近江八幡実行委員会
24	ジャパンクラシックパワーリフティング選手権大会	ウェイトリフティング	障害者はベンチプレスのみのエントリーも可	健常者・障害者交流

図表 2-22 障害者のスポーツ大会に障害のない人が参加している主な大会

No	大会名	概要	備考
1	パラ駅伝	第1区：視覚障がいランナー及び伴走者/第2区：聴覚障がいランナー 第3区：車いすランナー(女)/第4区：健常ランナー(男) 第5区：知的障がいランナー/第6区：肢体不自由ランナー(立位) 第7区：健常ランナー(女)/第8区：車いすランナー(男)	主催 日本財団パラリンピックサポートセンター
2	おおたユニバーサル駅伝	1区間約1kmのコースを5人の選手がタスキをつなぐリレー競争 チームごとにチーム名、順送、総合目標タイムを決めて申告 主催者が設定したタイムに最も近いチームが入賞 ●参加対象：全員(小学生・60歳以上・視覚・聴覚・知的・精神などの障害者、車いす使用者)	主催 NPO法人 ジャパンユニバーサルススポーツネットワーク
3	スペシャルオリンピックス日本 全国ユニファイドサッカー大会	国際サッカー連盟からの助成金を受けて開催。今大会では主管地区が主体的に大会を開催できるよう支援すると共に、日本サッカー協会や開催地区のサッカー協会との連携・協力体制を取りながら準備を行う。2016 年度大会より出場希望が増える。 ◆実施競技 ユニファイドスポーツ® 11人制サッカー/7人制サッカー ◆参加者 選手団302名 -アスリート・パートナー 237名/コーチ65名 (20チーム:12地区組織+SO韓国) -11人制ユニファイドサッカー 5チーム(韓国1チーム含む) -7人制ユニファイドサッカー 15チーム ◆ボランティア 延べ384名 (競技役員延べ26名、ボランティア延べ358名) ◆観客 約800名	主催 公益財団法人スペシャルオリンピックス日本
4	全日本肢体障害者ボウリング選手権大会	・2016年度は、大会に先駆け前日には健常者と障がい者の交流戦が行われた。 ・愛媛で開催される全国障害者スポーツ大会では、肢体障がい者ボウリングがオープン競技として採用されるが、競技者の高齢化は進む	
5	国際親善女子車椅子バスケットボール大会	・障害者スポーツの普及・発展、国際交流、地域住民と各国選手団との交流 【参加国】・オーストラリア、イギリス、オランダ、日本の各国代表チーム 応援の参加を広く市民や学校などに呼びかけるとともに、障がいのある人のスポーツ体験、選手と市民の地域親善交流などの併催イベントを開催。 障がいのある人のスポーツの普及・発展をめざし国際交流に資するため、世界の強豪女子チームが参加する車いすバスケットボール競技大会を開催。 【参加者】・肢体不自由のある小学生から高校生20名程度	主催 日本車いすバスケットボール連盟
6	北九州チャンピオンズカップ 国際車椅子バスケットボール大会	・「2002年北九州ゴールドカップ」の開催を記念するとともに、北九州市が「バリアのないまちづくり」を進めるための象徴 ・2020年東京パラリンピックに出場する若手選手の育成 ・北九州市が東京パラリンピック開催前のキャンプ候補地として各国に積極的に働きかける 【参加チーム(2017)】4チームカナダ、大韓民国、オランダ、日本)	主催 一般社団法人 日本車いすバスケットボール連盟等 ●同時開催 全日本ブロック選抜車椅子バスケットボール選手権大会 北九州市小学生車椅子バスケットボール大会
7	全国車椅子バスケットボール大学選手権大会	全国から強豪大学6校が集まり、No.1を決める戦い。 大会2日目には車椅子バスケットボール体験講座を開催	
8	シットイングバレーボール全国親善交流大会 in 白馬	障害者のみ、障害者・健常者混合、健常者のみ、いずれのチーム編成でも参加可能	主催 一般社団法人日本バレーボール協会
9	日本シットイングバレーボール選手権大会	シットイングバレーボールを通じ身体障害者と健常者のスポーツ交流・相互理解・共に生きる社会の輪を広め、バレーボールの競技力の向上と普及・振興を図り、心身共に健康で潤いのある豊かな生活の向上を図る。 障害者・健常者混合のチーム編成での参加可能 (但し、男子障害者2名、女子障害者1名が必ずコート内で競技しているものとする)	聴覚障害者も障害者として資格がある。また、健常者のみのチームでも参加できる。
10	龍馬交流ポッチャ大会	障害の種別にかかわらず楽しめるユニバーサルなスポーツとして、ポッチャ競技の普及を図る。 また、県内のみでなく四国 4 県における参加者同士の交流を深め、障害のある方々の社会参加の促進に寄与することを目的とする	障害のある方(障害種別は問わない)及び健常者 団体の部は、1 チーム 3 名とし、障害者 2 名以上で編成することとします(エントリーは 5 名まで可能) 主催 高知県ポッチャ協会
11	新潟県障害者スポーツ大会 ポッチャ競技	2014年度まで、「新潟県障害者ふれ愛ポッチャ大会」として開催し、2015年度から新潟県障害者スポーツ大会の公開競技になった。 チーム構成は 3～5 名(男女混合可、介助者含まず)とし、1 名だけ障害のない者が選手として競技に参加することができる。	主催 新潟県障害者スポーツ協会

Ⅲ. まとめと考察

まとめと考察

東京パラリンピック開催まで残すところ 2 年余りとなった。2013 年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催決定以降、わが国の障害者のスポーツ環境は大きな変革の最中と言えるだろう。2017 年 3 月にスポーツ庁が策定した第 2 期スポーツ基本計画の施行から 1 年が経過した。計画に明記された「スポーツを通じた共生社会等の実現」に向けて掲げられた目標を確認する意味では、初めての調査結果となる。本報告書は、地域における障害者スポーツの普及の観点から、マクロな視点(障害児・者のスポーツライフに関する調査)とミクロな視点(障害のある人となない人が一緒に行うスポーツ大会に関する調査)で取りまとめた。

1. 障害児・者のスポーツ実施の現状

本調査は、平成 25 年度、平成 27 年度に続き、3 回目の障害当事者を対象としたアンケート調査となる。7 歳以上の障害児・者の運動・スポーツの実施状況やニーズ等を明らかにし、経年分析を行った。平成 27 年度調査との相違点として、調査対象となる回答者本人及び同居する家族内の障害児・者を含めた障害児・者の総数が、平成 27 年度調査では 6,449 人、本調査では 8,094 人と 1,500 人以上増加した。

成人のスポーツ実施率は引き続き上昇傾向

障害のある成人の週 1 日以上の運動・スポーツ実施率をみると、平成 25 年度調査が 18.2%、平成 27 年度調査が 19.2%、本調査が 20.8%と微増している。これまでに文部科学省・スポーツ庁が行ってきた「健常者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動に関する連携実践研究」(平成 24 年度)、「地域における障害者のスポーツ参加促進に関する実践研究」(平成 27～29 年度)「特別支援学校等を活用した障害児・者のスポーツ活動実践事業」(平成 28 年度～)などの実践事業のなかで、地域での障害児・者の運動・スポーツの活動の場が少しずつ整えられてきたこと、特別支援学校におけるスポーツ活動等推進のための基盤が整備されてきたことなどが後押しの要因になったと言えよう。第 2 期スポーツ基本計画では、障害のある成人の週 1 日以上のスポーツ実施率を 40%程度とすることを目指している。図表 1-45 で示されたが、スポーツ実施の障壁として挙げられている「スポーツ・レクリエーションをできる場所がない」「障害に適したスポーツ・レクリエーションがない」「やりたいと思うスポーツ・レクリエーションがない」が徐々に改善してきていることから、引き続き、スポーツ実施の障壁改善に向けた施策に期待したい。

スポーツ庁「スポーツの実施状況等に関する世論調査」(2018)によると、成人の過去 1 年間の運動・スポーツ実施率は、週 1 日以上が 51.5%、週 3 日以上が 26.0%である。本調査では、障害のある成人の運動・スポーツ実施率は、週 1 日以上が 20.8%、週 3 日以上が 9.8%となっており、障害者の定期的スポーツ実施率が健常者の半分以下である点は前回調査と同様の結果となった。性別でみると、総じて、男性に比べて女性の実施率が低かった。余暇時間や趣味としてのスポーツが、女性にとっては優先順位が必ずしも上位ではないということが推測される。

成人が過去 1 年間に実施した種目をみると、どの障害でも、散歩(ぶらぶら歩き)、ウォーキング、体操(軽い体操・ラジオ体操など)の実施率が高く、一般成人を対象とした笹川スポーツ財団の全国調査「スポーツライフに関する調査」(2016)と同様の結果であった。場所を選ばず、個人で手軽に行える運動の人気は、障害の有無を問わず、ここ数年共通した傾向である。また、年代を問わず、多くの障害種で水泳が人気種目であることも変わらない傾向である。水泳が上位に挙がってくる要因として、民間スイミングクラブに障害児・者を受け入れる体制が整っていることがある。一般社団法人日本スイミングクラブ協会のホームページでは、加盟クラブの対象カテゴリーが公表されているが、そのなかで障害児・者向け教室の開催有無が分かるように、カテゴリーに「S:障害者(身体・知的の区別なし) S1:身体障害者 S2:知的障害者」が明記されていることも、障害当事者やその保護者の立場からすると、安心して入会することにつながっていると考えられる。また、水泳は、浮力により身体的負担が減少し、リハビリテーション効果が期待できることも好まれる理由の一つである。

若年層のスポーツ実施率が若干低下

他方、若年層(7～19 歳)の週 1 日以上運動・スポーツ実施率は 29.6%であり、平成 25 年度調査の 30.7%、平成 27 年度調査の 31.5%と比較してわずかながら低下している。障害種別にみると、車椅子を利用する肢体不自由児(7～19 歳)において、週 1 以上のスポーツ実施率が平成 27 年度調査では 10.2%であったが、本調査では 19.4%と増加した。一方で、車椅子を利用しない肢体不自由児(7～19 歳)の週 1 以上のスポーツ実施率は 20.4%(平成 27 年度調査)から 16.3%(本調査)と減少傾向を示した。視覚障害児(7～19 歳)の週 1 以上のスポーツ実施率は、平成 27 年度調査では 42.8%であったものが、本調査では 23.5%と減少した。回答者数が少ないため、この調査結果のみからの原因分析は容易ではないが、今後も経年推移を見たうえでの分析課題としたい。また、若年層のスポーツ非実施率が、38.6%(平成 25 年度調査)、41.9%(平成 27 年度調査)、43.8%(本調査)と上昇傾向を示している。第 2 期スポーツ基本計画では、障害のある若年層の週 1 以上のスポーツ実施率を 50%程度とすることを目指しているが、この目標の達成に向けて、スポーツを実施しない若年層への対策が重要となる。

スポーツ・レクリエーションを実施する目的

スポーツ・レクリエーションを実施する目的は「健康の維持・増進のため」が最も多く、一般を対象としたこれまでの調査と同様の結果であった。障害種別に経年的な推移をみると、平成 25 年度調査と比べて本調査で 10 ポイント以上の増加傾向を示したのは、肢体不自由(車椅子必要)と知的障害の「気分転換・ストレス解消のため」、聴覚障害と知的障害の「健康の維持・増進のため」であった。逆に 10 ポイント以上の減少傾向を示したのは聴覚障害の「気分転換・ストレス解消のため」であった。回答者数が少ないこともあるだろうが、引き続き、経年的推移を見守る必要がある。

スポーツ・レクリエーションを行う施設

スポーツ・レクリエーションを行っている施設は、障害種別にかかわらず、公共スポーツ施設の体育館／グラウンド／プール(屋内)の利用が多かった。障害種別にみると、発達障害では公立小中学校の体育館／グラウンド、知的障害では特別支援学校の体育館／グラウンドが多かった。こうした傾向から、一般校の普通学級、または特別支援学級に在籍する発達障害児の利用、特別支援学校に在籍する知的障害児の利用が多いことが示唆される。また、「その他」の回答で多かったのは、障害児・者の日常生活の拠点となっている通所介護施設、通所リハビリテーション施設、病院、自宅などであった。これは、障害者の多くが、スポーツ施設以外の様々な場所で運動やスポーツを行っていることを示している。また、ほとんどの障害種では約半数が「その他」の施設を利用していたが、「肢体不自由(車椅子必要)」の利用は 19.3%と他の障害種より低かった。車椅子利用者のアクセシビリティにまだ課題があることが示唆されるが、「高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律」(バリアフリー新法)に基づき、施設等(旅客施設、車両等、道路、路外駐車場、都市公園、建築物等)の新設等の際の「移動等円滑化基準」への適合義務、既存の施設等に対する適合努力義務を定めるとともに、「移動等円滑化の促進に関する基本方針」において、平成 32 年度末までの整備目標を定めており、今後の改善に期待したい。

学齢期以降の成人障害者のスポーツ環境

現在のスポーツ・レクリエーションの取組について年齢別にみると、「19 歳以下」では「スポーツ・レクリエーションを行っており、満足している」(20.6%)が全体(14.9%)と比べて多く、「特にスポーツ・レクリエーションに関心はない」(38.2%)は全体(51.5%)と比較して少なかった(図表 1-44)。7～19 歳の週 1 日以上スポーツ実施率は約 3 割で、学齢期を終えた成人(約 2 割)と比べると多かった。一般校、特別支援学校を含めて、学齢期の障害児に対しては、スポーツ機会提供の大きな役割を担っているのが学校と言えるだろう。学校卒業後も、障害者が継続的にスポーツに参加できる地域スポーツの推進体制づくりに、行政、スポーツ関連団体、障害福祉関係団体などが連携しながら、継続的に取り組む必要がある。

障害者のスポーツ実施も二極化の恐れ

成人の障害者の週 1 日以上スポーツ実施率が上昇傾向にあることは前述したが、スポーツを実施していない割合は、過去の調査から変わらず約 6 割となっている。スポーツの実施／非実施におけるスポーツへの関心についてみると、「特にスポーツ・レクリエーションに関心はない」無関心層は、スポーツ実施者では 23.1%であったの対し、スポーツ非実施者は 73.1%(平成 25 年度調査)、77.0%(平成 27 年度調査)、81.7%(本調査)と増加傾向を示した。笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」(2016)でも明らかになっているが、障害者においてもスポーツを「する人」と「しない人」の二極化の可能性が示唆された。継続的にデータを蓄積していくなかで傾向が明らかになると考えられるため、今後の調査結果の推移を見守る必要がある。

2. 障害のある人となない人が一緒に行うスポーツ大会

国や地方自治体では、障害者スポーツの普及啓発や人材育成、障害者アスリートの発掘・育成など、次々に事業を立ち上げて実施している。2020 年東京パラリンピック開催までは、この“追い風”の状況は維持されることが想定されるが、本調査では、そのようなスポーツ大会のなかで、障害のある人となない人が一緒に参加できる事例に焦点を当て、大会の開催状況と運営体制の実態を明らかにした。開催方法は多様であり、一概にベストプラクティスを掲示することは容易ではないが、障害のある人となない人が一緒に参加する形態を以下 3 つに大別し、特に③障害者のスポーツ大会に障害のない人が参加するケースの大会に注目した。

- ①一般のスポーツ大会に特別な配慮なしに障害のある人が参加
- ②一般のスポーツ大会に障害者部門を設置
- ③障害者のスポーツ大会に障害のない人が参加

障害種、障害の程度などによっては、一緒にスポーツを行うことが難しく、特に重度障害や重複障害がある人と障害のない人が、どの競技種目でも一緒に行うというのは現実的ではない。そうしたなか、競技レベルに応じたクラス分けや参加者のカテゴリー属性に応じた配慮などにより、一緒にスポーツをすることができる競技種目があることが確認できた。前述の「障害児・者のスポーツライフに関する調査」でも明らかとなったが、障害者のおよそ 2 人に 1 人がスポーツに関心がないなかで、障害のある人が当たり前に参加し、気軽にスポーツに取り組むきっかけとしての大会が、今後増えていくことを期待して事例をまとめた。

地域では障害種別での大会参加者が決して多いとは言えず、対戦相手の組合せが数年経つと同じ組み合わせになることが珍しくない。スポーツを楽しむためには、必ずしも障害種が同じである必要はないという障害当事者の声を受け、障害のない人を加えてのクラス分けや、大会規則に申し送り事項として障害者への配慮内容を明記するなどの工夫をして、障害の有無にかかわらず大会を運営する事例が増えている。少子高齢化・人口減少の課題と直面しているわが国の社会情勢を鑑みると、今後、増えていく可能性を秘めている大会の運営方式と言えるだろう。

事例調査では紹介しきれなかったが、神戸市水泳協会が主催する「神戸市民水泳大会」は、フェスピック大会（アジアパラ競技大会の前身の大会）が 1989 年に神戸で開催されることが決まると、障害者アスリートの選手強化の一環として障害者が参加するようになった。フェスピック神戸大会終了後も、大会には障害者が当たり前に参加するようになった。現在では一般市民の水泳大会として初となる国際パラリンピック委員会公認大会として開催されている。また、一般社団法人日本パラバレーボール協会が主催する「シッティングバレーボール全国親善交流大会 in 白馬」は、すでに 20 回の大会開催となったが、健常者チーム、障害者チーム、健常者と障害者の混合チームが出場可能で、選手登録に関して障害の有無や健常者の人数に規制は設けず、障害のない人がより参加しやすい大会として継続されている。

3. 障害者へのスポーツ指導ができる人材の育成

現在、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会（以下、JPSA）公認の障がい者スポーツ指導員は、24,707人（平成30年2月28日現在）である。内閣府「障害者白書」（2017）では、わが国の身体障害児・者は約392万2,000人、知的障害児・者は約74万1,000人、精神障害児・者は約392万4,000人で、合計すると約860万人とされており、障害児・者からスポーツをしたいとの要望が出た際に、十分に対応できる体制とマンパワーが整備されているとは言い難い。単に障がい者スポーツ指導員を増やすだけではなく、指導の質の観点からは、すでにスポーツ指導の現場を持っている指導者、医療福祉の現場で障害者と関わっている医療福祉関係者、教育現場で障害児を日常的に指導している教員に、障害者スポーツに触れる機会を今以上に増やしていくことが重要になってくると考えられる。既存の保有資格や経験を最大限に考慮しつつ、それらを補完する形の全国共通プログラムが準備されるのが望ましい。学習方法は、遠隔地でも受講できるオンライン受講も可能として、障害者スポーツの理念と指導法の基礎について約半日掛けて学ぶことで、地域で障害者自身がスポーツに接する可能性、指導者が障害者スポーツを知っている人に出会える可能性を拓けることにも繋がるはずである。JPSAには、都道府県・政令指定都市の障害者スポーツ協会と連携して、全国共通プログラムの作成と提供を期待したい。例えば、実際に現場で指導しているスポーツ指導者が資格更新のために受講する義務研修として導入すること、障害福祉の職能団体が開催するポイント認定講習会・研修会の対象講習会として認定してもらうなど、障害者スポーツを選択肢の一つとして認識してもらうことが、地域で障害者のスポーツ環境を整備するための第一歩となるであろう。JPSAが中心となり、スポーツ関連団体、障害福祉の職能団体との年次会合を持つなかで、全国共通プログラムの実現性についての議論が進むことを期待したい。

また、日本体育学会アダプテッド・スポーツ領域のシンポジウムでは、喫緊の課題として教員養成課程における障害者スポーツ関連科目の必修化が挙げられている。他方、藤田らの「保健体育教員免許の取得可能な大学における障がい者スポーツ関連科目の実施状況に関する研究」（2014）によると、国公立大学で障害者スポーツに関する授業を開講している学校は約4分の1であった。障害者スポーツの体験やルール理解も大切であるが、教員養成課程における障害者スポーツ関連科目の主な目的は、障害者がスポーツをする際の障壁が何かを把握し、障害の種類や程度が個別に異なる児童生徒の心身の健康や安全上の問題となる多様な事態を想定し、的確に対応できる実践力を身に付けることである。スポーツを通じて、障害理解に努め、それを児童生徒との関わりの全てに活かしていくことが、障害者スポーツを学び、これに取り組むことの意義と言えるだろう。

4. 既存事業・体制の活用

地域の障害者がスポーツをする際には、気軽に楽しく、当たり前に行えることが重要となる。会場までの移動、医療相談、導入支援など、個々人でスポーツへの障壁は異なるが、地域での関わりのなかで、既存の社会資源を活用して当たり前に行き始める『場』づくりが進むことを期

待したい。前述の「障害児・者のスポーツライフに関する調査」において、スポーツ・レクリエーションを実施する場所として、通所介護施設、通所リハビリテーション施設、病院、自宅が多いことが明らかになったが、児童発達支援センターや児童発達事業所、放課後等デイサービス施設、デイサービス(通所介護)施設、デイケア(通所リハビリテーション)施設などを会場として、地域の障害者スポーツ協会と協働して身体を動かすプログラムを開発・提供、さらには自治体で導入している健康マイレージ制度や貯筋運動プロジェクト等と連動して、楽しく身体を動かす仕組みづくりを提案したい。既存事業・体制の活用、地域の福祉団体・組織とスポーツ団体・組織をつなぐ役割を担うのは、すでに地域の障害者スポーツ関連のネットワークを保有しており、障害者スポーツの専門知識を有する関係者を統轄できる立場の障害者スポーツ協会であることが望ましい。日本障がい者スポーツ協会・笹川スポーツ財団「都道府県・政令指定都市障がい者スポーツ協会実態調査」(2017)によると、地域のキーパーソンとして期待されている協会職員が、専任職員として業務に携われる協会は約4割であった。6割の協会は、兼務職員のため業務時間や業務範囲に制限があり、新たな事業への展開が難しい現状が判明している。既存の社会資源を活用して、障害者が当たり前にスポーツできる『場』づくりの実現に向けて、地域のキーパーソンとして、協会の専任職員が障害者のスポーツ環境整備にかかわることを期待したい。

5. 障害者のスポーツの日常化

JPSAの障害者スポーツセンター協議会に加盟している障害者スポーツセンターは26ヵ所、SSF「障害者専用・優先スポーツ施設に関する研究 2015」では障害者スポーツ専用・優先施設が全国に139ヵ所あるとしている。これだけでは地域の障害者の受け入れは難しく、公共スポーツ施設や民間のスポーツセンターの受け入れが不可欠になってくる。また、すでにスポーツ庁が実施している特別支援学校の拠点化もさらに重要性を増してくるであろう。障がい者スポーツ指導員資格を取得できる認定校が平成29年度時点で全国に181校あるが、すでに地域の触れ合いの場としての機能を果たしている学校では、障害者との触れ合いを積極的に進める中で、学生が在学中から障害者と触れ合うことの意味、その役割などについて実際に肌で感じる機会を提供できる可能性を持っている。

イギリスでは、イングランド障害者スポーツ協会(The English Federation of Disability Sport: EFDS)が、障害者差別禁止法(Disability Discrimination Act: DDA)の水準を満たし、障害者の受入れを促進するための指針として、スポーツ施設に対する「Inclusive Fitness Initiative (IFI)」プログラムを展開している。IFIは、講習会やオンラインでの情報共有を通じて、各スポーツ施設における障害者利用促進を目的に、プログラムの一環として「IFIマーク」の認定を行っている。IFIマークは、3年に一度、公共スポーツ施設において、交通の利便性、設備、活動内容など、障害者の使いやすさを基準に評価を行っており、準備(Provisional level)、登録(Registered level)、優良(Excellent level)の3つのレベルに分類される。このような認定制度を、障害者スポーツ施設、公共スポーツ施設、民間スポーツ施設、特別支援学校、認定校などを対象に適用することができれば、地域の障害者が自分自身でスポーツできる場を確認でき、身近な施設でのスポーツへのアプローチが可能

となるであろう。

障害者スポーツを“する”、“ささえる”の観点から、“みる”障害者スポーツの関心を高めることも重要となる。ヤマハ発動機スポーツ振興財団「テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査」では、地上波テレビ放送をパラリンピックの大会ごとにみると、北京大会（約 57 時間）、ロンドン大会（約 78 時間）、リオ大会（約 234 時間）と、急増していることが分かる。2020 年東京大会では、さらなる放送時間の増加は想像に難くないが、2021 年以降もその盛り上がりを維持していくのが望ましい。理想は、障害者スポーツを「国民的教養」の領域まで昇華させることである。ほとんどの国民がバスケットボールを知っているように、車いすバスケットボールについても同様の状態になることが望ましい。2020 年東京大会のレガシーの本来の目的とは、障害者スポーツのイベント開催、交流、理解啓発で終わりではなく、2020 年をきっかけに、社会の制度や仕組みを変革して、国民の認識、社会的構造を変えていくことにあるのではないだろうか。障害者が当たり前スポーツ施設に行き、当たり前仲間とスポーツを楽しむ。そんな光景を日本のスポーツ施設で日常的にみるのが、本当の意味での共生社会と言えるだろう。

IV. 参考文献・付録

参考文献

1. 全体

- 笹川スポーツ財団(2013).平成24年度 文部科学省『健全者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業(地域における障害者のスポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究)』報告書.
- 笹川スポーツ財団(2014).平成25年度 文部科学省『健全者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業(地域における障害者のスポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究)』報告書.
- 笹川スポーツ財団(2015).平成26年度 文部科学省『健全者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業(地域における障害者のスポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究)』報告書.
- 笹川スポーツ財団(2016).平成27年度 スポーツ庁『地域における障害者スポーツ普及促進事業(障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究)』報告書.
- 笹川スポーツ財団(2017).平成28年度 スポーツ庁『地域における障害者スポーツ普及促進事業(障害者のスポーツ参加における障壁等の調査分析)』報告書.
- 日本障がい者スポーツ協会・笹川スポーツ財団(2017).平成28年度『都道府県・政令指定都市障がい者スポーツ協会実態調査』報告書.
- 笹川スポーツ財団(2017).SSF政策提言2017.
- 笹川スポーツ財団(2015). 障害者専用・優先スポーツ施設に関する研究2015.
- ヤマハ発動機スポーツ振興財団(2017).テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査.
- 笹川スポーツ財団(2016). スポーツライフ・データ2016.
- 国土交通省(2006). 高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律
- 日本障がい者スポーツ協会(2018). <http://www.jsad.or.jp/>
- 日本体育学会第65回大会 アダプテッド・スポーツ科学専門領域シンポジウム. http://jspehss-ads.main.jp/img/ads_news2014.pdf
- Inclusive Fitness Initiative - English Federation of Disability Sport. <http://www.efds.co.uk/how-we-help/programmes/65-inclusive-fitness-initiative>

2. 障害児・者のスポーツライフに関する調査

- 内閣府(2017). 平成 29 年度障害者白書
- スポーツ庁(2017). 平成 28 年度 スポーツの実施状況等に関する世論調査
- スポーツ庁(2018). 平成 29 年度 スポーツの実施状況等に関する世論調査
- 藤田紀昭(2013). 障害者スポーツの環境と可能性.
- 藤田紀昭・金山千広・河西正博(2014). 保健体育教員免許の取得可能な大学における障がい者スポーツ関連科目の実施状況に関する研究
- 金山千広(2013). 日本におけるアダプテッド・スポーツの現状と課題:インクルージョンの普及に伴う学校体育と地域スポーツ, 広島大学総合科学研究科博士学位論文

3. 障害のある人とない人が一緒に行うスポーツ大会に関する調査

- 一般社団法人日本パラバレーボール協会(2017). 第 20 回シッティングバレーボール全国親善交流大会 in 白馬大会プログラム.
- 一般社団法人日本パラバレーボール協会(2017). <http://www.jsva.info/>

大阪市長居障がい者スポーツセンター開館 40 周年記念事業実行委員会(2014).過去と未来をつなぐ.

北九州チャンピオンズカップ国際車椅子バスケットボール大会(2017). <http://www.kitakyushu-cup.com/>

北九州チャンピオンズカップ国際車椅子バスケットボール大会実行委員会(2016).公式プログラム.

北九州チャンピオンズカップ国際車椅子バスケットボール大会実行委員会(2016).公式報告書.

北里大学 VANGS(2017). <http://sports.geocities.jp/vangsvangs2007/vangs.html>.

公益財団法人スペシャルオリンピックス日本(2017). <http://www.son.or.jp/>.

公益財団法人兵庫県障害者スポーツ協会(2017).第 29 回全国車いすマラソン大会プログラム.

公益財団法人兵庫県障害者スポーツ協会(2017).ひょうごの障害者スポーツガイドブック 2017.

国際親善女子車椅子バスケットボール大阪大会実行委員会事務局(2017). 2017 国際親善女子車椅子バスケットボール大阪大会運営マニュアル.

国際親善女子車椅子バスケットボール大阪大会実行委員会事務局(2017). 2017 国際親善女子車椅子バスケットボール大阪大会報告書.

埼玉県立大学 SPREAD(2017). <http://www.geocities.jp/spreadspu/>

笹川スポーツ財団(2017).スポーツ白書 2017 スポーツによるソーシャルイノベーション.

Special Olympics Great Britain(2017).Play unified.

スペシャルオリンピックス日本 2017 第 2 回全国ユニファイドサッカー大会(2017). <http://www.son.or.jp/news/event/20171228.html?p=2191>

第 24 回郡山シティーマラソン大会(2017). <http://koriyama-city-marathon.jp/>

第 29 回鶴ヶ城ハーフマラソン大会(2017). <http://aizu-tsurugajomarathon.jp/index.shtml>.

2019Canada Winter Games. <https://canadagames.ca/2019/>

2017Canada Summer Games. <https://www.canadagames.ca/2017/>.

2018 国際親善女子車椅子バスケットボール大阪大会(2017). <http://www.osakacup.org/>

2016 東京 CUP 卓球大会(2016).結果報告.

日本車椅子バスケットボール大学連盟(2017). <http://www.gbp-jp.com/>

日本車椅子バスケットボール大学連盟(2002).第 1 回全国車椅子バスケットボール大学選手権大会報告書.

日本車椅子バスケットボール大学連盟(2003).第 2 回全国車椅子バスケットボール大学選手権大会報告書.

日本車椅子バスケットボール大学連盟(2017).第 16 回全国車椅子バスケットボール大学選手権大会報告書.

Pacific School Games. <http://pacificschoolgames.edu.au/>

ひっぱりリーグ神戸(2017).順位結果.

ひっぱりリーグ神戸(2017).大会プログラム.

Friars Academy(2017).Project ability inclusive archery competition.

Vale School(2017).Project Ability.

Youth Sport Trust. School Games. <https://www.youthsporttrust.org/school-games>

障害児・者のスポーツライフに関する調査

日常に関する調査

アンケートにご協力いただき誠にありがとうございます。

はじめにお読みください。

- アンケートの回答には、ブラウザのJavaScriptの設定を有効にする必要があります。
 - 推奨環境 (OS・ブラウザ)
 - Windows Vista以降
 - Internet Explorer 10以降
 - Firefox 28.0以降
 - Macintosh OS X以降
 - Safari 6.0以降
- ※ 上記以外の (OS・ブラウザ) では、正常に動作しない場合がございます。あらかじめご了承ください。

下記のみどりのラインの中に「開始」ボタンが表示されない場合は、JavaScriptがOFFになっているか、推奨環境ブラウザではありません。
お手数ですが、[参考ページ](#)をご覧ください。
JavaScriptを設定後/ブラウザタイプ確認後に、ページの更新(F5キー)をお願い致します。

開 始

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

日常に関する調査

★印の付いた質問は必須回答項目となっていますので、必ずお答えください。

★S0-1.
あなたの性別をお答えください。(1つ選択)

- ☐ 男性
☐ 女性

★S0-2.
あなたの年齢をお答えください。(数値記入)
※半角数字でご記入ください。

歳

次 < >

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

日常に関する調査

★S1.
あなたの居住地域をお知らせください。郵便番号をご入力ください。
※郵便番号を入力し、検索をかけると自動で住所が入力されます。

★都道府県(1つ選択)
▼選択して下さい▼

★郵便番号 (半角数字/ハイフン区切り)
[例] 150-0002 郵便番号から住所入力

★市区町村
[例] 渋谷区渋谷

※郵便番号をお忘れの場合、市区町村名までご記入ください。

次 < >

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

日常に関する調査

★S2.
あなた、あるいはあなたが同居するご家族で障害のある方はいますか。(複数選択可)

- ☐ あなたご自身
☐ 配偶者
☐ 父親
☐ 母親
☐ 兄弟
☐ 姉妹
☐ お子様(第1子)
☐ お子様(第2子以降)
☐ 上記の中で障害のある方はいない

次 < >>

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

日常に関する調査

以下の項目は、障害のある方それぞれについて、お答えください。
兄弟、姉妹、第2子以降で障害のあるお子様が複数いる場合は、
年齢が一番上の方についてのみお答えください。

★S3.
ご家族で障害のある方の年齢と誕生日をお答えください。(それぞれ数値記入)
※半角数字でご記入ください。

ここに回答→	年齢	誕生日	
あなたご自身	*** 歳	月	日
配偶者	歳	月	日
父親	歳	月	日
母親	歳	月	日
兄弟	歳	月	日
姉妹	歳	月	日
お子様(第1子)	歳	月	日
お子様(第2子以降)	歳	月	日

次 < >>

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

日常に関する調査

★Q1.
ご家族で障害のある方の性別をお答えください。(それぞれ1つずつ選択)

ここに回答→	男性	女性
お子様(第1子)	☐	☐
お子様(第2子以降)	☐	☐

次 < >>

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

日常に関する調査

★Q2.
ご家族で障害のある方の障害の種類をお答えください。(それぞれ複数選択可)

ここに回答→	肢体不自由 (日常生活で 車椅子を必要とする) (車椅子を必要としない)	聴覚障害	視覚障害	知的障害	発達障害	精神障害	その他
あなたご自身	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
配偶者	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
父親	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
母親	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
兄弟	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
姉妹	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
お子様(第1子)	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
お子様(第2子以降)	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐

次へ>>

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

日常に関する調査

予備調査のご協力ありがとうございます。
これより**本調査**に移ります。
今回の調査は、
「障害児・者のスポーツライフに関する調査」になります。
引き続きご協力お願い致します。

次へ>>

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

日常に関する調査

障害のある *** TSC Q 10250 *** についてお伺いします。

★Q3- *** ANS Q 10260 *** .
障害のある *** TSC Q 10250 *** は、障害者手帳をお持ちですか。(複数選択可)

タテに回答↓	*** TSC Q 10250 ***
身体障害者手帳 1級	☐
身体障害者手帳 2級	☐
身体障害者手帳 3級	☐
身体障害者手帳 4級	☐
身体障害者手帳 5級	☐
身体障害者手帳 6級	☐
療育手帳(みどりの手帳・愛の手帳・愛護手帳) マル/A(最重度・重度)	☐
療育手帳(みどりの手帳・愛の手帳・愛護手帳) B・C(中度・軽度)	☐
療育手帳(みどりの手帳・愛の手帳・愛護手帳) その他	☐
精神障害者保健福祉手帳 1級	☐
精神障害者保健福祉手帳 2級	☐
精神障害者保健福祉手帳 3級	☐
障害者手帳を持っていない	☐

次へ>>

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

日常に関する調査

★Q4- *** ANS Q 10260 *** .
障害のある *** TSC Q 10250 *** は、何歳から障害がありますか。
複数の障害がある方は、最初に障害が発生した年齢をお答えください。(1つ選択)

▼▼▼選択して下さい▼▼▼

次へ>>

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

日常に関する調査

★Q5- *** ANS Q10260 *** .

障害のある *** TSC Q10250 *** は、過去1年の間にどのようなスポーツ・レクリエーションを行いましたか。(複数選択可)
※学校の部活動や休み時間の活動は含めますが、学校の授業や学校行事のキャンプやマラソン大会などは含めません。

<球技やチームスポーツ>

- ☐ キャッチボール
- ☐ ソフトボール
- ☐ 野球
- ☐ グラウンド・ゴルフ
- ☐ ゴルフ(コース)
- ☐ ゴルフ(練習場)
- ☐ ゲートボール
- ☐ サッカー
- ☐ フットサル
- ☐ フットベースボール(キックベースボール)
- ☐ ソフトテニス(軟式テニス)
- ☐ テニス(硬式テニス)
- ☐ 卓球
- ☐ ドッジボール
- ☐ バスケットボール
- ☐ バドミントン
- ☐ バレーボール
- ☐ ソフトバレーボール
- ☐ フライングディスク(フリスビー)
- ☐ ボウリング
- ☐ ラグビー

<ロープを使うスポーツ>

- ☐ つな引き
- ☐ なわとび

<体操・ダンス・トレーニング>

- ☐ エアロビックダンス
- ☐ 体操(軽い体操、ラジオ体操など)
- ☐ ダンス(社交ダンス、フォークダンス、フラダンスなど)
- ☐ ヨーガ
- ☐ 筋力トレーニング(マシントレーニング)
- ☐ 筋力トレーニング(ダンベル・自重のトレーニング)
- ☐ その他
- ☐ その他
- ☐ その他
- ☐ この1年間にスポーツ・レクリエーションは行わなかった

<武道>

- ☐ 空手
- ☐ 柔道
- ☐ 太極拳

<海・マリンスポーツ>

- ☐ 海水浴
- ☐ スノーバダイビング

<野外・アウトドアスポーツ>

- ☐ キャンプ
- ☐ サイクリング
- ☐ 乗馬
- ☐ 釣り
- ☐ 登山
- ☐ ハイキング

<ウィンタースポーツ>

- ☐ アイススケート
- ☐ スキー
- ☐ スノーボード

<障害者スポーツ>

- ☐ グランドソフトボール(盲人野球)
- ☐ 車いすテニス
- ☐ ブラインドテニス
- ☐ 車いすバスケットボール
- ☐ ゴールボール
- ☐ シッティングバレーボール
- ☐ フロアバレーボール
- ☐ 卓球バレー
- ☐ サウンドテーブルテニス
- ☐ ティーボール
- ☐ ハンドサッカー
- ☐ ブラインドサッカー(ロービジョンフットサル含む)
- ☐ ふうせんバレー
- ☐ ボッチャ

<歩く・走る・泳ぐ>

- ☐ ウォーキング
- ☐ 散歩(ぶらぶら歩き)
- ☐ ジョギング・ランニング
- ☐ マラソン、駅伝などのロードレース
- ☐ 陸上競技
- ☐ アクアエクササイズ
- ☐ 水泳
- ☐ 水中歩行

次へ >>

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

日常に関する調査

★Q6- *** ANS Q10260 *** .
Q5でお答えになったスポーツ・レクリエーション種目について、以下の項目にお答えください。
複数の種目をお答えになった方は、実施回数の多いものを5つまで選んでお答えください。

※頻度は、「年」を選んだ場合「1～365」回、「月」を選んだ場合「1～31」回、「週」を選んだ場合「1～7」回の範囲でお答えください。

ヨコへ回答→	頻度	
キャッチボール	▼▼▼▼▼	回
ソフトボール	▼▼▼▼▼	回
野球	▼▼▼▼▼	回
グラウンド・ゴルフ	▼▼▼▼▼	回
ゴルフ(コース)	▼▼▼▼▼	回
ゴルフ(練習場)	▼▼▼▼▼	回
ゲートボール	▼▼▼▼▼	回
サッカー	▼▼▼▼▼	回
フットサル	▼▼▼▼▼	回
フットベースボール(キックベースボール)	▼▼▼▼▼	回
ヨコへ回答→	頻度	
ソフトテニス(軟式テニス)	▼▼▼▼▼	回
テニス(硬式テニス)	▼▼▼▼▼	回
卓球	▼▼▼▼▼	回
ドッジボール	▼▼▼▼▼	回
バスケットボール	▼▼▼▼▼	回
バドミントン	▼▼▼▼▼	回
バレーボール	▼▼▼▼▼	回
ソフトバレーボール	▼▼▼▼▼	回
フライングディスク(フリスビー)	▼▼▼▼▼	回
ボウリング	▼▼▼▼▼	回
ヨコへ回答→	頻度	
ラグビー	▼▼▼▼▼	回
つな引き	▼▼▼▼▼	回
なわとび	▼▼▼▼▼	回
エアロビックダンス	▼▼▼▼▼	回
体操(軽い体操、ラジオ体操など)	▼▼▼▼▼	回
ダンス(社交ダンス、フォークダンス、フラダンスなど)	▼▼▼▼▼	回
ヨーガ	▼▼▼▼▼	回
筋力トレーニング(マシントレーニング)	▼▼▼▼▼	回
筋力トレーニング(ダンベル・自重のトレーニング)	▼▼▼▼▼	回
ウォーキング	▼▼▼▼▼	回
ヨコへ回答→	頻度	
散歩(ぶらぶら歩き)	▼▼▼▼▼	回
ジョギング・ランニング	▼▼▼▼▼	回
マラソン、駅伝などのロードレース	▼▼▼▼▼	回
陸上競技	▼▼▼▼▼	回
アクアエクササイズ	▼▼▼▼▼	回
水泳	▼▼▼▼▼	回
水中歩行	▼▼▼▼▼	回

空手	▼▼▼▼▼	回
柔道	▼▼▼▼▼	回
太極拳	▼▼▼▼▼	回
ヨコへ回答→		頻度
海水浴	▼▼▼▼▼	回
スクーバダイビング	▼▼▼▼▼	回
キャンプ	▼▼▼▼▼	回
サイクリング	▼▼▼▼▼	回
乗馬	▼▼▼▼▼	回
釣り	▼▼▼▼▼	回
登山	▼▼▼▼▼	回
ハイキング	▼▼▼▼▼	回
アイススケート	▼▼▼▼▼	回
スキー	▼▼▼▼▼	回
ヨコへ回答→		頻度
スノーボード	▼▼▼▼▼	回
グランドソフトボール(盲人野球)	▼▼▼▼▼	回
車いすテニス	▼▼▼▼▼	回
ブラインドテニス	▼▼▼▼▼	回
車いすバスケットボール	▼▼▼▼▼	回
ゴールボール	▼▼▼▼▼	回
シットティングバレーボール	▼▼▼▼▼	回
フロアバレーボール	▼▼▼▼▼	回
卓球バレー	▼▼▼▼▼	回
サウンドテーブルテニス	▼▼▼▼▼	回
ヨコへ回答→		頻度
テニスボール	▼▼▼▼▼	回
ハンドサッカー	▼▼▼▼▼	回
ブラインドサッカー(ロービジョンフットサル含む)	▼▼▼▼▼	回
ふうせんバレー	▼▼▼▼▼	回
ボッチャ	▼▼▼▼▼	回
その他(*** ANS Q 10781 ***)	▼▼▼▼▼	回
その他(*** ANS Q 10782 ***)	▼▼▼▼▼	回
その他(*** ANS Q 10783 ***)	▼▼▼▼▼	回

次へ>>

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

日常に関する調査

★Q7- *** ANS Q10260 *** .

障害のある *** TSC Q10250 *** がスポーツ・レクリエーションを行った日数を全部合わせると、1年間に何日くらいになりますか。(1つ選択)

- ☐ 週に3日以上(年151日以上)
- ☐ 週に1～2日(年51日～150日)
- ☐ 月に1～3日(年12日～50日)
- ☐ 3か月に1～2日(年4日～11日)
- ☐ 年に1～3日
- ☐ 分からない

★Q8- *** ANS Q10260 *** .

障害のある *** TSC Q10250 *** がスポーツ・レクリエーションを行う目的はどのようなものですか。

下記に回答↓	主な目的 (複数選択可)	最も重視する目的 (1つ選択)
健康の維持・増進のため	☐	☐
気分転換・ストレス解消のため	☐	☐
楽しみのため	☐	☐
友人や家族との交流のため	☐	☐
健常者との交流のため	☐	☐
体型維持・改善のため	☐	☐
リハビリテーションの一環として	☐	☐
目標や記録への挑戦のため	☐	☐
その他	☐	☐

★Q9- *** ANS Q10260 *** .

障害のある *** TSC Q10250 *** がスポーツ・レクリエーションをやってよかったことほどのようなものですか。(複数選択可)

- ☐ 友人が増えた
- ☐ 行動範囲が拡大した
- ☐ 周囲の理解が向上した
- ☐ 外出が増えた
- ☐ 相手の気持ちが配慮できるようになった
- ☐ ストレスが解消される
- ☐ 自信がついた
- ☐ 性格が明るくなった
- ☐ 体を動かすこと自体が楽しい
- ☐ 食事がおいしく、夜、熟睡できるようになった
- ☐ 体力・身体的機能が向上した
- ☐ 勝利や記録が出た時に嬉しい
- ☐ その他

次へ >>

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

日常に関する調査

★Q10- *** ANS Q10260 *** .

障害のある *** TSC Q10250 *** はスポーツ・レクリエーションをどこで行っていますか。(複数選択可)

	タテに回答↓	利用している施設
公共 スポーツ施設	体育館	☐
	グラウンド	☐
	プール(屋外)	☐
	プール(屋内)	☐
	トレーニング室	☐
	その他	☐
民間 スポーツ施設	体育館	☐
	グラウンド	☐
	プール(屋外)	☐
	プール(屋内)	☐
	トレーニング室	☐
	その他	☐
公立小中学校	体育館	☐
	グラウンド	☐
	プール	☐
	その他	☐
障害者 スポーツ専用 ・優先施設	体育館	☐
	小体育館(卓球室、訓練室等)	☐
	グラウンド	☐
	プール	☐
福祉施設・ 高齢者施設	体育館	☐
	小体育館(卓球室、訓練室等)	☐
	プール	☐
	その他	☐
特別支援学校	体育館	☐
	小体育館(卓球室、訓練室等)	☐
	グラウンド	☐
	プール	☐
その他の施設・場所	その他	☐
	自宅	☐
その他	近所(自宅近辺の道路、公園など)	☐
	その他1	☐
	その他2	☐
	その他3	☐

次へ >>

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

日常に関する調査

★Q10-1- *** ANS Q10260 ***.

障害のある *** TSC Q10250 *** が下記の施設でスポーツ・レクリエーションを行った日数を全部合わせると、1年間に何日くらいになりますか。(1つ選択)

ここに回答→		週に3日以上 (年151日以上)	週に1～2日 (年51日～150日)	月に1～3日 (年12日～50日)	3か月に1～2日 (年4日～11日)	年に1～3日	分からない
公共 スポーツ施設	体育館	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	グラウンド	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	プール(屋外)	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	プール(屋内)	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	トレーニング室	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	その他(*** ANS Q11211 ***)	☐	☐	☐	☐	☐	☐
民間 スポーツ施設	体育館	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	グラウンド	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	プール(屋外)	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	プール(屋内)	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	トレーニング室	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	その他(*** ANS Q11212 ***)	☐	☐	☐	☐	☐	☐
公立小中学校	体育館	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	グラウンド	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	プール	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	その他(*** ANS Q11213 ***)	☐	☐	☐	☐	☐	☐
障害者 スポーツ専用 ・優先施設	体育館	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	小体育館(卓球室、訓練室等)	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	グラウンド	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	プール	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	その他(*** ANS Q11214 ***)	☐	☐	☐	☐	☐	☐
福祉施設・ 高齢者施設	体育館	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	小体育館(卓球室、訓練室等)	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	プール	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	その他(*** ANS Q11215 ***)	☐	☐	☐	☐	☐	☐
特別支援学校	体育館	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	小体育館(卓球室、訓練室等)	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	グラウンド	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	プール	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	その他(*** ANS Q11216 ***)	☐	☐	☐	☐	☐	☐
その他の施設・場所	自宅	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	近所(自宅近辺の道路、公園など)	☐	☐	☐	☐	☐	☐
その他	その他1(*** ANS Q11217 ***)	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	その他2(*** ANS Q11218 ***)	☐	☐	☐	☐	☐	☐
	その他3(*** ANS Q11219 ***)	☐	☐	☐	☐	☐	☐

日常に関する調査

★Q11- *** ANS Q10260 *** .

障害のある *** TSC Q10250 *** の、現在のスポーツ・レクリエーションへの取り組みについて、
最も近いものを選んでください。(1つ選択)

- ☐ スポーツ・レクリエーションを行っており、満足している
- ☐ スポーツ・レクリエーションを行っているが、もっと行いたい
- ☐ スポーツ・レクリエーションを行いたいと思うができない
- ☐ 特にスポーツ・レクリエーションに関心はない

★Q12- *** ANS Q10260 *** .

障害のある *** TSC Q10250 *** の、スポーツ・レクリエーションの実施において障壁となっているものは何ですか。(複数選択可)
※スポーツ・レクリエーションを実施している場合はその課題、実施していない場合はその理由としてあてはまるものをお答えください。

- | | |
|---|--|
| ☐ 交通手段・移動手段がない | ☐ 時間がない |
| ☐ スポーツ・レクリエーションをできる場所がない | ☐ 体力がない |
| ☐ 施設がリニアフリーでない | ☐ 医者に止められている |
| ☐ 施設に利用を断られる | ☐ 障害に達したスポーツ・レクリエーションがない |
| ☐ スポーツ・レクリエーションがどこでできるのか情報が得られない | ☐ やりたいと思うスポーツ・レクリエーションがない |
| ☐ どんなスポーツ・レクリエーションをできるのか情報が得られない | ☐ スポーツ・レクリエーションが苦手である |
| ☐ 指導者がいない | ☐ スポーツ・レクリエーションでケガをするのではないかと心配である |
| ☐ 介助者がいない | ☐ 人の目が気になる |
| ☐ 仲間がいない | ☐ 一緒にスポーツ・レクリエーションをする人に迷惑をかけるのではないかと心配である |
| ☐ 家族の負担が大きい | ☐ その他 <input type="text"/> |
| ☐ 金銭的な余裕がない | ☐ 特になし |

次 < >>

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

日常に関する調査

★Q13- *** ANS Q10260 *** .

障害のある *** TSC Q10250 *** は、現在行っているスポーツ・レクリエーションも含めて、今後行いたいと思うスポーツ・レクリエーションがありますか。(複数選択可)

<球技やチームスポーツ>

- ☐ キャッチボール
- ☐ ソフトボール
- ☐ 野球
- ☐ グラウンド・ゴルフ
- ☐ ゴルフ(コース)
- ☐ ゴルフ(練習場)
- ☐ ゲートボール
- ☐ サッカー
- ☐ フットサル
- ☐ フットベースボール(キックベースボール)
- ☐ ソフトテニス(軟式テニス)
- ☐ テニス(硬式テニス)
- ☐ 卓球
- ☐ ドッジボール
- ☐ バスケットボール
- ☐ バドミントン
- ☐ バレーボール
- ☐ ソフトバレーボール
- ☐ フライングディスク(フリスビー)
- ☐ ボウリング
- ☐ ラグビー

<ロープを使うスポーツ>

- ☐ つなろりき
- ☐ なわとび

<体操・ダンス・トレーニング>

- ☐ エアロビックダンス
- ☐ 体操(軽い体操、ラジオ体操など)
- ☐ ダンス(社交ダンス、フォークダンス、フラダンスなど)
- ☐ ヨーガ
- ☐ 筋力トレーニング(マシントレーニング)
- ☐ 筋力トレーニング(ダンベル・自重のトレーニング)

<武道>

- ☐ 空手
- ☐ 柔道
- ☐ 太極拳

<海・マリンスポーツ>

- ☐ 海水浴
- ☐ スキューバダイビング

<野外・アウトドアスポーツ>

- ☐ キャンプ
- ☐ サイクリング
- ☐ 乗馬
- ☐ 釣り
- ☐ 登山
- ☐ ハイキング

<ウィンタースポーツ>

- ☐ アイススケート
- ☐ スキー
- ☐ スノーボード

<障害者スポーツ>

- ☐ グランドソフトボール(盲人野球)
- ☐ 車いすテニス
- ☐ ブラインドテニス
- ☐ 車いすバスケットボール
- ☐ ゴールボール
- ☐ シットイングバレーボール
- ☐ フロアバレーボール
- ☐ 卓球バレー
- ☐ サウンドテーブルテニス
- ☐ ティーボール
- ☐ ハンドサッカー
- ☐ ブラインドサッカー(ロービジョンフットサル含む)
- ☐ ふうせんバレー
- ☐ ボッチャ

<歩く・走る・泳ぐ>

- ☐ ウォーキング
- ☐ 散歩(ぶらぶら歩き)
- ☐ ジョギング・ランニング
- ☐ マラソン、駅伝などのロードレース
- ☐ 陸上競技
- ☐ アクアエクササイズ
- ☐ 水泳
- ☐ 水中歩行

- ☐ その他
- ☐ その他
- ☐ その他
- ☐ 特になし

次 >>

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

日常に関する調査

★Q14- *** ANS Q10260 ***.

障害のある *** TSC Q10250 *** は、現在、スポーツクラブや同好会・サークルに加入していますか。(1つ選択)

- ☐ 加入している
- ☐ 加入していない

次 ^ >>

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

日常に関する調査

★Q14-1- *** ANS Q10260 ***.

障害のある *** TSC Q10250 *** が加入している、そのスポーツクラブや同好会・サークルは、主にどのような人たちの集まりですか。(1つ選択)

※複数のスポーツクラブ・同好会・サークルに所属している場合は、最も多く参加しているものについてお答えください。

- ☐ 地域住民が中心となったクラブ・同好会・サークル
- ☐ 民間の会員制スポーツクラブやフィットネスクラブ
- ☐ 学校のOB・OGなどが中心となったクラブ・同好会・サークル
- ☐ 学校の運動部・クラブ・サークル(在校生のみ)
- ☐ 職場の仲間を中心としたクラブ・同好会・サークル
- ☐ 友人・知人が中心のクラブ・同好会・サークル
- ☐ その他

次 ^ >>

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

日常に関する調査

★Q14-2- *** ANS Q10260 ***.

障害のある *** TSC Q10250 *** が加入している、そのスポーツクラブや同好会・サークル(*** ANS Q11710 ***)の、障害者の参加状況についてお答えください。(1つ選択)

- ☐ 障害のある人のみが参加している
- ☐ 主に障害のある人が参加しているが、一部に障害のない人の参加もある
- ☐ 主に障害のない人が参加している

次 ^ >>

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

日常に関する調査

★Q15- *** ANS Q10260 ***.

障害のある *** TSC Q10250 *** は、過去1年間にスポーツを観戦したことがありますか？(それぞれ複数選択可)

※観戦した種目がない場合は、末尾の「観戦した種目はない」を選択してください。

タテに回答↓	直接スポーツの試合を観戦したことがある	テレビでスポーツの試合を観戦したことがある	インターネットでスポーツの試合を観戦したことがある
プロ野球(NPB)	☐	☐	☐
メジャーリーグ(アメリカ大リーグ)	☐	☐	☐
高校野球	☐	☐	☐
アマチュア野球(大学、社会人など)	☐	☐	☐
Jリーグ(J1、J2、J3)	☐	☐	☐
海外プロサッカー(欧州、南米など)	☐	☐	☐
サッカー日本代表試合(五輪代表含む)	☐	☐	☐
サッカー日本女子代表試合(なでしこジャパン)	☐	☐	☐
サッカー(高校、大学、JFLなど)	☐	☐	☐
プロバスケットボール(Bリーグ)	☐	☐	☐
海外プロバスケットボール(NBAなど)	☐	☐	☐
バスケットボール(高校、大学など)	☐	☐	☐
バレーボール(日本代表試合)	☐	☐	☐
バレーボール(高校、大学、Vリーグなど)	☐	☐	☐
タテに回答↓	直接スポーツの試合を観戦したことがある	テレビでスポーツの試合を観戦したことがある	インターネットでスポーツの試合を観戦したことがある
大相撲	☐	☐	☐
マラソン・駅伝	☐	☐	☐
ラグビー	☐	☐	☐
プロテニス	☐	☐	☐
プロゴルフ	☐	☐	☐
フィギュアスケート	☐	☐	☐
格闘技(ボクシング、総合格闘技など)	☐	☐	☐
F1やNASCARなど自動車レース	☐	☐	☐
その他1	☐	☐	☐
その他2	☐	☐	☐
その他3	☐	☐	☐
観戦した種目はない	☐	☐	☐

次へ >>

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

日常に関する調査

★Q16- *** ANS Q10260 ***.

障害のある *** TSC Q10250 *** のご家庭の世帯年収(税込)はおおよそどのくらいですか。(1つ選択)

※差し支えなければお知らせください。

- ☐ 収入はなかった
- ☐ 200万円未満
- ☐ 200万～400万円未満
- ☐ 400万～600万円未満
- ☐ 600万～800万円未満
- ☐ 800万～1,000万円未満
- ☐ 1,000万円以上
- ☐ わからない
- ☐ 答えたくない

次へ >>

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

ご回答ありがとうございました。

アンケートにご回答いただき誠にありがとうございました。

最後にこの画面を閉じてアンケートを終了してください。

今後ともよろしくお願いいたします。

アンケートに関するお問い合わせは、D.STYLEWEBまでお願いします。
D.STYLEWEB は、株式会社マージュが運営しています。
[個人情報保護方針](#)

Copyright© 2017 marsh Co.,Ltd. ALL Rights Reserved.

○著作権者 スポーツ庁 健康スポーツ課 障害者スポーツ振興室

(問合せ先) 〒100-8959 東京都千代田区霞ヶ関 3-2-2
TEL 03-5253-4111 (代表)

○発 行 元 公益財団法人 笹川スポーツ財団
〒107-0052 東京都港区赤坂 1-2-2
TEL 03-6229-5300

